

# 箱 崎 18

—箱崎遺跡第27次調査報告—

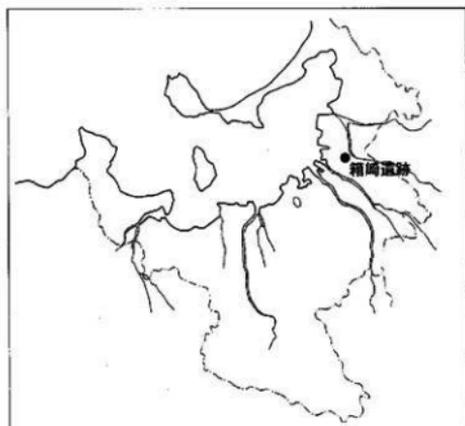
福岡市埋藏文化財調査報告書第812集

2004

福岡市教育委員会

HAKO ZAKI  
箱 崎 18

—箱崎遺跡第27次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第812集



2004

福岡市教育委員会



## 序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市におきましてはこの保護と活用に努めているところであります。

本書は東区馬山における都市計画道路馬山東浜線建設に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。調査の結果、多量の輸入陶磁器を含め、当地域の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。本書が埋蔵文化財保護のご理解と研究資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

## 例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が都市計画道路馬出東浜線建設に伴い、東区馬出5丁目地内において実施した箱崎遺跡群第27次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は中村啓太郎、上角智希、高木誠、福田匡朗、上田龍児、渡辺誠、安藤史郎が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は調査担当者の他、上田龍児、渡辺誠が行った。
4. 本書に掲載した挿図の製図は調査担当者の他、林由紀子、久家春美が行った。
5. 本書に掲載した遺構、遺物写真の撮影は調査担当者が行った。
6. 本調査に関わる記録、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
7. 本書の執筆はⅠ、Ⅱ、Ⅲ4を中村がⅡ、3を上角が行った。
8. 瓦経について、文化財整備課 三木氏のご教示を得た。
9. 本書の編集は上角の協力を得て中村が行った。

調査番号	0113	遺跡略号	HKZ-27
調査地番	福岡市東区馬出5丁目地内		
調査面積	1449㎡	調査期間	2001年6月7日～2002年2月10日

## 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	2
1. 位置と環境	2
III. 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. A区の調査	7
1) 井戸	7
2) 土坑・土墳墓	27
3) 溝	32
4) その他の出土遺物	33
5) 小結	34
3. B区の調査	39
1) 井戸	39
2) 土坑	39
3) その他の出土遺物	44
4) 小結	45
4. C区の調査	46
1) 井戸	46
2) 土坑・土墳墓（木棺墓）	60
3) 溝	75
4) その他の出土遺物	77
5) 小結	78

## 図版目次

- |      |                   |                            |
|------|-------------------|----------------------------|
| 図版 1 | (1) A区西半全景 (南東から) | (2) A区東半全景 (南西から)          |
| 図版 2 | (1) SE001 (北西から)  | (2) SE022土層 (北面から)         |
|      | (3) SE024 (南から)   | (4) SE049 (西から)            |
|      | (5) SK023 (西から)   | (6) SK033 (南から)            |
| 図版 3 | B区全景 (西から)        |                            |
| 図版 4 | (1) B区から西方を望む     | (2) B区から東方を望む              |
|      | (3) SE1087 (南東から) | (4) SK1088 (東から)           |
| 図版 5 | (1) 東側調査区全景 (西から) | (2) 西側調査区全景 (東から)          |
| 図版 6 | (1) SE2024 (北から)  | (2) SE2218 (北から)           |
|      | (3) SE2363 (北から)  | (4) SE2381・2382・2423 (北から) |
|      | (5) SE2461 (北から)  | (6) SE2471 (東から)           |
| 図版 7 | (1) SE2484 (東から)  | (2) SK2028 (西から)           |
|      | (3) SK2069 (東から)  | (4) SK2120 (西から)           |
|      | (5) SK2430 (北から)  | (6) SK2118 (西から)           |
| 図版 8 | (1) SK2238 (北から)  | (2) SK2263 (東から)           |
|      | (3) SK2264 (東から)  | (4) SK2386 (南から)           |
|      | (5) SK2409 (北から)  | (6) SK2419 (西から)           |
| 図版 9 | A区出土遺物            |                            |
| 図版10 | B, C区出土遺物         |                            |

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成10年6月24日、福岡市土木局東部建設第1課より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ都市計画道路馬出東浜線建設に伴う福岡市東区馬出・箱崎地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が東側では周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれ、西側では元寇防塁の推定ラインにかかることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。用地買収が行われた地点より試掘調査を順次行い、その結果、分布地図上の箱崎遺跡とほぼ同じ範囲で井戸、上坑、ピット等の遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能であり、恒久的施設との判断から、調査可能な面積がある程度まとまって確保できる平成13年度より調査を開始することとなった。調査地点は買収地の関係から3地点に分かれ、調査順にA区、B区、C区とした。調査は平成13年6月7日より開始し、平成14年2月10日に終了した。

## 2. 調査体制

事業主体 福岡市土木局東部建設第1課  
調査主体 福岡市教育委員会  
調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男  
調査第2係長 田中壽夫 力武卓治（前任）  
事前審査 事前審査係長 池崎譲二 田中壽夫（前任）  
事前審査係 田上勇一郎 大塚紀宣（前任）瀧本正志（前任）中村啓太郎（前任）  
調査業務 文化財整備課管理係 御手洗清  
調査担当 調査第2係 中村啓太郎 上角智希  
調査員 高木誠 堀田臣明  
発掘作業 井科国彦 小川秀雄 岡田豊 徳永栄彦 長野嘉一 吹春哲男 前田勉 宮崎雅秀  
井上ヨシ子 尊田紹代 徳山孝恵 富永美樹 田中フキ子 光安晶子 安田光代  
上田龍児 渡辺誠 西田絵美 田端名穂子 中村文美 中村幸子 花田剛子  
安藤史郎 阿部純子 稲崎龍也 崎村雄介 永松弘恵 野出トヨ子 花田昌代  
藤澤義一 中村桂子 仲谷真一郎  
整理作業 林山紀子 久家春美 篠原明美 黒柳恵美 西嶋奈美

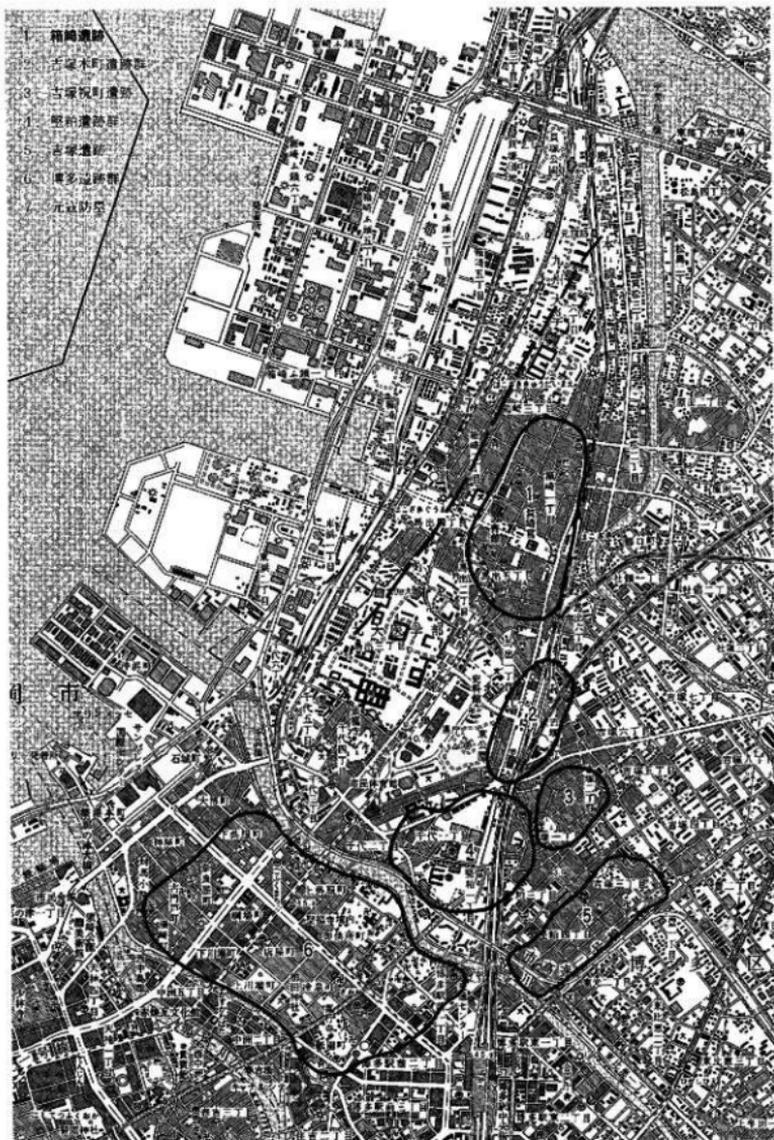
## II. 位置と環境

### 1. 位置と環境

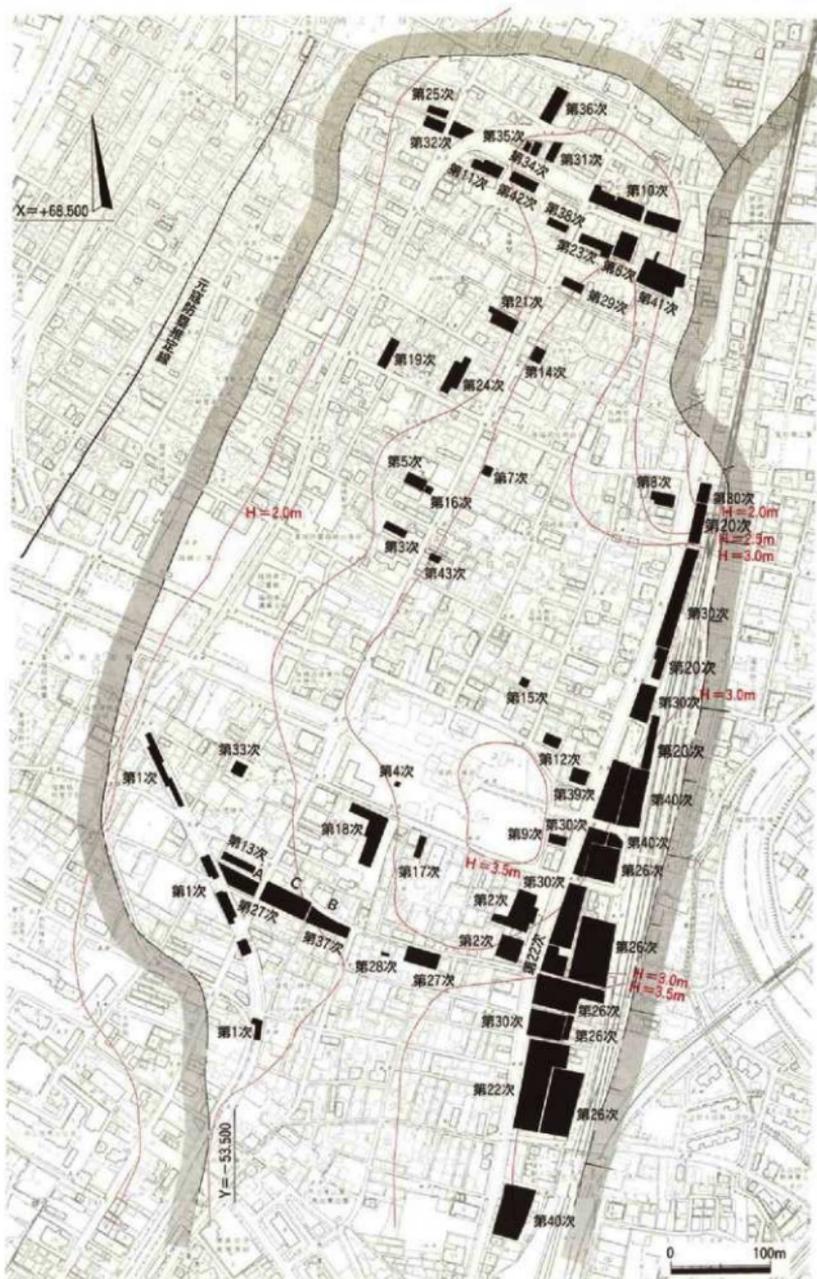
箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の博多湾に面し、南北に延びる砂丘上に位置する。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、木遺跡付近から室見川河口付近まで分布しており、本遺跡を含め多くの遺跡が立地している。砂丘の形成時期は考古学的及び地質学的調査成果から縄文時代後期以降と考えられている。本遺跡が分布しているのは概ね南北1000m、東西500mの範囲で標高2.0～3.5mを測る。

本遺跡は1983年の地下鉄建設に伴う第1次調査以来、40次を超える調査が行われているが、調査が本格化するのは1990年代以降で、縄文時代晩期～近世に至る各時期の遺構、遺物が確認されている。縄文時代晩期～弥生時代は第6次調査において出土した磨製石斧が最も古く、縄文時代晩期～弥生時代前期初頭のものと考えられるが、該期の遺構に伴わない。弥生時代中期～後期の土器は18・30次調査で確認されている。古墳時代は竪穴住居や円形及び方形溝溝葬等が確認されている。8次調査では飯鍋壺を多量に出土しており、生業を考える上で興味深い。奈良時代になると遺物は散見されるものの遺構については判然としない。10世紀に入ると以降の箱崎遺跡の中心となる宮崎宮が創建される。延喜21年に八幡神の託宣により、穂波郡大分宮から遷座して延長元年に建てられたとされる。それは大分宮の節会に参詣する大宰府の役人が門宮に不敬を行う、郡司百姓等が饗膳するのに険しい山越えをしなければならない、放生会を行うのに海ではないため不適当であるという3つの理由からとされる。しかし実際のところ、新羅に対する宗教的防衛や、この地が対外貿易の地点として重要であったことも大きく作用したと考えられている。この時期の遺構は後の時期に比べさほど多くなく、宮崎宮の東を中心に分布する。これ以降遺跡は西側に拡大して行き、13世紀代以降にはほぼ全域に分布する。また32、36次調査によって遺跡の範囲が北及び北東側に拡大することが確認されている。

周辺の遺跡をみると南へ続く砂丘上に古塚本町遺跡群、古塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が存在している。吉塚本町遺跡群は弥生時代～古代にかけての遺物、遺構が確認されている。出土する瓦や硯から公的施設が存在が考えられている。吉塚祝町遺跡は道路建設に伴って1996年に確認された遺跡である。遺跡を縦断するように行われた第1次調査では弥生時代から中世に至る各時期の遺構が確認され、弥生時代の甕棺墓、古墳時代の住居址、横穴式石室、石棺蓋、土墳墓、古代～中世の集落が検出されており、古代においては越州系青磁が多量に出土しており注目されている。中世については13世紀～14世紀前半を中心に栄え、それ以降急速に衰退する。堅粕遺跡群は吉塚本町遺跡群の南に位置し、弥生時代～古代にかけての遺構が確認されている。北側に弥生時代～古墳時代の遺構が集中し、南側に古墳時代後期から古代の遺構が多くみられる。古代においては越州系青磁、緑釉陶器、墨書土器等の出土遺物から公的施設が存在する可能性が考えられている。吉塚遺跡群は吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群の南東に位置し、弥生時代～近世に至る遺物、遺構が検出されている。特筆すべき遺物として貨幣の出土が挙げられる。吉塚遺跡群の南には国際貿易都市として中世を代表する遺跡の一つであり、箱崎遺跡と関係の深い博多遺跡群が位置する。出土する輸入陶磁器類は質、量共に他を圧倒している。調査はすでに140次を超え、弥生時代～近世に至る遺構、遺物が確認されている。



第1图 周辺道跡分布图 (1/25,000)



第2图 箱崎道跡調査区位置図 (1/5,000)

調査次数	所在地	面積	調査期間	時期	主な遺構	報告書
第1次	高田5丁目地内	500㎡	1983.7.4～12.18	10世紀後半～13世紀	井戸 土坑 溝 埋戻遺構	第139号
第2次	稲崎1丁目18～20号	150㎡	1985.11.22～1987.1.20	10世紀後半～15世紀	建物地盤 遺物石張り遺構 井戸 土坑 溝 敷土遺構	第197号(集)
第3次	稲崎1丁目2731-1	150㎡	1990.1.09～2.28	12世紀中頃～15世紀	井戸 土坑 溝	第261号
第4次	稲崎1丁目2544		1989.7.5	11世紀	土坑(瓦葺)	年報Vol.4
第5次	稲崎1丁目254-27	210㎡	1991.9.9～10.20	12世紀～15世紀	板瓦付礎物 溝 井戸 土坑 埋戻遺構	第273号
第6次	稲崎3丁目2437-1, 4	430㎡	1994.10.29～1995.1.31	10世紀後半～13世紀	井戸 土坑 溝	第159号
第7次	稲崎1丁目2711号	85㎡	1994.11.15～12.27	12世紀前半～13世紀	井戸 土坑	第458号
第8次	稲崎1丁目2549 1号	225㎡	1995.10.1～11.14	古墳時代 12世紀中頃～13世紀	古墳時代の築穴住居 土坑 中門の溝 井戸 土坑	第391号
第9次	稲崎1丁目1955-1	191㎡	1996.10.2～10.25	11世紀～13世紀	井戸 土坑 溝	第356号
第10次	稲崎3丁目地内	1900㎡	1996.11.11～1997.2.31	12世紀前半～13世紀	井戸 土坑 溝	第551号
第11次	稲崎3丁目2266-1号	385㎡	1997.4.30～6.27	12世紀後半～14世紀	井戸 土坑 ビット	第392号
第12次	稲崎1丁目2660-1, 3	155㎡	1997.8.19～9.22	11世紀～13世紀	井戸 土坑 溝 埋戻遺構	整理中
第13次	高田5丁目520+521	297㎡	1997.10.12～12.2	15世紀	竪立柱礎物 井戸 土坑 溝	第500号
第14次	稲崎1丁目28-15	36㎡	1998.4.2～9.23	12世紀後半～14世紀前半	土坑 溝	第623号
第15次	稲崎1丁目2815	36㎡	1998.5.25～6.5	11世紀後半～12世紀	土坑 溝	第816号
第16次	稲崎1丁目2875	66㎡	1999.1.19～1.29	11世紀～13世紀	井戸 土坑	第703号
第17次	稲崎1丁目29-10	49㎡	1999.3.19～3.31	12世紀中頃～17世紀	土坑 溝 ビット	第704号
第18次	高田5丁目410	920㎡	1999.6.14～9.28	12世紀前半～16世紀	井戸 土坑 溝	第684号
第19次	深田3丁目2940-1	139㎡	1999.7.29～8.27	12世紀後半～14世紀	竪立柱礎物 井戸 土坑 溝	第664号
第20次	稲崎1丁目地内	682㎡	1999.12.19～2000.3.31	古墳時代 11～13世紀	古墳時代の築穴住居 中門の溝 井戸 土坑 溝 埋戻遺構	第765号
第21次	稲崎1丁目3489	545㎡ (2基)	2000.3.29～6.20	12世紀中頃～14世紀	竪立柱礎物 井戸 土坑 溝 埋戻遺構	第785号
第22次	高田5丁目・高田7丁目	2976㎡	2000.7.24～2001.3.31	古墳時代 古代末～中世	古墳時代の築穴住居 埋戻遺構 古代末～中世の溝 井戸 土坑 埋戻遺構	第811号
第23次	稲崎3丁目2464	188㎡	2000.9.29～2000.11.2	13世紀～17世紀	井戸 土坑	第794号
第24次	高田5丁目2811号	397㎡	2000.10.23～2001.1.31	12世紀後半～14世紀	井戸 土坑 木桁板	第768号
第25次	稲崎3丁目地内	87㎡	2001.4.16～4.26	13世紀末～14世紀	土坑	整理中
第26次	稲崎1丁目449号	535㎡	2001.5.3～2002.3.29	古墳時代 11～13世紀	古墳時代の築穴住居 中門の溝 井戸 土坑 埋戻遺構	第816号
第27次	高田5丁目地内	1449㎡	2001.6.7～2002.3.10	12世紀～古墳	井戸 土坑 溝 埋戻遺構	第812号
第28次	高田5丁目24-6	41㎡	2001.7.20～7.31	中世前半	土坑 ビット	整理中
第29次	稲崎3丁目288号	59㎡	2002.4.1～2002.4.26	12世紀～13世紀	土坑 溝 池状遺構	第812号
第30次	稲崎1丁目地内	4997㎡	2002.4.9～2003.5.13	古墳時代 古代末～中世	古墳時代の築穴住居 古代末～中世 竪立柱礎物 井戸 土坑 溝	整理中
第31次	稲崎3丁目358-1	80㎡	2002.5.9～2002.6.14	12世紀～13世紀	井戸 土坑 溝	第812号
第32次	稲崎3丁目地内	412㎡	2002.4.22～9.20	13世紀～	井戸 土坑 溝 埋戻遺構	整理中
第33次	高田5丁目502+503	160㎡	2002.9.24～10.5	12世紀～	井戸 土坑 溝 埋戻遺構	整理中
第34次	稲崎3丁目256-1	70㎡	2002.11.14～12.2	12世紀後半～14世紀	井戸 土坑	整理中
第35次	深田3丁目9-33	32㎡	2002.12.2～12.16	13世紀後半～14世紀	井戸 土坑	整理中
第36次	稲崎3丁目2560	139㎡	2002.12.11～2003.2.21	14世紀～15世紀	井戸 土坑 溝	整理中
第37次	高田5丁目49号	493㎡	2002.12.12～2003.3.31	12世紀～	井戸 土坑 溝	整理中
第38次	稲崎3丁目9-40	80㎡	2003.2.3～2.8	13世紀～14世紀	井戸 土坑	第814号
第39次	稲崎1丁目2031号	149㎡	2003.3.19～5.9	12世紀	井戸 土坑 溝	整理中
第40次	高田5丁目市内 高田1丁目300	2910㎡	2003.5.14～	古生代後期 古墳時代 10～15世紀	井戸 土坑 溝 竪立柱礎物 木桁板 方形柱の溝 円形竪穴状遺構	整理中
第41次	高田5丁目2420号	1900㎡	2003.6.16～12.31	12世紀後半～13世紀	井戸 土坑 溝 埋戻遺構	整理中
第42次	稲崎1丁目	200㎡	2003.10.21～2004.1.21	12～14世紀	井戸 土坑 溝 方形竪穴状遺構	整理中
第43次	稲崎1丁目7997 1	83㎡	2003.11.21～12.3	11世紀～13世紀	土坑 ビット	整理中

第1表 調査区一覽

### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

今回報告する箱崎遺跡第27次調査は箱崎遺跡の南を東西に横断するように計画された都市計画道路馬出東浜線建設に伴うものである。建設道路が遺跡にかかる東西方向の長さは約550mと考えられるが、この区間の用地買収が数年に渡って行われるため、先行して買収された地点から試掘調査及び本調査を随時行うこととなった。

尚、試掘調査の結果、分布地図上の箱崎遺跡内では遺構が確認されているが元寇防塁については現時点では確認されていない。

調査初年度となる平成13年度は第2図に示した3地点の調査が行われた。調査地点は調査順にA区、B区、C区とした。調査は平成13年6月7日から重機によるA区の表土剥ぎから開始した。廃土処理を調査予定地内で行わざるを得なかったため、C区に4tダンプで廃土を搬出し仮置きした。その後人力による遺構掘削、実測、写真撮影、遺物取り上げ等を行い、埋め戻しについては続いて剝削を行ったB区の表土剥ぎで発生したその廃土で埋め戻した。B区もA区同様の手順で進み、埋め戻しはC区に仮置きされた廃土を使用して行った。C区は他の2地点に比べ面積が大きいため調査対象の東部分約7割を先行して掘削し、その廃土をA区に仮置きし、その後反転して西側の調査を行い、平成14年2月10日に終了した。

遺構番号はA区を1～、B区を1001～、C区を2001から付し、遺構の性格に関わらず通し番号とした。このため1001及び2001までの間に欠番が生じている。

A区の基本層序は現地表より第1層 表土・客土、第2層 オリーブ褐色砂質土、第3層 黒褐色砂質土、第4層 褐色砂となり、遺構検出面の地山である黄褐色砂で標高1.8mを測る。

本来、遺構は地山の上層の第3、4層から掘り込まれるものが多いが、平面での検出が困難であるため地山である黄褐色砂で検出し、1面の調査を行った。検出した遺構は井戸、土塙墓、土坑、溝、柱穴等である。

B区の基本層序は現地表より第1層 表土、第2層 橙色細砂(盛土)、第3層 黒褐色土、第4層 暗褐色砂質土、第5層 褐色砂質土となり、遺構検出面の地山である黄褐色砂は東で標高2.4m、西で標高2.8mを測る。A区同様本来、遺構は地山の上層の5層上面から掘り込まれるものが多いが、平面での検出が困難であるため地山である黄褐色砂で検出し、1面の調査を行った。検出した遺構は井戸、土坑、柱穴等である。

C区の基本層序は現地表より第1層 表土・客土、第2層 オリーブ褐色砂質土、第3層黒褐色砂質土、第4層 褐色砂となり、遺構検出面の地山である明黄褐色砂で標高2.4～2.6mを測る。

A、B区同様本来、上層の第3、4層から掘り込まれるものが多いが、地山である明黄褐色砂で検出し、1面の調査を行った。検出した遺構は井戸、木棺墓、土坑、溝、柱穴等である。

調査面積はA区が290㎡、B区が340㎡、C区が819㎡を測り、合計1449㎡を測る。各区とも調査による外柵を設置し、安全対策を行ったため、調査対象面積に対して調査面積は少ないものとなった。

## 2. A区の調査

A区の調査は平成13年6月7日から同年9月14日にかけて実施した。開発面積は630㎡であるが、地質が砂質土のため法面を緩やかにとる必要があり、実際に調査できた面積は290㎡である。

A区では中世（13世紀代）から近世にかけての集落を発見した。主な検出遺構は井戸22基、土坑44基（うち土坑基3基）、溝3条、柱穴多数である。調査区西側では井戸が集中して検出され、井戸枠の材質、掘方の形態で幾つかのタイプに分類できる。逆に調査区東側には柱穴や小土坑が多い。柱穴には根石が残るものもある。柱穴が多くて個々の掘立柱建物のプランは明らかにできなかったが、溝と平行・直交する方位に軸をとる柱穴列が複数認められる。それらをもとに当該期の町割りを復元できた。

報告にあたり遺構の位置を示すために調査区に10m四方のグリッドをかけ、横にA・B、縦に1・2・3・4の番号を付して、例えばA-1区のように表記している（第4図）。

### 1) 井戸（SE）

A区、とくにその西半では22基の井戸が重複しながら密集して検出された。井戸枠の材質、掘方の形態からいくつかのタイプに分類できる。近代のものも含まれるが、多くの井戸が密集するという特異な分布が本調査区の特徴でもあり、すべての井戸について報告する。

#### SE001（第5図）

A-2区で検出した。掘方は検出面で径3.2mを測り、掘方埋土は橙～黄褐色のよごれた細砂である。検出時に井筒の円形プランが確認できた。井筒埋土は暗褐色砂質土で炭化物をわずかに含む。掘方はまず検出面から140cm下の標高0.4m付近まで大きく掘って底に径2.0mほどの楕円形の平坦面を設ける。次に平坦面の南寄りに径60～70cm、深さ約70cmの穴を掘り井筒を据える。井筒を完掘したが部材はまったく出土しなかった。おそらく木桶であろう。標高0.1mで湧水し、井筒の最下層20cmは黒色シルト質土が堆積していた。近世の染付・瓦や石が少量出土した。

#### SE002（第5図）

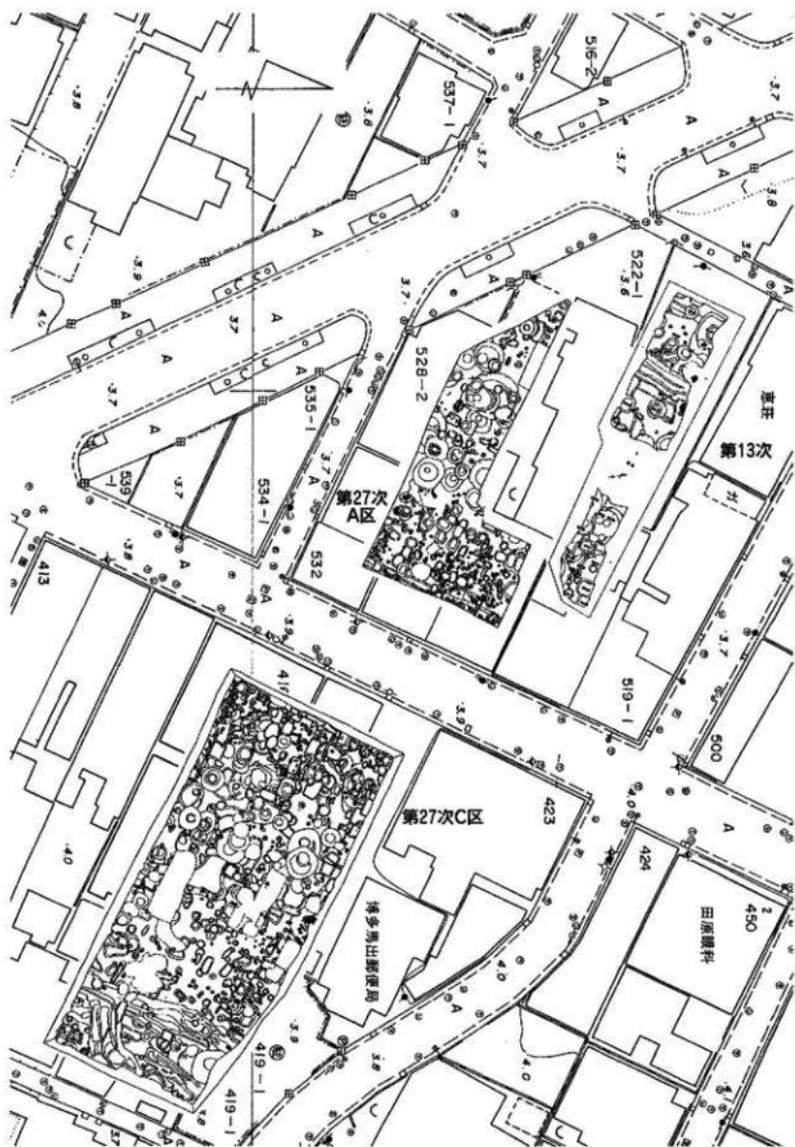
A-2区で検出した近現代の井戸である。径70cmのコンクリート管を井筒とし、赤褐色の土管が2本ついたコンクリート蓋を被せる。汲み上げポンプ式の井戸であろう。

#### SE017（第5図）

A-3区で検出した。掘方は検出面で径1.5～1.7mを測り、深さ130cmの標高0.5mまで直に掘り下げる。井筒プランは検出面から20cmほど下げた段階で確認でき、井筒埋土が黒褐色～暗褐色土、掘方埋土が赤褐色粗砂である。底面で木製桶を確認したが、中ほどの高さでは瓦が数点立った状態で出土しており、上方が瓦組み、下方が桶組みの複合型の井戸であった可能性が高い。瓦はコンテナ1箱分出土した。標高0.6m付近で湧水し、井筒は完掘していない。土器はほとんど出土しなかった。

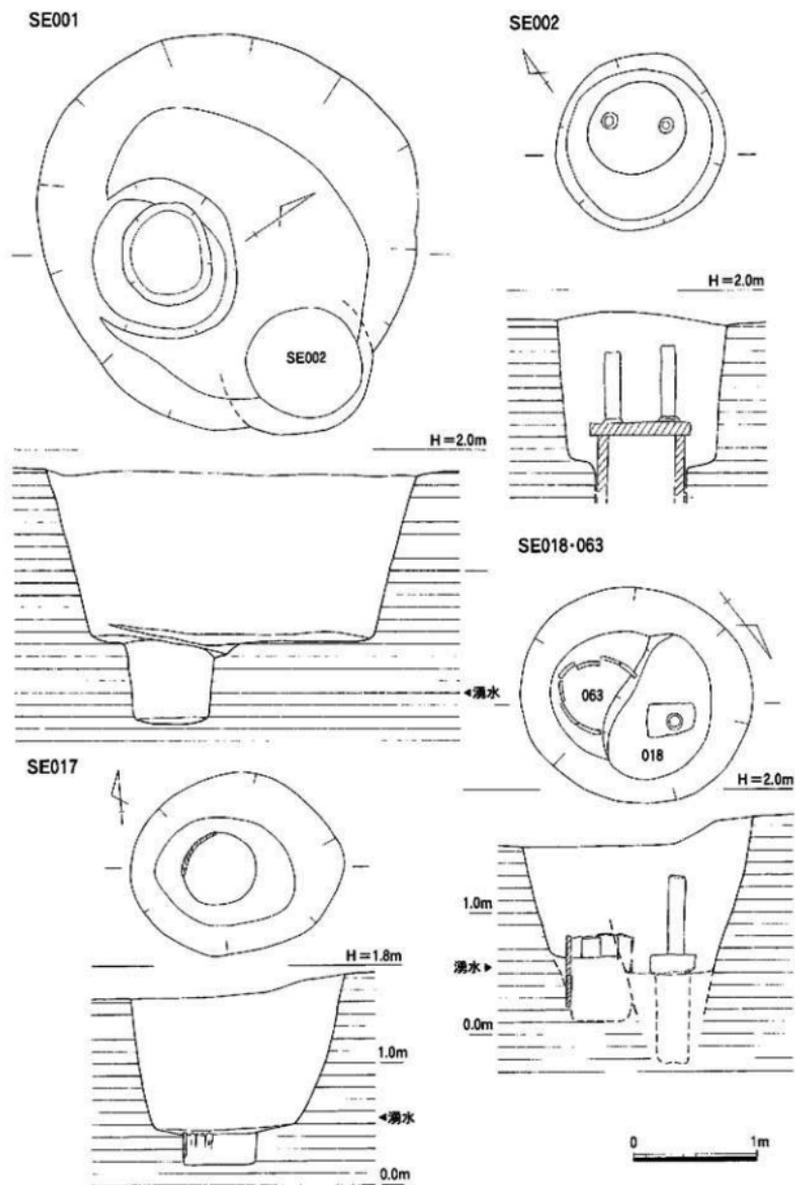
#### SE018（第5図）

A-3区で検出した。SE063を切っている。コンクリート製の井筒に土管をつけた蓋を被せる近現代の井戸である。



第3图 A区位置图 (1/500)





第5图 SE001・002・017・018・063实测图(1/40)

#### SE019 (第6図)

A-3区で検出した。掘方は検出面で径3.0~3.3mを測る。深さ1mの標高0.7mの高さで井筒の瓦が組まれた状態で確認できた。瓦は8枚で円形になり、3段確認した。さらに瓦の井筒に赤褐色の土管をつけたコンクリート蓋が被せてあった。SE002・018と同様のものである。しかし、少なくとも近代以降にはこれほど大きな掘方をつくる必要性はない。かといって、掘方底の平坦面にはほかの井筒は見当たらない。したがって、互組みの井戸を近現代にポンプ式井戸に改修したものと考えている。出土遺物は中世の遺物も多く含んでいるが、この井戸がつくられた時期は近世であろう。

#### 出土遺物 (第6図)

中世の遺物(1~3、6~11)と近世の遺物(4、5、12~17)が混じっている。

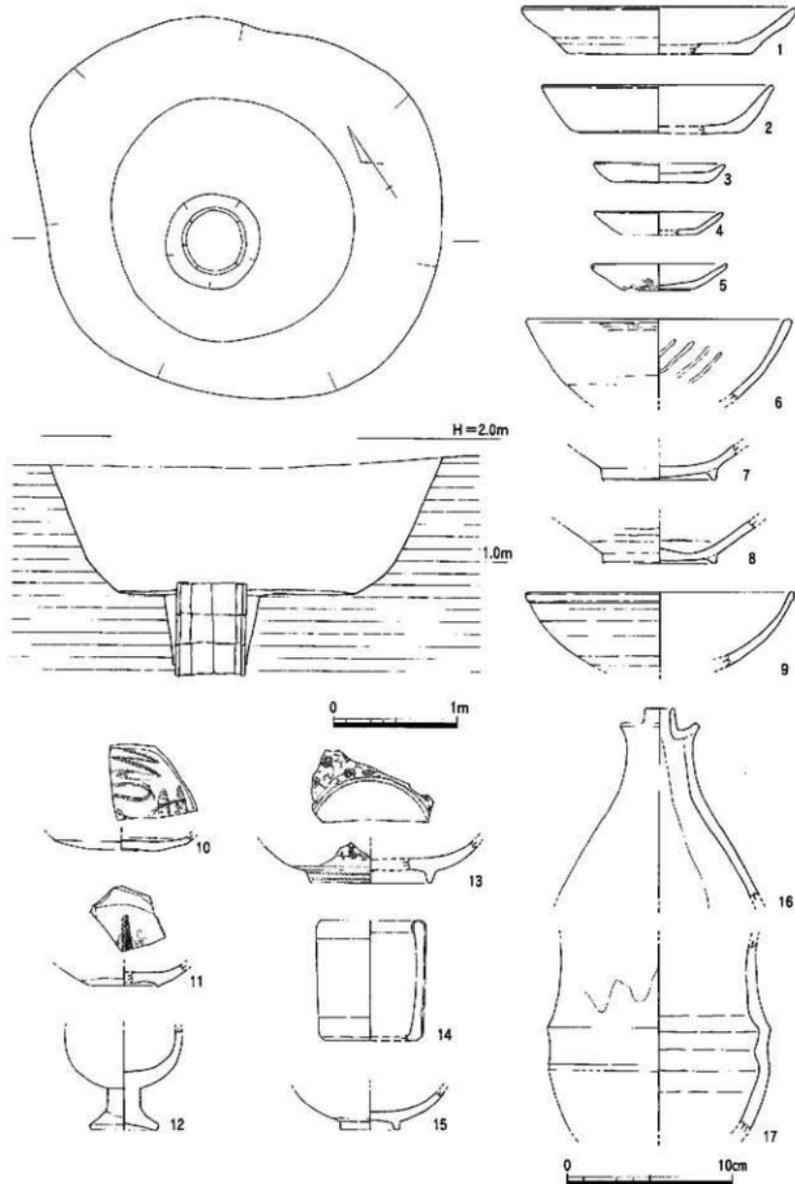
1、2は土師器の坏である。底部糸切り離して、内底に一定方向の静止指ナデがみられる。法量は復元値で1が口径16.6cm、器高2.9cm、底径11.2cm、2が口径14.0cm、器高2.9cm、底径9.8cmを測る。3~5は土師器の小皿である。3、4は底部糸切りで、3は内底に一定方向の静止指ナデがみられる。4は器壁が非常に薄い。5は底部が糸切りではなく平滑である。体部との境に小さな段を有する。体部は回転横ナデ後に静止横ナデをおこなう。胎土は精良で器壁は非常に薄い。法量(口径・器高・底径)は復元値で、3が8.0-1.2-5.9cm、4が7.8-1.4-4.4cm、5が8.2-1.6-4.1cmを測る。6~8は瓦器碗である。6は内面を平滑になてた後まばらに左下がりのミガキ、外面は横ナデで口縁端部のみミガキを施す。8は内面見込に高台径ほどの輪状の痕跡がついており、重ね焼きによるものか。9は白磁碗Ⅱ-1類である。小さな玉縁口縁で胎土は黄灰色で精緻、焼成も良好。外面は回転ヘラ削りを施す。10は同安窯系青磁Ⅰ類である。内面にヘラ描きの文様とジグザグ状の菊点描文を描く。釉調は緑灰色である。11は明代の染付皿である。碁笥底の小野分類ⅢC群。12は白磁の仏飯器である。13は染付皿である。底径7.2cmを測り、疊付のみ無軸である。14は青磁の香炉である。釉調は淡緑色で内面は露胎。15は陶器の碗で、釉調は浅黄橙色である。16は陶器の油差しである。注口が頂部につき垂れた油を受けるための縁と中に戻すための孔がある。黒色の鉄油を掛ける。18世紀後半以降に出現する型式。17は陶器の壺である。

#### SE022 (第7図)

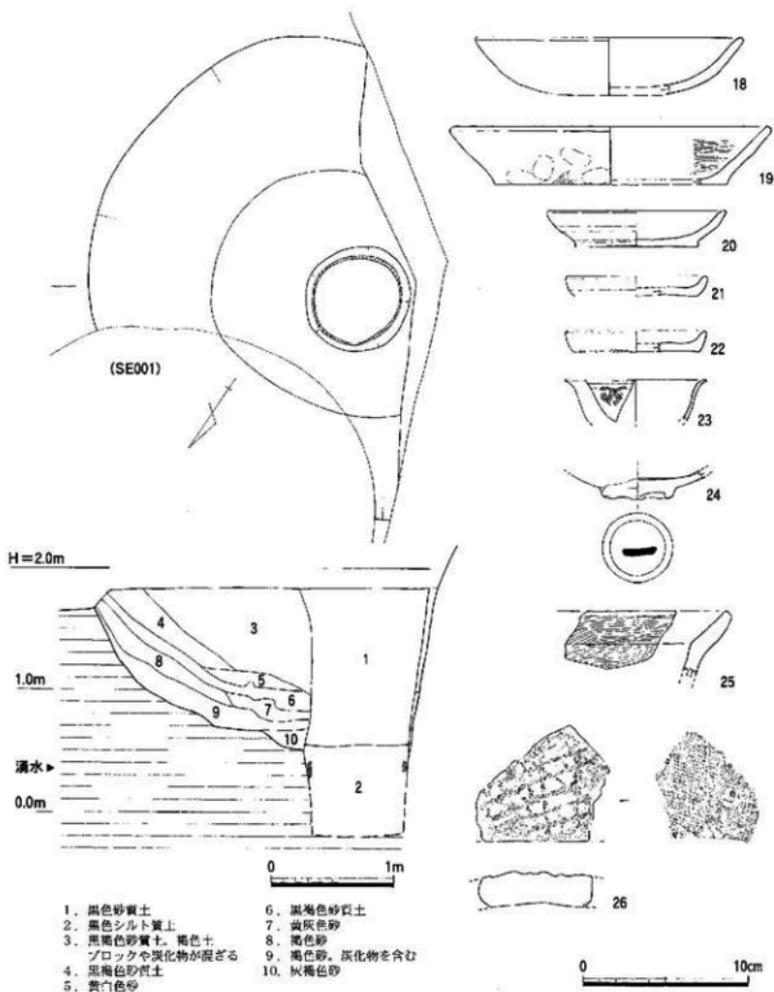
A-2区で検出した。検出面での掘方半径は2.2mで、深さ130cmの標高0.6mまですり鉢状に掘り下げ、底に平坦面を設ける。そこから井筒部分だけをさらに掘り下げる。標高0.4m付近で湧水し、このレベルで桶材を確認した。湧水のため井筒は完掘できなかったがボーリング棒で確認したところ、底は標高-0.2mあたりである。出土遺物よりこの井戸の時期は15世紀頃に位置づけられる。

#### 出土遺物 (第7図)

18~22は土師器である。18、19は皿である。18は底部が遺存しないが、体部との境は丸みを帯びる。復元口径16.2cm。19は内面が横方向の板ナデ、外面は横ナデするが指頭痕が多く残る。復元口径19.4cm、器高3.5cm、底径14.0cmを測る。20は坏である。底部糸切りで復元口径10.8cm、器高2.2cm、底径7.5cmを測る。21、22は小皿である。いずれも底部糸切りで、体部は直に立ち上がり肉厚である。23は染付の小碗である。口縁部は端反り器壁は薄い。口唇部に鉄輪で口紅を施す。24は白磁皿である。森田分類C類で、高台に4つの抉りを入れる。高台内に「」と墨書されている。釉調は乳白色。15世紀。25は土師の口縁部である。外面に煤が付着する。26は平瓦である。凸面にワッフル状の斜格子叩き、内面に布目痕が見られる。



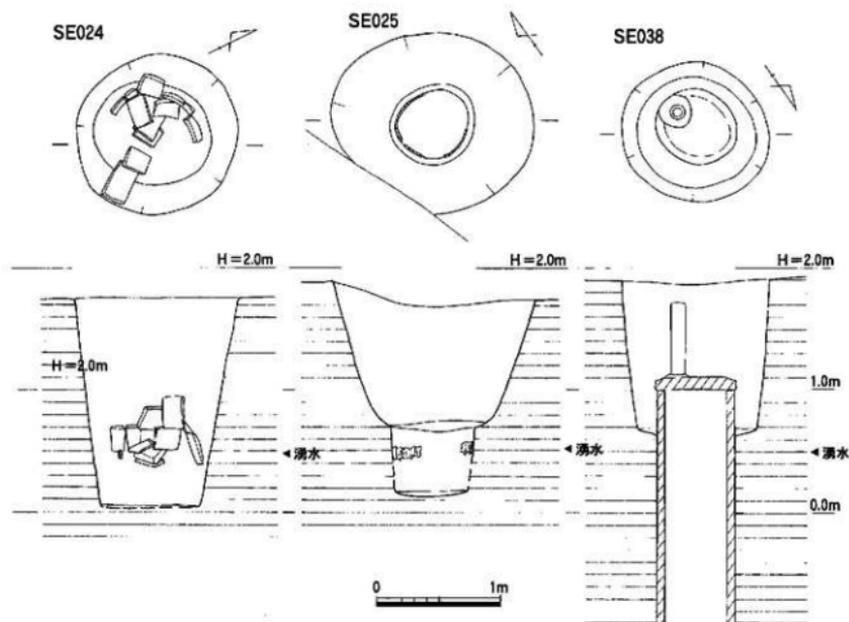
第6図 SE019および出上遺物実測図 (1/40、1/3)



第7図 SE022および出土遺物実測図 (1/40、1/3)

SE024 (第8図)

A-2区で検出した。竈方は検出面で直径1.3mを測り、垂直に近い傾斜で掘り下げている。井筒は瓦組みである。埋土上層から瓦が出土していたが、下層では瓦が組まれた状態で出土した。図示したものがそれで、これより下では瓦は出土せず、代わりに最下段の瓦の内側に一部重なる状態で木桶の



第8図 SE024・025・038実測図(1/40)

一帯を検出した。上部が瓦組み、下部が桶の複合型の井戸である。標高0.5mで湧水し、ボーリング棒で確認した井筒底のレベルはほぼ標高0.0mである。

#### SE025 (第8図)

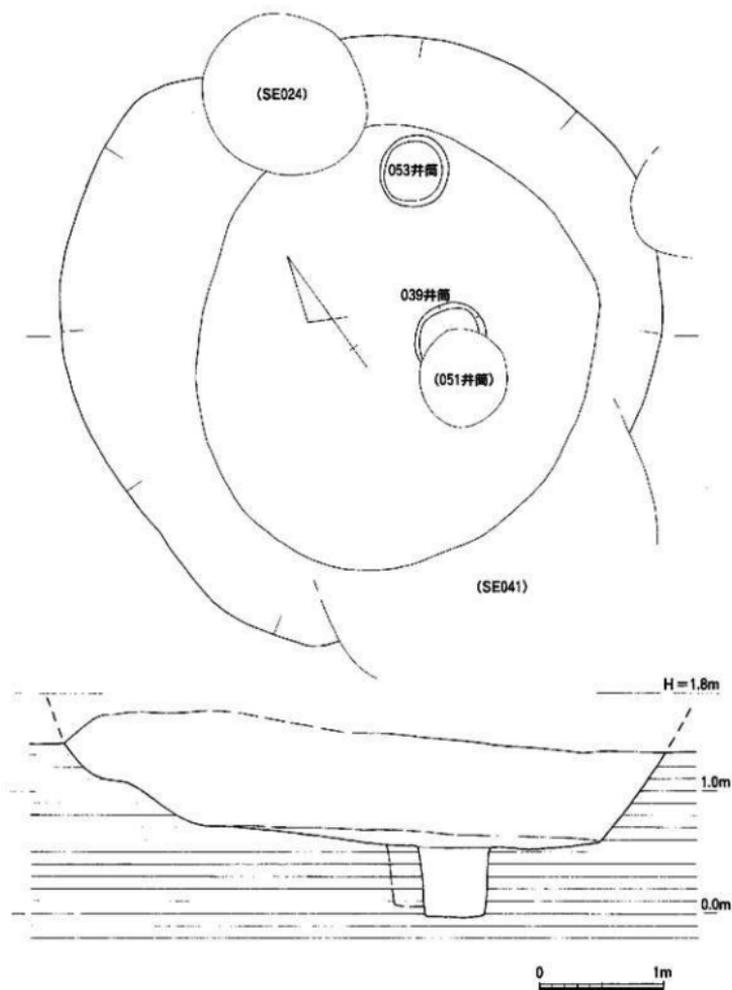
A-1区で検出した。掘方は検出面で直径1.6m、壁は急傾斜で、掘方埋土は灰褐色砂である。検出面では井筒のプランを確認できず、半分ほど下げた段階でようやく黒色砂の井筒を検出した。標高0.5mで湧水し、このレベルで木桶の木質を検出した。井筒は完掘できなかったが、ボーリング棒で確認した底のレベルは標高0.2m付近である。遺物はほとんど出土しなかった。

#### SE038 (第8図)

A-3区で検出した近現代の汲み上げポンプ式の井戸である。コンクリートの井筒に土管のついたコンクリート蓋を被せる。

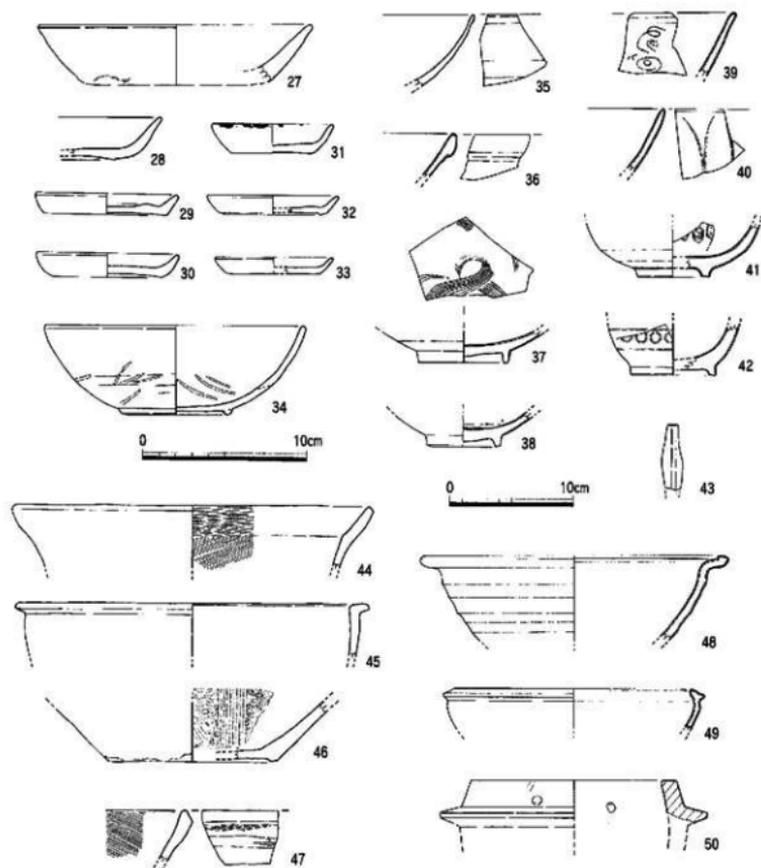
#### SE039 (第9図)

A-2区で検出した。多くの井戸に切られていることと、埋土が複雑だったため平面プランの確認が困難であり、検出面から40cm程度下げてようやく掘方のプランが判明した。掘方は直径4.7~5.0mと



第9図 SE039・053実測図 (1/40)

大きく、標高0.8mの高さまですり鉢状に掘り下げ、底に直径3.2～3.6mの平坦面を設ける。それから中央付近に井筒の部分だけ円形に掘り込み井筒を据える。井筒の材は確認できなかったが、木製の桶であろう。井筒底の埋土は黒色砂質土で、底のレベルは標高0.0mである。出土遺物より12世紀後半から13世紀頃に位置づけられる。



※27～43は1/3、44～50は1/4

第10図 SE039出土遺物実測図 (1/3、1/4)

出土遺物 (第10図)

27、28は土師器の坏である。27は復元鉢で口径16.6cm、器高3.7cm、底径11.2cmを測る。29～33は土師器の小皿である。いずれも糸切りで、口径7.2～8.6cm、器高1.1～1.8cm、底径5.0～7.3cmを測る。31は灯芯油痕があり、灯明皿として使用されたものである。34は瓦器碗である。内外面とも横ナデの後、一部にミガキを施す。内面のナデはとくに丁寧に器面が平滑である。高台は丸みを帯びる。胎土は精良で焼成も良好。復元値で口径15.8cm、器高5.5cm、底径7.0cmを測る。35～38は白磁碗である。35は小さな玉縁口縁で黄白色の釉を掛ける。碗Ⅱ類。36は玉縁口縁の碗Ⅳ類である。37は碗で見込に楷抜き文を施す。外底は露胎。高台がやや低いV類か。復元底径5.4cmを測る。38は見込の釉を輪状に掻き

取る碗Ⅶ類である。釉は灰白色で外底は露胎である。39・40は龍泉窯系青磁碗である。39は碗Ⅰ-4類。胎土は灰色で緻密、内面に飛雲文を施し釉はオリブ緑色を呈する。40は碗Ⅱ-a類。外面に蓮弁文を施しオリブ緑色の釉が厚く掛かる。41・42は朝鮮王朝の象嵌磁器である。41は碗で内面に白化粧土で象嵌を施す。全面に施釉する。底径4.4cm。42は外面に竹管文の模様を白化粧土で象嵌する。壺付のみ無釉で高台内側面に砂粒が付着する。底径5.2cm。43は管状土甗である。44・45は土甗である。44は口縁部を外反させ内側に稜を有する。内面は横刷毛および左下がりの刷毛目調整、外面には煤が厚く付着する。復元口径29.4cmを測る。45は口縁端部を外側にL字に折り曲げている。内面は横ナデ、外面に煤が付着する。復元口径28.8cm。46は焼締陶器の描鉢である。底部をわずかに削り出す。復元底径13.8cmを測る。47は瓦質の鉢のⅡ縁部である。内面は右下がりの刷毛目、外面は横刷毛のち横ナデを施す。灰白色。48・49は陶器の鉢である。48は水挽き痕が顕著で口縁部を外湾させ、口縁部上面に段を有する。釉調は黄白色で復元口径25.0cmを測る。近世の流入品だろう。49は口縁端部をT字状につくり、緑灰色釉を掛ける。復元口径21.2cm。博多分類の陶器鉢27類。50は滑石製石鍋である。口縁直下に削り出した罫がめぐり、握取手の穴を穿つ。復元値で口径16.8cm、罫部径21.8cmを測る。出土遺物より、この遺構の時期は13世紀代か。

#### SE041 (第11図)

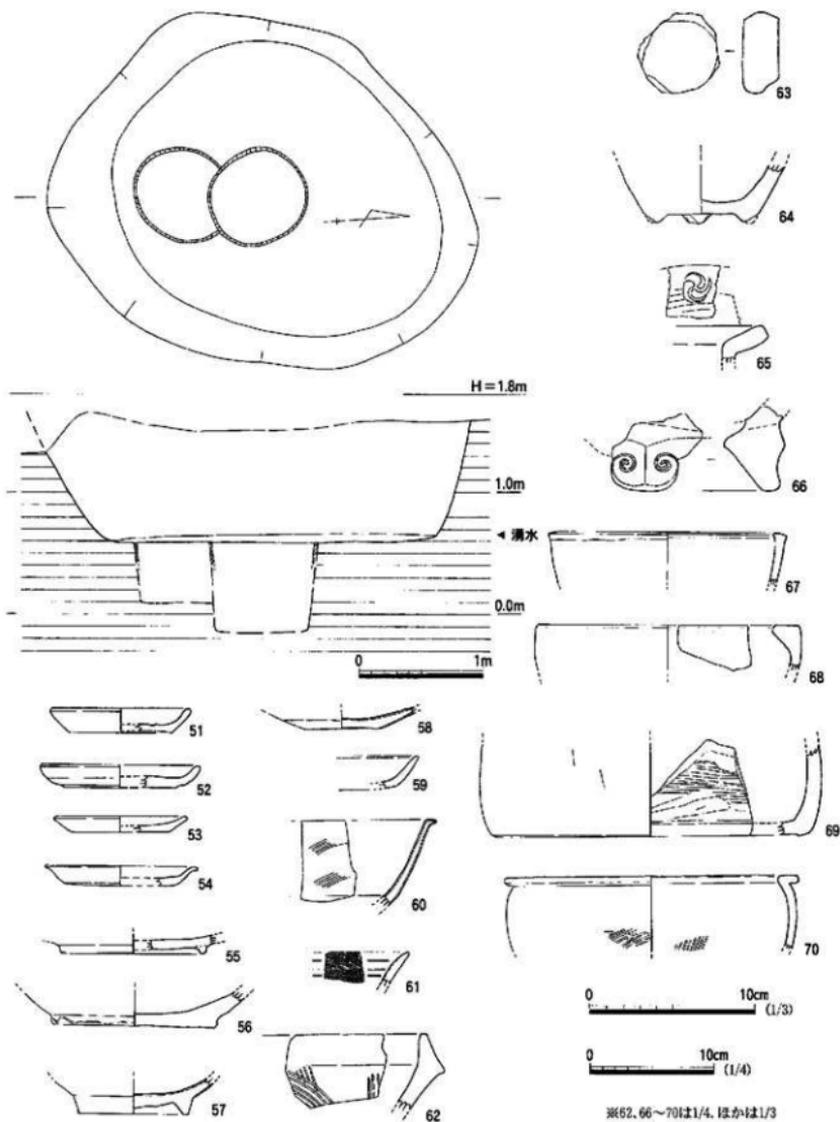
A-2区で検出した。掘方は検出面で径2.8~3.5mの楕円形を呈し、まず深さ100cmの標高0.6mの高さまで大きく掘り下げて平圜面をつくっている。それから井筒部分だけを更に円形に掘り込んで井筒を掘えている。井筒は2つ検出し、いずれも材質は桶である。標高0.6mで湧水をみた。

#### 出土遺物 (第11図)

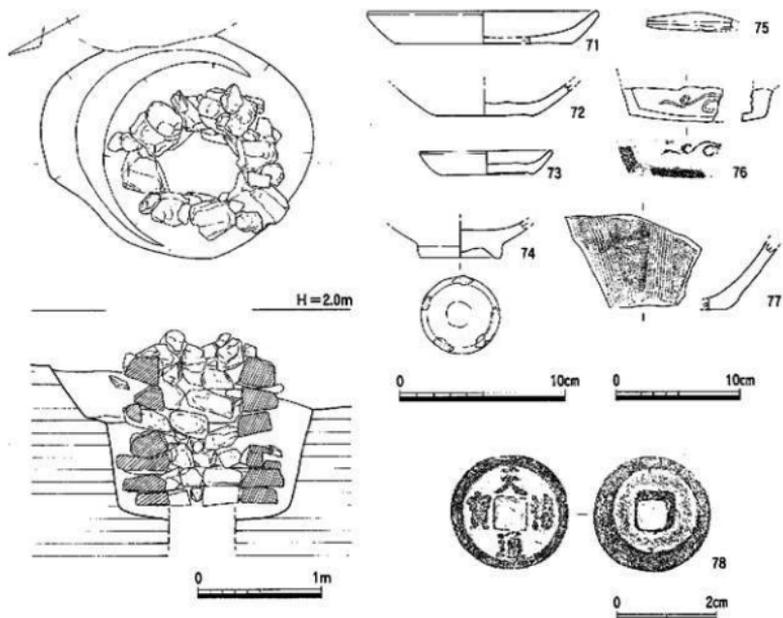
51~54は土師器の小皿である。底部は糸切りで口径8.0~9.6cm、器高1.0~1.5cm、底径6.0~7.0cmを測る。54は胎土が精緻で器壁がうすく近世的である。55・56は瓦器である。55は碗の底部である。貼付け高台は断面逆台形にちかい。見込は平滑なナデで、ミガキは見られない。56は鉢で、外底は板ナデを施す。57~60は白磁である。57は碗の底部である。高台は断面三角形に削り出す。58は白磁ⅧⅨないしⅦ類である。釉調は黄白色で、底面から体部下半にかけて露胎である。59は口禿げの白磁ⅧⅨ類である。60は白磁碗Ⅴ類である。内面に堯描き文を施す。61は陶器の碗口縁部である。内面に白化粧土で象嵌を施し濃緑色の釉をかける。朝鮮土製産か。62は備前焼の描鉢である。63は瓦玉である。64は土師質の火鉢・火入れ類か。底部に三足を有する。内外面とも器面に細かい凹みがある。65は土鍋の口縁部である。内面に刷毛目を施し三巴文のスタンプを押す。66は土師質で火鉢の脚か。67は土師質で火鉢か。内面に煤が付着する。68も土師質の火鉢である。69は土師質の大型品で甗か。復元底径25.4cmを測る。外面は縦方向の板ナデ、内面は横刷毛で調整し、底部との境に指による接合痕が認められる。70は土鍋である。口縁端部を外側水平方向に折り曲げるタイプ。外面に横刷毛、内面に縦刷毛がみられ、外面には煤が付着する。復元口径23.8cmを測る。

#### SE049 (第12図)

A-3区で検出した石組みの井戸である。掘方は直径1.8~2.2mの楕円形で深さ110cmの標高0.3mまではほぼ垂直に掘り下げる。井戸枠は石組みであるが、石の下から2段目のレベルで石の内側に桶材があるのを確認した。石組みの下2段目は扁平な石をほぼ水平に丁寧に並べているのに対し、3段目より上は石の形状は統一されず比較的雑に積んでいる。石組み下2段目→桶→石組み3段目より上の順に構築したものか。



第11図 SB041および出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)



第12図 SE049および出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4、1/1)

※76-77は1/4、78は原寸、ほかは1/3

出土遺物 (第12図)

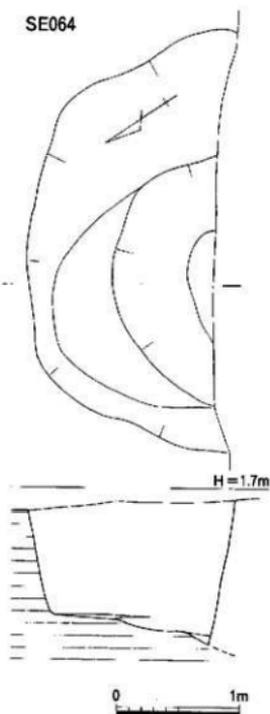
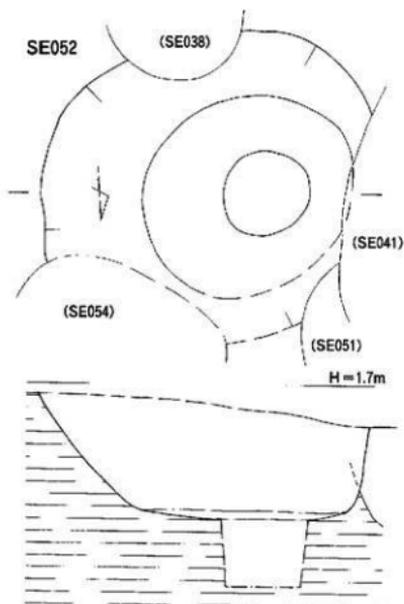
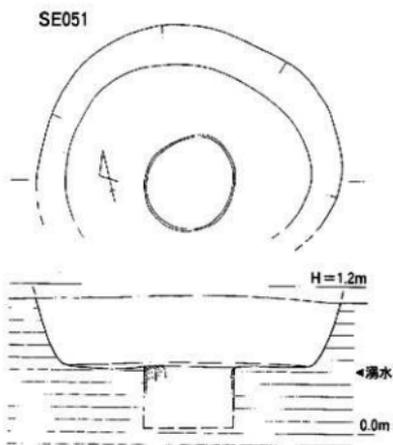
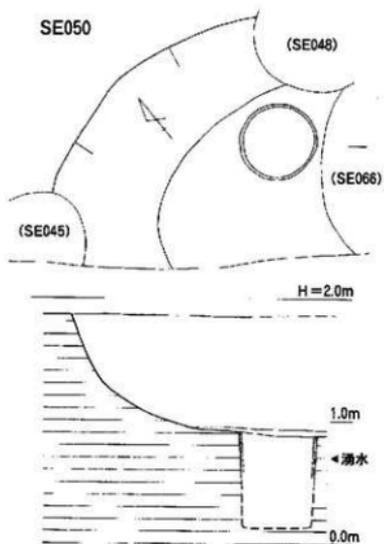
71・72は土師器の環である。底部糸切りで、71は復元口径14.0cm、器高2.0cm、底径10.6cmを測る。73は土師器小皿である。復元口径8.0cm、器高1.4cm、底径5.6cm。74は李朝の灰青陶器である。全面に施釉し、高台接地面に砂目跡が残る。75は土錘である。76は軒平瓦である。77は備前焼の播鉢である。78は銭貨である。北宋銭の「天禧通寶」で1017年初鋳。

SE050 (第13図)

A-3区で検出した。半分は調査区外で、東南側はSE066に切られる。掘方はすり鉢状に大きく掘り一旦平坦面を設けるタイプで、底から井筒部分だけをさらに掘り込んで木桶を据えている。

SE051 (第13図)

A-2区で検出した井戸で、SE041に大きく切られる。検出面ではプランが不明瞭で40cm程度下げた段階でプランを確認できた。掘方埋土は特殊で黒色砂と地山に似た黄白色砂が斜めに互層に堆積する。掘方は直径2.5mで標高0.5mまで大きく掘り下げ平坦面を設け、その後井筒を据える部分だけを更に掘り下げる。標高0.5mで湧水し、このレベルで桶材を確認した。ボーリング棒で確認した底のレベルは標高0.0mである。



0 1m

第13図 SE050・051・052・064実測図 (1/40)

#### SE052 (第13図)

A-2区で検出した。SE038、041、051に切られる。掘方は検出面で径2.5~2.8mの略円形を呈し、標高0.7mまですり鉢状に掘り込み、平坦面を設ける。次にそこから井筒部分だけを更に掘り込んでいる。井筒の材は検出できなかったが、桶であろう。掘方埋土は黒褐色砂質土とよれた淡黄色砂が斜めに互層に堆積していた。

#### SE053 (第9図)

A-2区で検出した。SE039を掘出したところ、この井戸とは別の井筒を底面で検出し053とした。井筒底のみの検出で、湧水の中ボーリング棒で確認した底面のレベルは標高0.1mである。

#### SE063 (第5図)

A-3区で検出した。SE018に切られる。掘方埋土は黒褐色土上である。掘方底面付近で井筒の瓦2段分を確認した。標高0.55mで湧水し、井筒底面はボーリング棒で確認したところ標高0.2mあたりである。井筒内から大量の石・瓦が出土した。

#### SE064 (第13図)

A-3区で検出、北半は調査区外である。掘方の検出面での径は3.4mを測り、深さ110cm、標高0.5mまで大きく掘り下げて一旦平坦面をつくるタイプである。井筒は調査区外である。掘方埋土は黒色土で、比較的多くの遺物が出土した。

#### 出土遺物 (第14図)

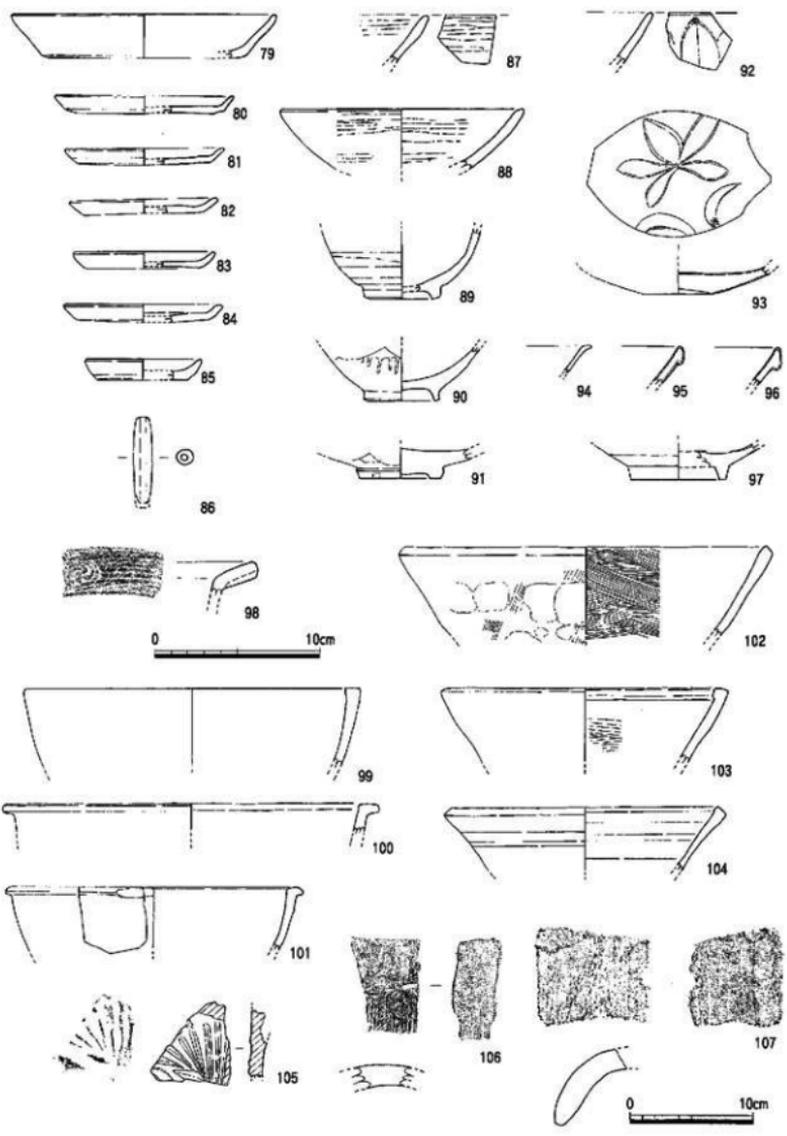
79は土師器の坏である。底部糸切りで復元口径16.0cm、器高2.7cm、底径12.4cmを測る。80~85は土師器の小皿である。底部は糸切りで口径7.0~10.8cm、器高0.9~1.3cm、底径5.5~8.3cmを測る。85以外は口径に対して器高が低い扁平なタイプである。86は土鉢である。87・88は瓦器碗である。内外面に幅広のミガキを施す。89~91は国産陶器である。89の碗は褐色釉の上から乳白色釉を重ね掛ける。90の碗は底部付近は露胎で黄白色釉をかける。91の皿は残存部のほぼ全体が露胎で一部に濃緑色の厚い釉がかかる。92・93は熊泉窯系青磁である。92は外面に鈎連弁文を施す碗Ⅱb類である。93はⅢⅠ類で見込みに花文を浅くへらで彫る。底部の釉を拭き取っている。94~97は白磁碗である。94の口縁部は外反するV類。95・96はⅣ類の玉縁口縁。97は見込みの釉を輪状に掻き取る碗Ⅱ類。98は土銅の口縁部で、二巴文のスタンプを押している。99は土師質で火鉢か。100・101は土銅である。口縁端部を外側に短く折り曲げる。外面に煤が付着。102・103は瓦質の鉢である。102は内面に横剛毛・右下がりの刷毛目を密に施し、外面は一部縦剛毛を施すが指押さえの跡が顕著である。103は口縁部内面を突出させる防長産のもの。104は須恵質の鉢である。105~107は瓦である。105は中国系の花卉文軒丸瓦の破片である。106・107は丸瓦で凸面に縄目叩き、内面に布目痕が残る。

#### SE066 (第15図)

A-3区で検出、南半は調査区外で、SE049に切られる。掘方は暗褐色砂質土で、検出面で径3.0mを測る。大きく掘り一旦平坦面を設けるタイプである。井筒は桶である。

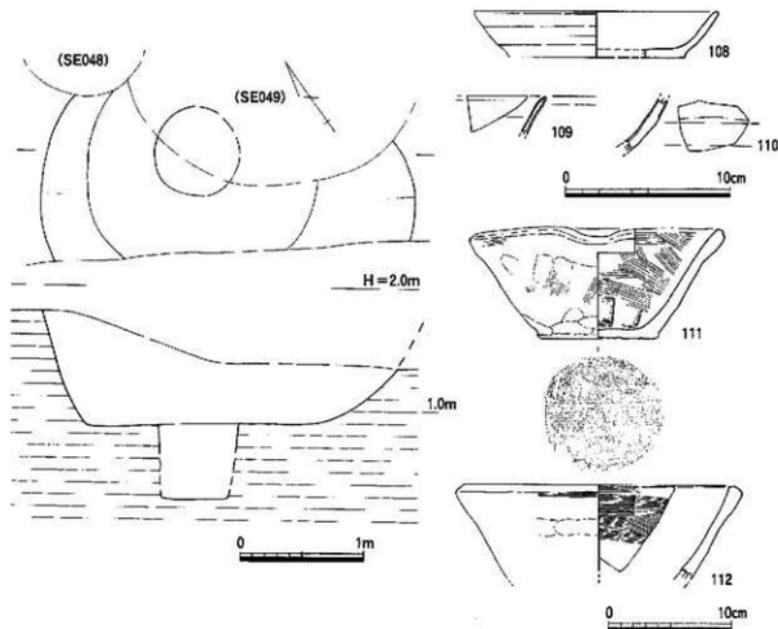
#### 出土遺物 (第15図)

108は土師器の坏である。底部糸切りで復元口径14.8cm、器高2.8cm、底径10.6cmを測る。109は白磁碗の口縁部。110は天目の小片である。光沢のある黒色釉がかかる。外面はへら削りし、下半は露胎。



※79～98は1/3、99～107は1/4

第14图 SE064出土文物实测图 (1/3、1/4)



第15図 SE066および出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)

※108～110は1/3、ほかは1/4

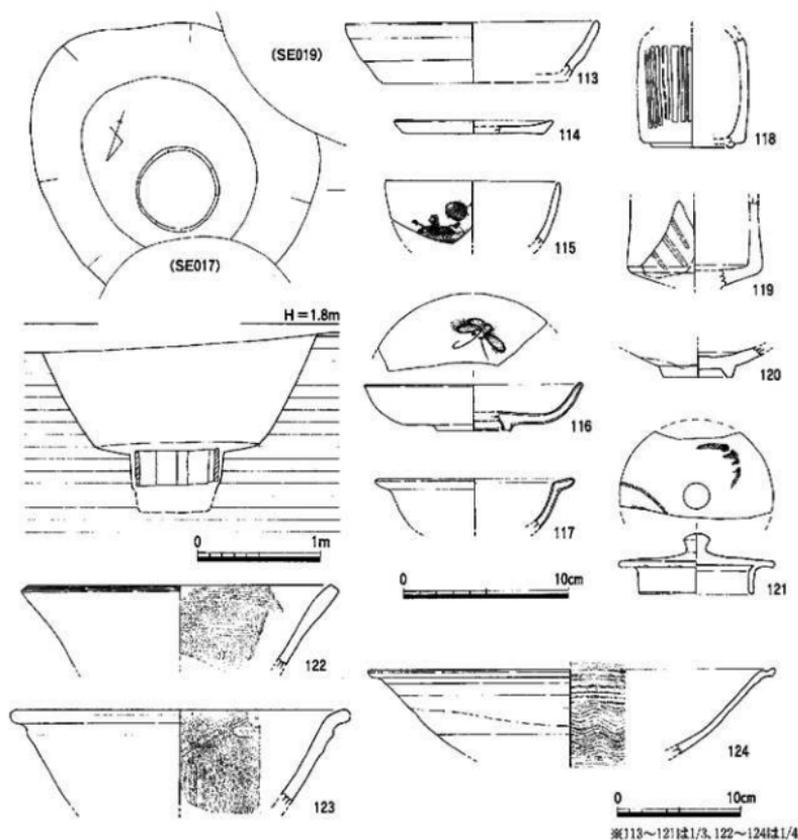
111・112は瓦質片鉢である。口縁端部はやや肥厚し、内面に横または右下がりの刷毛目を施し、外面は刷毛目もあるが指押さえ痕が目立つ。111は口径20.7cm、器高9.1cm、底径9.8cmを測り、底面は糸切りで板目瓦痕が明瞭に残る。

#### SE067 (第16図)

A - 3区で検出した。SE017・019に切られる。掘方は検出面で直径2.2～2.4mを測り、楕高0.8mまですり鉢状に掘り下げ一旦平坦面を設け、そこから井筒部分だけを更に掘り下げている。井筒は瓦組みである。出土遺物より近世に位置づけられる。

#### 出土遺物 (第16図)

113は土師器の坏である。底部糸切りで復元口径15.4cm、器高3.7cmを測る。114は土師器の小皿である。復元口径9.6cm、器高0.8cmを測る。115、116は肥前染付である。115は碗、116は皿で高台は小さく見込に蝶を描く。117は青磁の皿である。口縁部が外に折れ、軸は淡青色を呈する。復元口径12.0cm。118は青磁の瓶である。内面は露胎。119は陶器の筒形碗である。外面に斜めにヘラで刻みをいれ、軸は白濁する。120は陶器皿で見込の軸を輪状に掻き取る。121は陶器の蓋で外面にのみ褐色釉を掛ける。122は土鍋で内面に粗い横刷毛、外面に右下がりの刷毛目を施す。外面には煤が厚く付着する。123は焼締陶器の搥鉢である。口縁部直下に稜があり、そこから口縁部が外湾する。124は陶器の鉢である。褐色釉を掛けた後、内面に白色釉で横線・波状文の刷毛目文様を施す。復元口径33.0cmを測る。



第16図 SE067および出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)

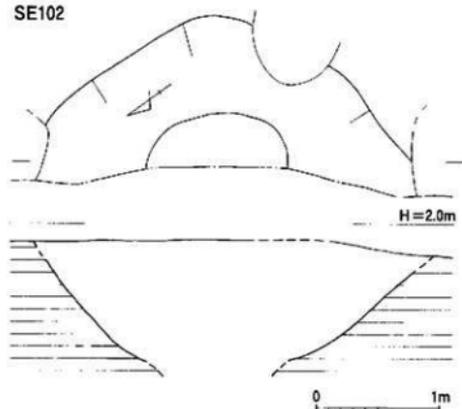
### SE102 (第17図)

B-3区で検出、西側は調査区外である。掘方はかなり大きい。調査区境界に位置し、のり面をつける必要があり井筒は検出できなかった。

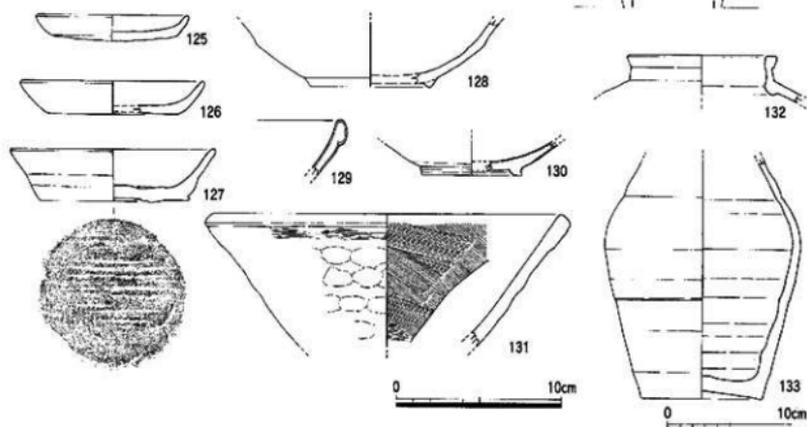
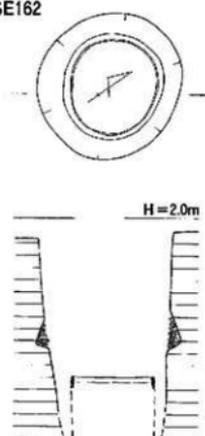
#### 出土遺物 (第17図)

125は土師器小皿で口径9.2cm、器高1.6cmを測る。126、127は土師器杯である。底部糸切りで板目尻痕が残る。126が口径11.2cm、器高2.0cm、127が口径12.4cm、器高3.2cmを測る。128は瓦器碗である。高台は貼付けで断面三角形である。129、130は白磁である。129は玉縁口縁の碗IV類。130は見込の軸を輪状に掻き取る碗VII類である。高台は非常に浅い。131は瓦質の埋ね鉢である。内面に右下がりの刷毛目を施し、外面は口縁直下に横刷毛があるが体部は指押さえて指頭尻痕が明瞭に残る。復元口径29.6

SE102



SE162



第17図 SE102・162および出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)

※131～133は1/4、ほかは1/3

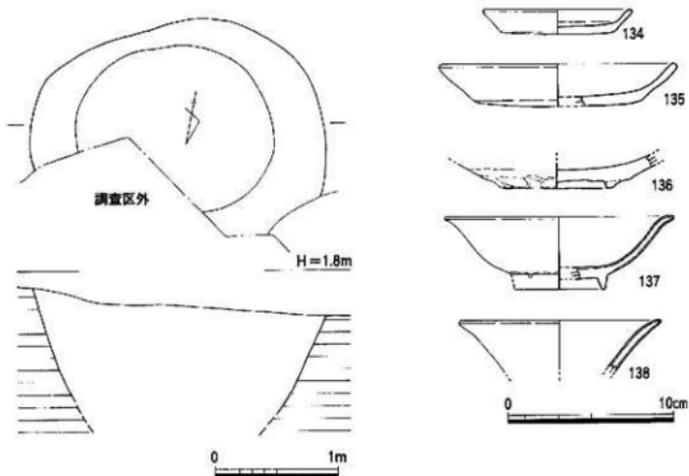
cmを測る。132、133は陶器の壺である。132は口縁部が短く直立する。残存部は無軸で口径9.0cmを測る。133は褐釉陶器で全面に施釉する。水引成形で底面には砂目が円形に付着する。

#### SE162 (第17図)

B-3区で検出した。掘方は検出面で直径1.2mを測り垂直に掘り込む。深さ120cm、標高0.7mのレベルで井筒の木桶を検出した。井筒内には近現代の瓦礫が廃棄されていた。

#### SE187 (第18図)

A-3区で検出した。調査区境界にかかっており、法面の傾斜の都合上、掘り下げは浅い段階でとめた。検出面での掘り方は2.4mで、検出面で井筒のプランを確認できた。井筒埋土が黒褐色細砂、掘

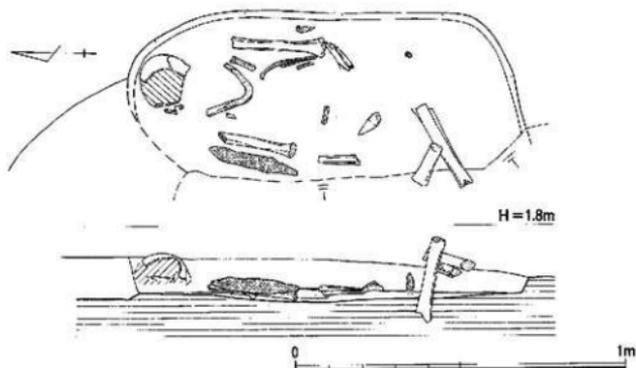


第18図 SE187および出土遺物実測図 (1/40、1/3)

方理上はうすい褐色細砂である。

出土遺物 (第18図)

134は土師器小皿である。口径9.0cm、器高1.5cmを測る。135は土師器杯である。糸切りで口径14.4cm、器高2.6cm、底径10.2cmを測る。136は瓦器碗の底部である。断面四角形の貼付高台で内面は平滑になでる。137は白磁碗VI類である。口径13.0cm、器高4.4cm、底径5.4cmを測る。釉は灰白色で厚く掛かり外面にピンホールが多く見られる。138は黒釉陶器である。



第19図 SK023実測図 (1/15)

## 2) 土坑・土坑墓 (SK)

A区では44基の上坑を抽出した。紙幅の関係上、土坑墓、多くの石・礫を含む土坑、遺物が多く出土した土坑について報告する。

### SK023 (第19図)

A-2区で抽出した土坑墓である。土坑の西側が大雨で流出してしまい、平面プランは不明瞭であるが隅丸長方形のようである。人骨が出土した。残存部位は頭蓋骨、下顎骨、鎖骨、左右の上腕骨・尺骨・橈骨、大腿骨2本、腰骨1本のほか、肋骨、骨盤の一部がある。北頭位の副葬で、成人であるが性別は不明。足の骨は大雨の際動いている。右腕の横に鉄製刀子が副葬されていたが、腐食が激しく図化できなかった。遺体の東側で釘が2本出土しており、木棺墓であったことがわかる。

### SK033 (第20図)

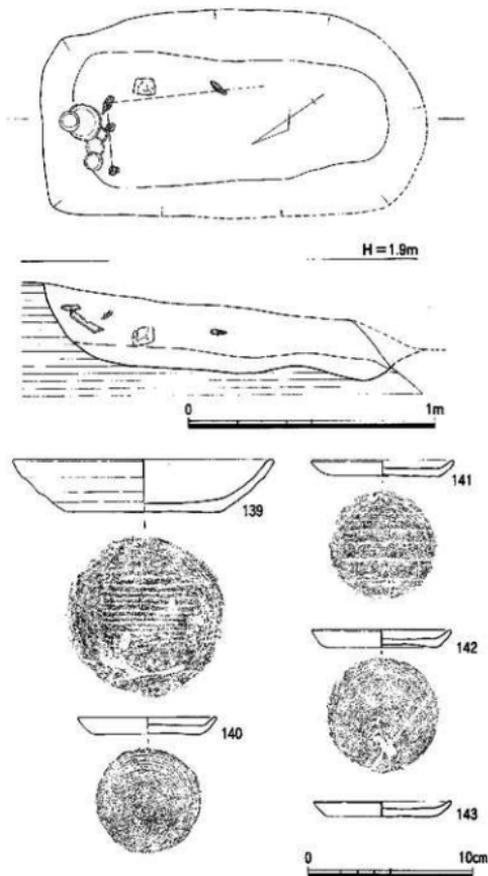
A-2区で抽出した土坑墓である。人骨は出土しないものの、副葬された完形の土師器や釘が出土した。南側半分は土坑墓SK023により切られる。土坑は長方形で長軸1.6m、短軸0.9mに復元される。釘が4点出土しており、それらがL字に並ぶことから、ここが木棺のラインであると考えられる。したがって、土師器は棺外への副葬品である。副葬土師器は坏1点、小皿4点で構成される。

#### 出土遺物 (第20図)

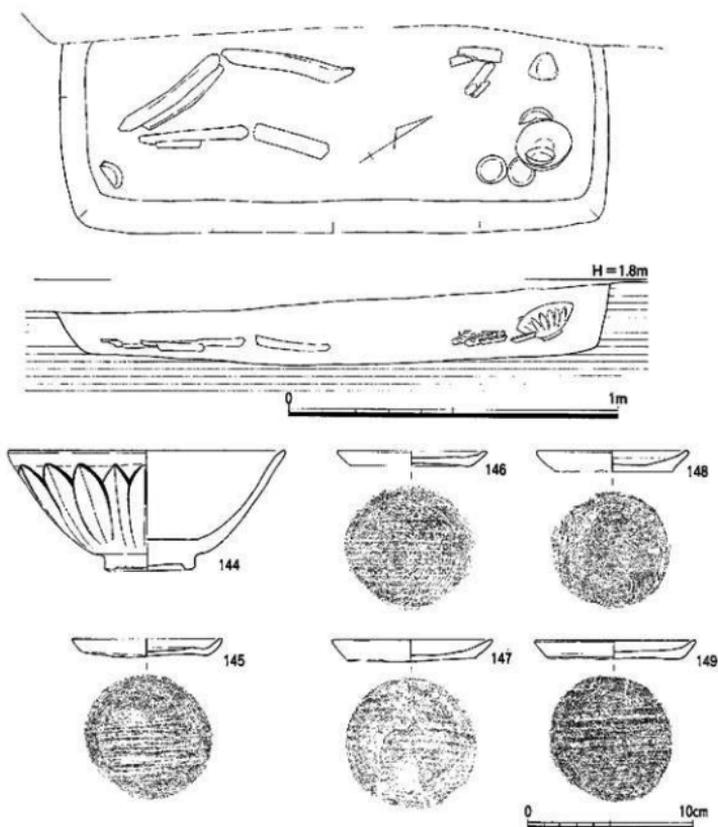
139は土師器の坏、140~143は土師器の小皿である。すべて完形品で、底部は糸切り、139・141・143には板目圧痕が残る。法量(口径-器高)は139が15.8-3.2cm、140が8.4-1.0cm、141が8.6-1.0cm、142が8.4-1.1cm、143が8.3-0.9cmである。

### SK163 (第21図)

B-3区で抽出された土坑墓である。西側は調査区境界にかかると。土坑は長方形で長さ1.7m、深さ25cmを測る。人骨が出土したが遺存状況は悪い。骨端部を欠き、筋線も観察できないが、位置関係



第20図 SK033および出土遺物実測図 (1/20, 1/3)



第21図 SK163および出土遺物実測図 (1/15、1/3)

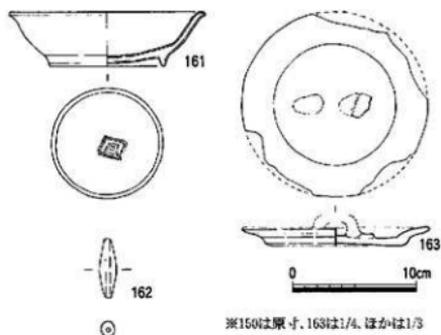
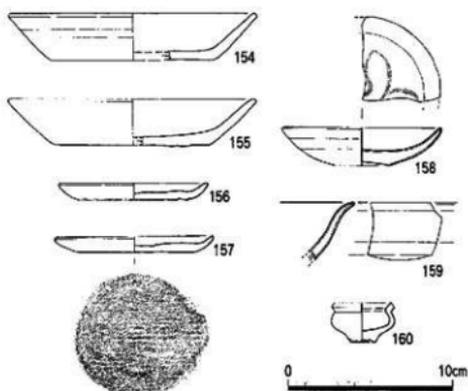
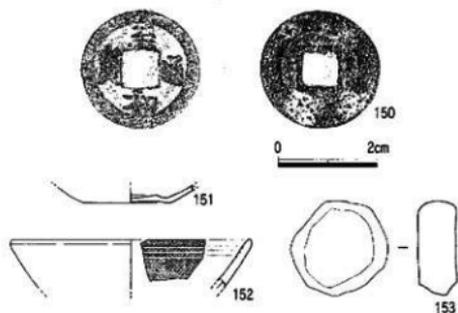
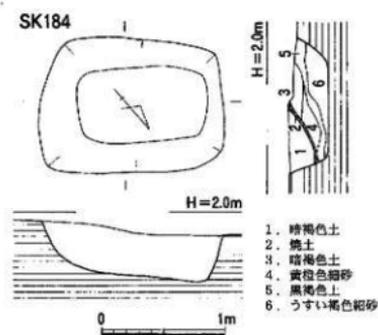
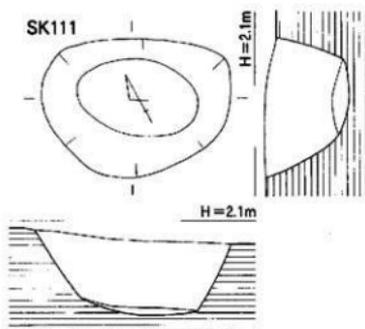
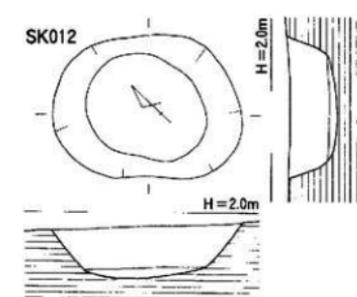
から見て、両足と片側の泥、頭蓋骨の一部である。略北頭位の伸展葬である。頭位に青磁碗1、土師器小皿3を、足元に土師器小皿1を副葬している。出土遺物より13世紀前半に位置づけられる。

出土遺物 (第21図)

144は龍泉窯系青磁碗である。外面に菊蓮弁文を施すⅡb類で軸は明緑色を呈する。完形品で口径16.8cm、器高7.4cm、底径5.5cmを測る。145～149は土師器小皿でいずれも完形品である。底部糸切りで板目疳痕を有する。法量(口径-器高)は145が9.1-1.1cm、146が9.0-0.9cm、147が9.7-1.3cm、148が9.2-1.3cm、149が9.7-1.1cmを測る。

SK012 (第22図)

A-2区で検出した楕円形の土坑である。長軸1.6m、短軸1.2m、深さ40cmを測る。



第22図 SK012・111・184および出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4、1/1)

出土遺物 (第22図)

150は銭貨である。北宋銭の「至和通寶」(1054年初鑄)である。151は土師器の坏か。底部糸切りで非常に薄い。近世の滲入品であろう。152は李朝の象嵌青磁である。口縁部内面に3条の横線を白色化灰土で象徴する。153は瓦玉である。

SK111 (第22図)

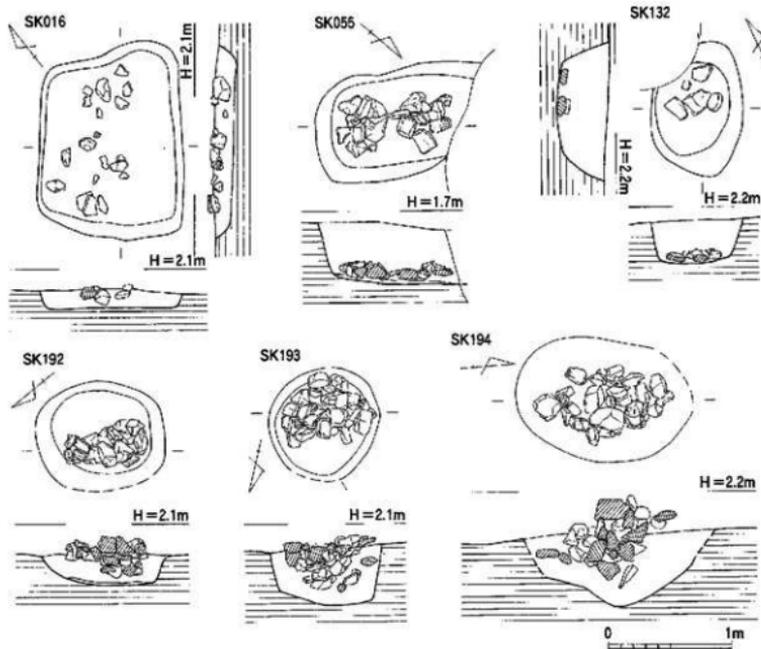
A-4区で検出した不整形の土坑で、長軸1.5m、短軸1.1m、深さ70cmを測る。

出土遺物 (第22図)

154、155は土師器坏である。糸切りで154が口径15.0cm、器高2.9cm、155が口径15.0cm、器高2.8cmを測る。156、157は土師器小皿である。糸切りで157は板目止痕を有する。156が口径9.0cm、器高1.0cm、157が口径9.6cm、器高1.0cmを測る。158は白磁皿Ⅴ類である。底面の軸は掻き取り、内底にへう彫りの文様を施す。159は白磁碗Ⅴ類の口縁部である。160は陶器で壺型のミニチュア品である。口径3.3cm、器高2.4cmを測る。

SK184 (第22図)

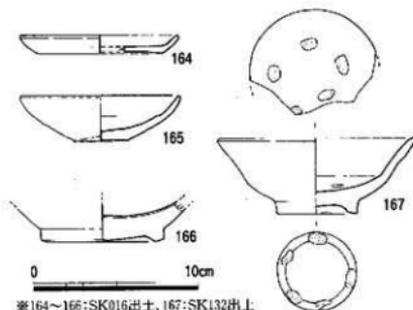
A-4区で検出した方形の土坑である。長軸1.5m、短軸1.1m、深さ30cmを測る。埋土の途中にうすい焼土層を含んでいる。



第23図 SK016・055・132・192・193・194実測図 (1/40)

#### 出土遺物 (第22図)

161は染付の皿である。疊付のみ無袖で、内外面とも文様はないが外底に呉須で銘を描く。162は管状の土鍾である。163は瓦葺土器の蓋である。中央に取手の接合痕が残る。口径15.2cm。



第24図 SK016・132出土遺物実測図 (1/3)

#### SK016 (第23図)

A-2・3区で検出した方形の土坑である。長軸1.6m、短軸1.2m、深さ10cmを測る。拳人の跡が同レベルで多く検出されたが、秩序だった配置ではない。埋土は黒褐色砂である。

#### 出土遺物 (第24図)

164は土師器小皿である。糸切りで口径9.6cm、器高1.1cmを測る。165は白磁皿VI類である。軸は浅黄色を呈し底面のみ露胎である。166は白磁碗IV類の底部で高台を浅く削り出す。

#### SK055 (第23図)

A-2区で検出した土坑である。底面に礫を配置する。根石を持つ柱穴2つを一緒に掘った可能性もある。

#### SK132 (第23図)

A-4区で検出した土坑である。長軸1.1m、短軸0.7m、深さ40cmを測り、底面に礫が数箇所置かれている。

#### 出土遺物 (第24図)

167は李朝の灰青陶器である。灰オリーブ色釉を全面に施釉する。高台と見込に5つずつ目跡が残る。口径11.9cm、器高4.6cm、底径4.9cmを測る。

#### SK192 (第23図)

A-4区で検出した円形土坑で、土坑内から礫が集中して出土した。この周辺で同様の遺構が3基集中して検出されている。直径0.7~0.8m、深さ20cmを測る。根石をもつ柱穴か。

#### SK193 (第23図)

A-4区で検出した円形土坑で、礫が多く出土した。直径0.8m、深さ45cmを測る。

#### SK194 (第23図)

A-3・4区で検出した楕円形の土坑で、礫が多く出土した。長軸1.4m、短軸1.0m、深さ60cmを測る。

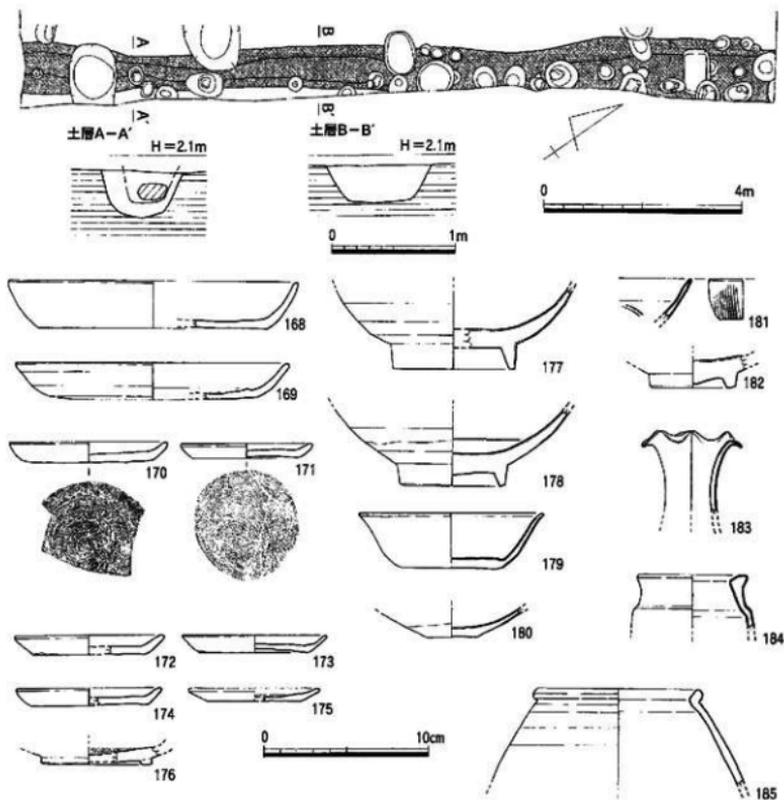
### 3) 溝 (SD)

#### SD114 (第25図)

調査区東壁沿いで検出した溝である。主軸方位は現在の周辺道路と同じで、磁北から約35° 東偏する。幅0.7~0.9mで、深さはばらつきがあり20~30cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。溝と重複して柱穴群が検出されているが、これらの柱穴は溝が埋まってしまった後に新しく掘られたものであることを確認している。

#### 出土遺物 (第25図)

168、169は土師器の坏である。底部糸切りで168は口径17.6cm、器高2.9cm、169は口径16.6cm、器高2.2cmを測る。170~175は土師器小皿である。糸切りとへら切りが共伴している。170、172は底部へら切り、171、173~175は糸切りである。口径8.0~9.6cm、器高0.8~1.3cm、底径5.7~7.9cmを測る。176は内黒の黒色土器A類である。内面にミガキを施す。177~180は白磁である。177、178は碗の底部であ



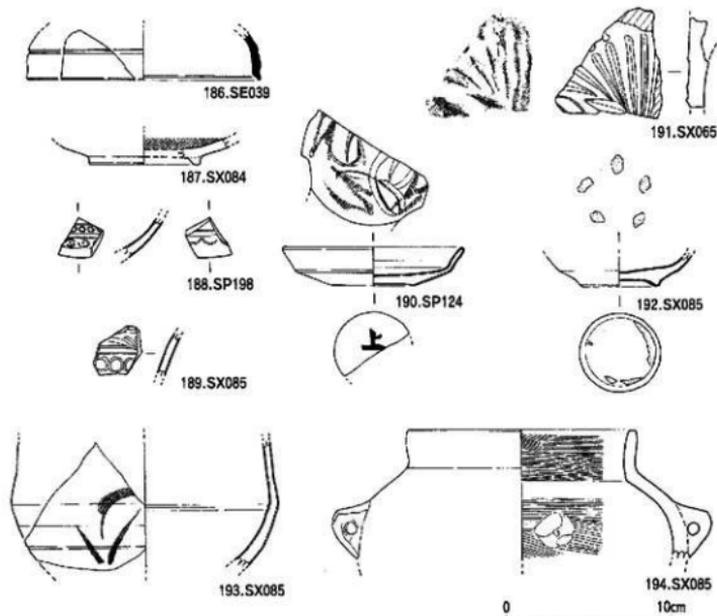
第25図 SD114および出土遺物実測図 (1/100、1/40、1/3)

る。高台は高く削り出す。179は口売げの皿Ⅸ類である。180は皿Ⅵ類で釉は黄白色で外面下半は露胎である。181は同安窯系青磁碗の口縁部である。外面に梅描文を施す。182は龍泉窯系青磁碗の底部である。183は青白磁の瓶である。口唇部を6弁花の花びら状につくる。184は陶器の小形壺である。暗灰黄色の釉をかける。185は壺である。

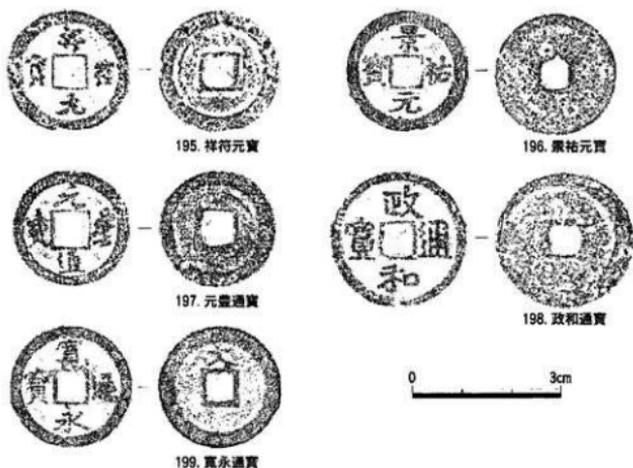
#### 4) その他の出土遺物

以上、主な遺構について報告してきた。報告から漏れた遺構についても、時期は報告した遺構と同様、中世前期から近世におさまる。以下、その他の遺構や包含層から出土した遺物の中で重要と思われるものを以下に報告する。古墳時代後期の須恵器坏蓋1点(186)、中国系の花卉文軒丸瓦(191)の出土が注目される。

第26図186は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の境の稜が明瞭で、口縁部内側に段を有する。小田編年ⅢA期。復元口径14.2cmを測る。187は黒色土器A類(内黒)の椀底部である。188は李朝の象嵌磁器である。189は陶器である。白色土を象嵌する。唐津か。190は同安窯系青磁皿である。内面に梅描きのジグザグ文様とヘラ彫り文様を施す。外底に「上」と墨書する。191は花卉文軒丸瓦である。中国系の瓦。192は陶器の碗である。全面に施釉し、見込に5つの日跡があり、外底には砂粒が付着する。193は唐津焼である。外面に鉄絵を描き、釉は黄褐色を呈する。194は土師質の壺である。両側に耳が付き、外面は横ナデ、内面は横刷毛を施す。



第26図 A区その他の出土遺物実測図①(1/3)



第27図 A区その他の出土遺物実測図② (1/1)

第27図195～199は銭貨である。195～198は北宋銭。195は祥符元寶（1008年初鑄）、196は景祐元寶（1034年初鑄）、197は元豐通寶（1078年初鑄）、198は政和通寶（1111年初鑄）である。199は近世の寛永通寶（文銭）である。

### 5) 小 結

A区では290㎡を調査し、13世紀代から近世にかけての集落を検出した。主な検出遺構は井戸22基、上坑44基（うち上坑竈3基）、溝3条、柱穴多数である。調査区西側では井戸が密集して検出された。一方、調査区東側には柱穴や小上坑が多い。柱穴には根石が残るものもある。箱崎には10世紀前半に宮崎宮が創建されているが、本調査区に集落が形成されるのは13世紀以降である。

さて、①井戸、②町割りの2点について検討を行い、まとめたい。

#### ①井戸について

箱崎遺跡の調査に数多く携わった榎本義嗣氏が、本遺跡の井戸について、井側の構造および掘削方法から分類・考察を行われている（榎本義嗣、2003、「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会2003年九州大会資料集』）。榎本氏は、井側の構造について丸太割り抜き材（A類）、横棧材等を用いた方形の井側を組む曲物を据えるもの（B類）、木椀（C類）、石組み（D類）に分類し、17世紀以降には瓦組みの井戸が出現するとする。また、掘削形態について、上面から底面までを一気に掘り下げるもの（1類）と、一旦平面を設けた上で下部の水溜を据える土坑状の掘り込みを行うもの（2類）に大別する。

A区西側では狭い範囲にいくつも重複しながら、実に20基近くの井戸が繰り返して掘られていた。井筒の構造は木椀、瓦組みが多い。ほかに石組みの井戸1基と近代以降のコンクリート井筒と土管を用いた汲み上げポンプ井戸も数基ある。榎本氏のA類、B類は見られない。また、井筒の上部と下部で井筒の材質が異なるものも見られる。例えばSE024は上部が瓦組み、下部が木椀である。機能的に何ら

問題なく組合せ型の井筒も普遍的にあるのだろう(例えば、横田賢次郎、1977、「大宰府検出の井戸」、『九州歴史資料館研究論集 3』)。

掘削形態はSE001、019、022、039、041、050、051、052の8基が一旦平坦面を設けた上で下部の水滴を採る十坑状の掘り込みを行うタイプであった。現場での所見をもとに井戸の掘削工程を復元すれば以下のとおりである。ちなみにこの遺跡は砂丘上に立地している。

第1工程：相当大きな円形の範囲(SE039では実に直径5mになる)をのり面の傾斜を緩やかに保ちつつ掃鉢状に掘り下げていく。やがて湧水レベル付近まで下げると土が湿ってくる。一旦水が出てしまうと足元の砂がどんどん崩れてしまう。そこでこの高さで一旦平坦面をつくる。この平坦面は小さくても直径2m以上はあり、次の作業を行うのに十分なスペースが確保されている。

第2工程：第1工程で確保した平坦面から井筒を据えるのに必要な分だけを円形に掘り込み、井筒材を据える。湧水レベルまでは少くとも50cm程度しか掘っていないようだ。井筒は必ずしも平坦面の中央に据るとは限らない。最下部の井筒材を据えた後は一般的な井戸と同様である。何段かずつ掘っては掘り方を埋め、徐々に地表まで上げていくのだろう。掘方の埋土断面でその単位らしいものを確認できることもある。

第1工程の掃鉢状に掘って下に平坦面をつくることの意味は現場にいれば比較的容易に想像がつく。垂直に掘れば労力も少なくてよい分けだが、砂地であるためのり面が崩落する。掘削作業中に崩落が起これば大事故になる。おそらく危険防止のため労力はかかっても掃鉢状に大きく掘り方をとるのであろう。A区ではこの掘削方法が主流のようである。また、同じく砂丘上に立地する博多遺跡群でもこのタイプの井戸を掘った経験がある。砂地で井戸をつくるには非常に合理的な掘削形態である。

## ②町割りについて

A区東側では柱穴や小土坑、溝を検出した。柱穴には根石が残るものも見られる。本地区における往時の町割りの復元を試みたい。復元作業はすべて図上で行なったものである。また、遺構面が砂地で乾燥、風により小さな遺構がすぐ見えなくなるため柱穴の掘り残しも相当あるかもしれない。

当時の町割りを復元するのにもっとも有効な遺構は溝であろう。溝が周辺の道筋の軸方向と同じくする蓋然性は非常に高い。また、建物もちろん街路の方向に規制を受けるので、それと同じ軸をとる可能性が高いであろう。今回の調査では、以下の手がかりを得た。

1. 調査区東端で溝SD114を検出した。この溝は直線的に延びている。
2. 溝SD114の埋没後に、溝の貞上に根石をもつ柱穴群が掘られている。溝と同じ方向で並ぶ。
3. 他にも根石をもつ柱穴が相当ある。それらの分布を見ると、溝SD114と直交する方向で並ぶ傾向がある。

以上の内容を図示したものが第28図である。溝および根石をもつ柱穴群が磁北から35°東偏する方向およびそれに直交する方向に並んでいる。これを本地点における町割りの方向と考えたい。

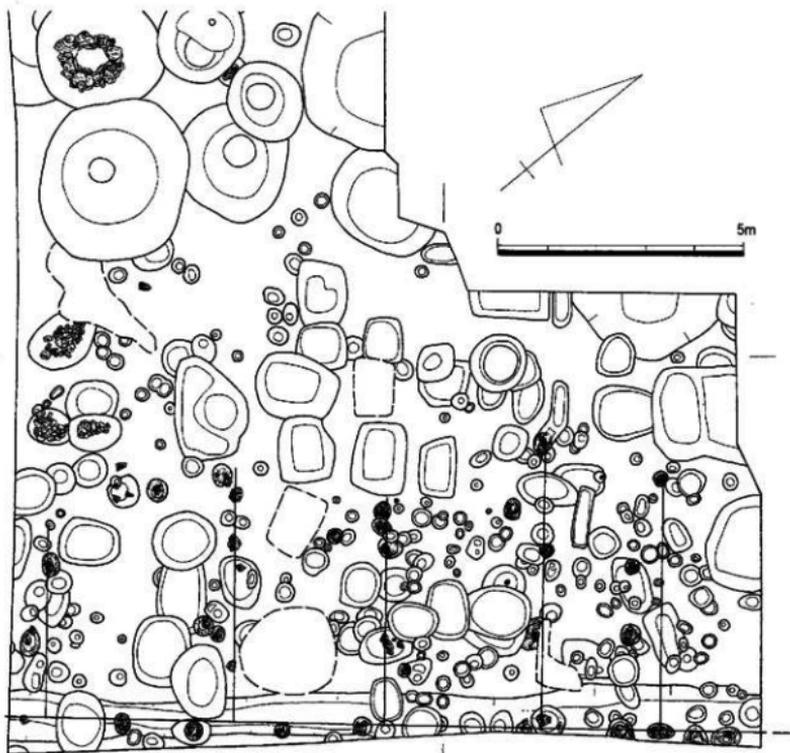
次にA区周辺のほかの調査事例および現在の地形と照合してみる(第2・3図)。すると、さらに以下のことが読み取れる。

4. A区で検出した地割りの方位は現在の地割りの方位と一致している。ちなみに、A区東側の道路は筒崎宮の前を通り、通称九大通りと呼ばれている古い町筋である。
5. 北側隣地の第13次調査区、東側の第27次調査C区でも同じ方向に走る溝が検出されている。

6. A区および第13次調査区東側の遺構の分布に注目すると、南北に細長い3つのゾーン（帯）がある。まず九大通りに近い東側の約5m幅のゾーンには柱穴群が集中する。その西、通りから裏手には約4m幅で小土坑が軸をそろえて分布、さらに裏手の西側には、今度は井戸が集中するゾーンがある。

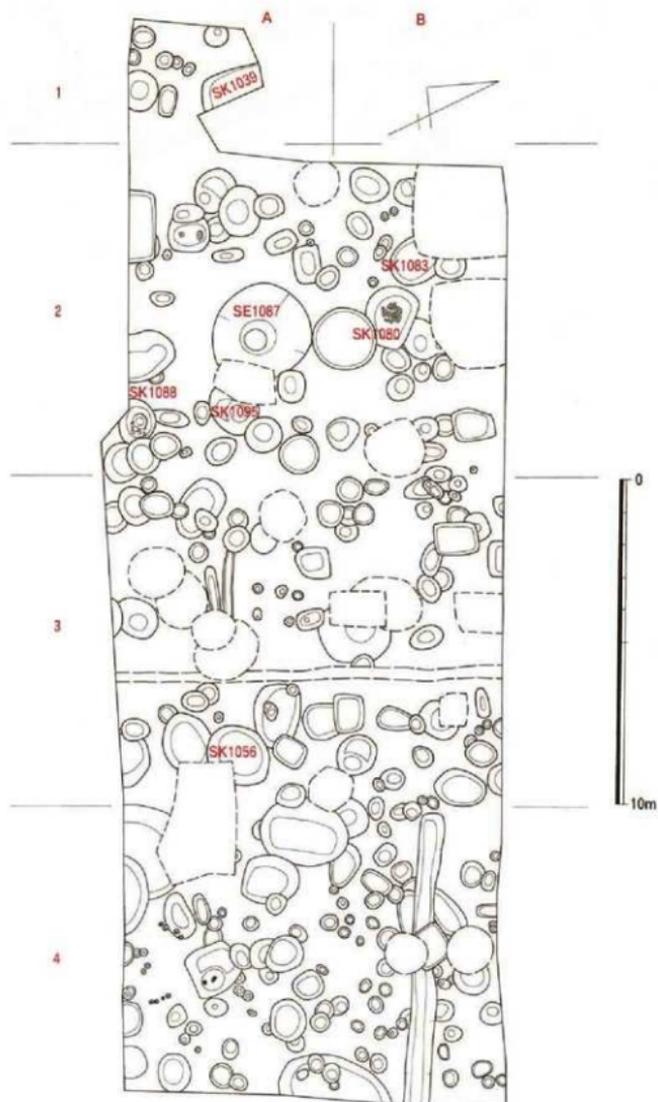
以上、周辺状況と照合した結果、この地割案が本地点の往時の町割であることはほぼ疑いないであろう。また、九大通りは古くからある通りで近世から位置が変わっていない可能性は高い。そうすると、通り沿いから奥へ向かって道路（側溝）→住居建物→土坑（ごみ穴など）→井戸という遺構配置の規則性が看取できる。これはまさに通り沿いに長屋風の建物が並び、その裏に畑、便所、井戸等の施設があるという町屋のイメージと重なってくる。

SD114では13世紀代の遺物が出土しており、この頃には現在まで続く地割が形成されていたようだ。宮崎宮の創建は10世紀だが、本地区周辺では古代の遺構はほとんど存在しない。町割りがいつ頃形成されたのか問題が残るが、箱崎遺跡における中近世の町割を復元できた意義は大きい。



第28図 A区地割復元図(1/100)





第30图 B区遗址配置图 (1/150)

### 3. B区の調査

B区の調査は平成13年9月17日から同年11月19日にかけて実施した。開発面積は580㎡であるが、地質が砂質土のため法面を緩やかにとる必要があり、実際に調査できた面積は340㎡である。主な検出遺構は井戸1基、土坑55基、溝1条、柱穴多数である。土坑の多くは小さく遺物もほとんど出土しない。遺構のほとんどが近世のもので、中世の遺構がわずかに存在する。遺物では古墳時代前期および古代の遺物が数点だけ出土した。報告にあたり遺構の位置を示すために調査区に10m四方のグリッドをかけ、横にA・B、縦に1・2・3・4の番号を付して、例えばA-1区のように表記している。

#### 1) 井戸 (SE)

##### SE1087 (第32図)

A-2区で検出した。掘方は検出面で径2.8~3.0mの円形を掘り、中央に井筒プランが確認できた。半載して掘り下げを進めた。壁面の傾斜は急である。深さ1.8mの標高60cmまで下げたところで湧水し、このレベルで木桶を確認した。中世の遺物も混じることが近世の井戸であろう。

##### 出土遺物 (第32図)

200は十師器小皿である。底部へら切りで口径9.4cm、高さ1.2cmを測る。201~203は青磁である。201は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類で、内面に柿目文とへら彫り文様を施す。底部は軸を拭き取り露胎とする。202は同窯系青磁の小片。203は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6類である。外面は柿目の入った蓮弁文。204、205は明代の染付か。206は肥前系染付皿である。見込にコンニャク印判の五弁花、外底に銘を有する。207、208は白磁の紅皿である。209は色絵磁器の破片。210~213は陶器である。211、212は刷毛目文様を施す。

#### 2) 土坑 (SK)

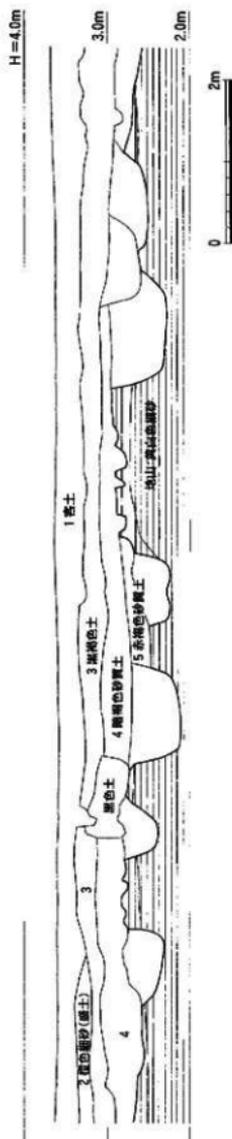
B区では55基の土坑を検出したが、その多くが小土坑で出土遺物が少ない。

##### SK1039 (第33図)

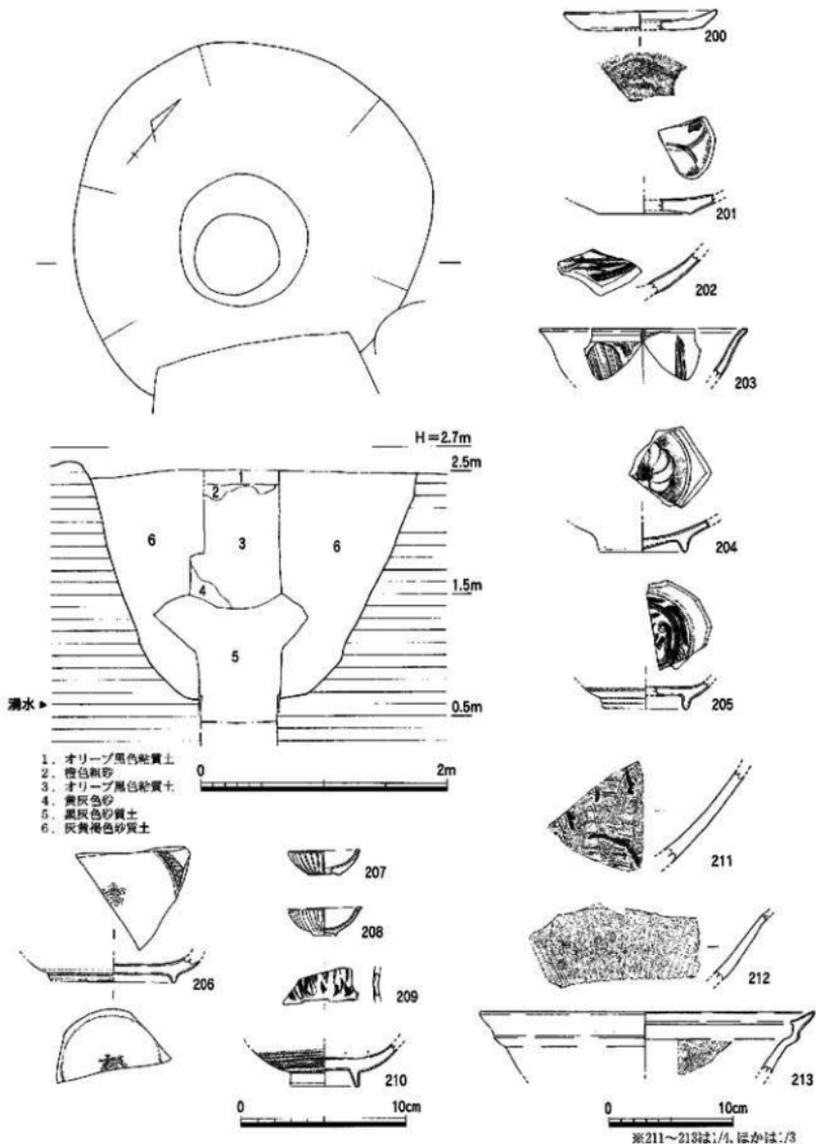
A-2区で検出した。調査区境界に位置し、平面形は不明である。深さ35cmを測る。

##### 出土遺物 (第36図)

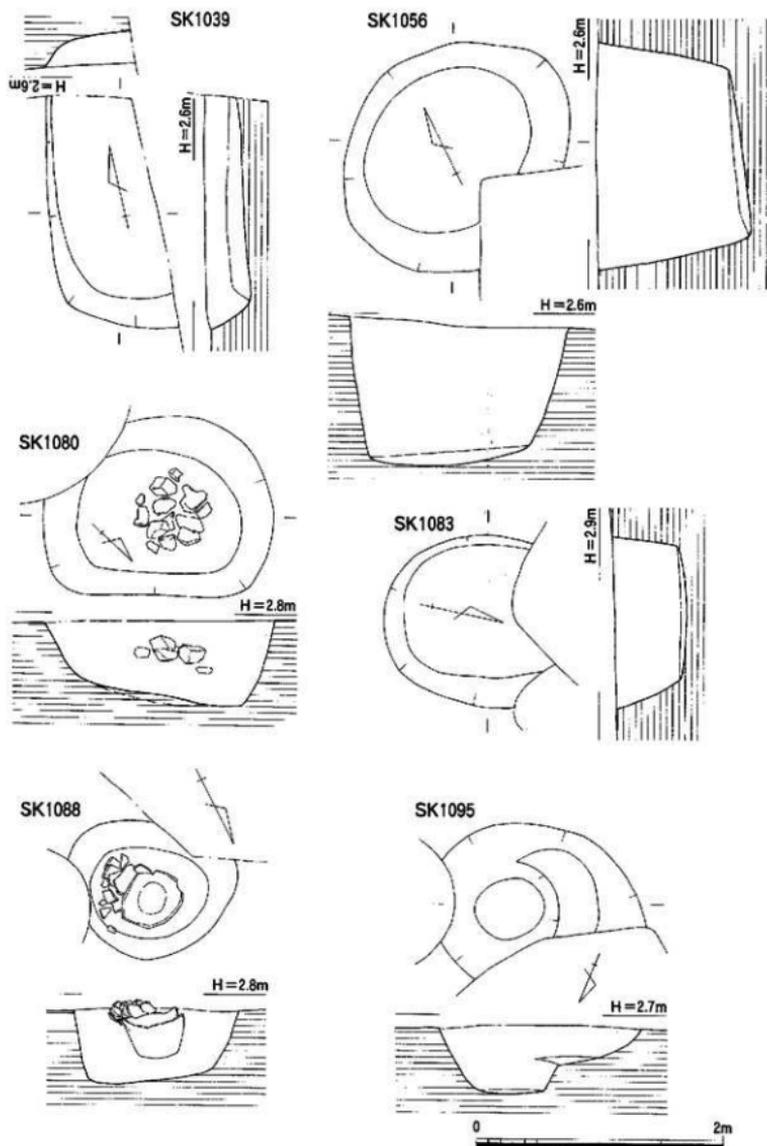
240は国産染付の碗である。見込に五弁花を施す。241は博多素焼き人形である。前後2つのパーツを別々に型取りして貼り合わせるタイプの背面制である。



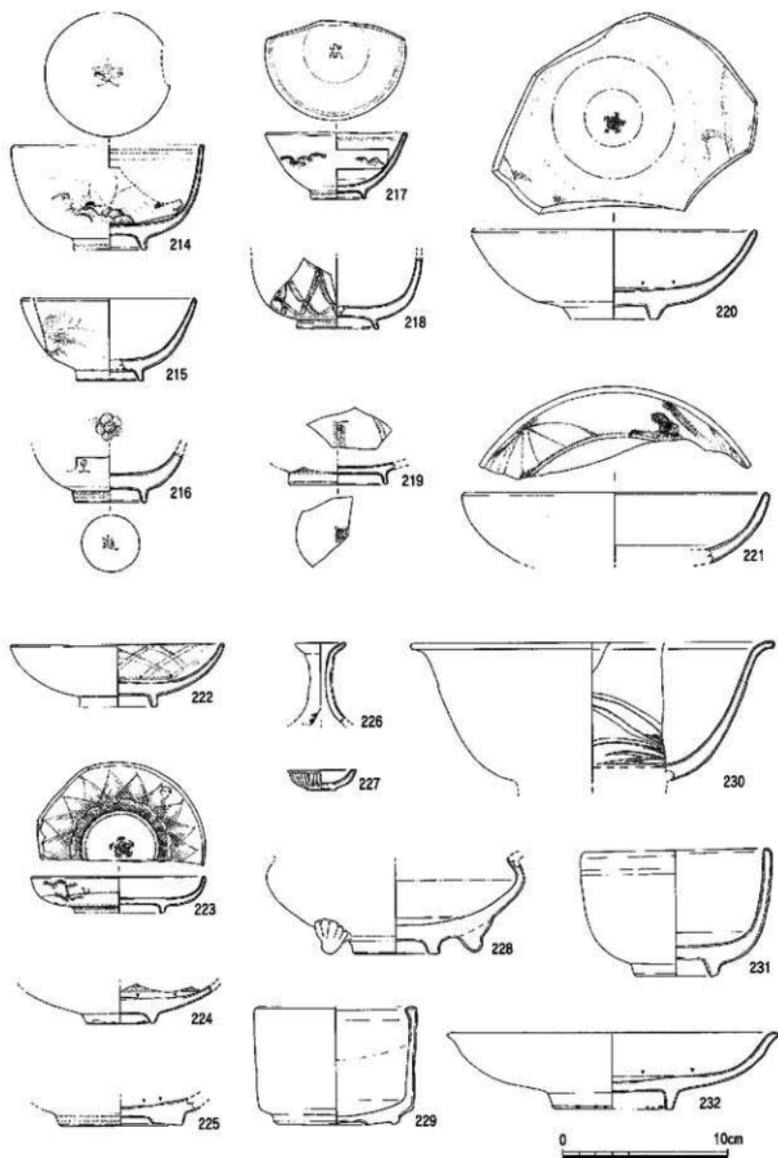
第31図 B区南壁土層実測図 (1/60)



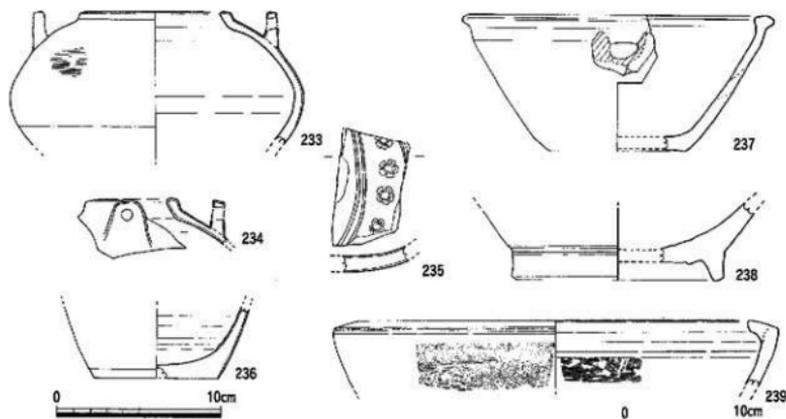
第32図 SE1087および出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)



第33图 SK1039・1056・1080・1083・1088・1095実測図(1/40)



第34图 SK1056出土遺物実測図① (1/3)



※233～236は1/3、ほかは1/4

第35図 SK1056/川土遺物実測図② (1/3、1/4)

**SK1056 (第33区)**

A-3区で検出した楕円形の土坑である。長軸2.1m、短軸1.6m、深さ120cmを測る。

出土遺物 (第34・35区)

214～226は肥前系染付である。214～219は萌である。214は見込に昆虫文。216は見込に花文、高台内に「進」の銘を描く。218は外面に二重網目文を描く。220～225は皿である。220・222、224、225は見込みの軸を輪状に掻き取る。220、223は見込に五弁化を描く。225は蛇の目凹型高台である。226は瓶の口縁部。227は白磁の紅皿である。228～230は青磁である。228は香炉で内面下半は露胎である。229も内面が露胎で香炉か火入れであろう。蛇の目凹型高台。230は鉢で内面にヘラ彫りの文様を施す。231～238は陶器である。232の皿は見込の軸を輪状に掻き取る。233、234は上瓶。235は三鳥手の皿である。237は片口播鉢である。238は播鉢である。239は瓦質火鉢の口縁部である。

**SK1080 (第33区)**

B-2区で検出した。平面形は長軸1.9m、短軸1.5mの隅丸方形で、深さ60cmを測る。埋土内から人頭大の石が集中して出土した。

出土遺物 (第36区)

242は軒平瓦である。243は白磁の皿で見込の軸を輪状に掻き取る。

**SK1083 (第33区)**

B-2区で検出した楕円形土坑である。北側は攪乱に切られる。短軸1.4m、深さ60cmを測る。

出土遺物 (第36区)

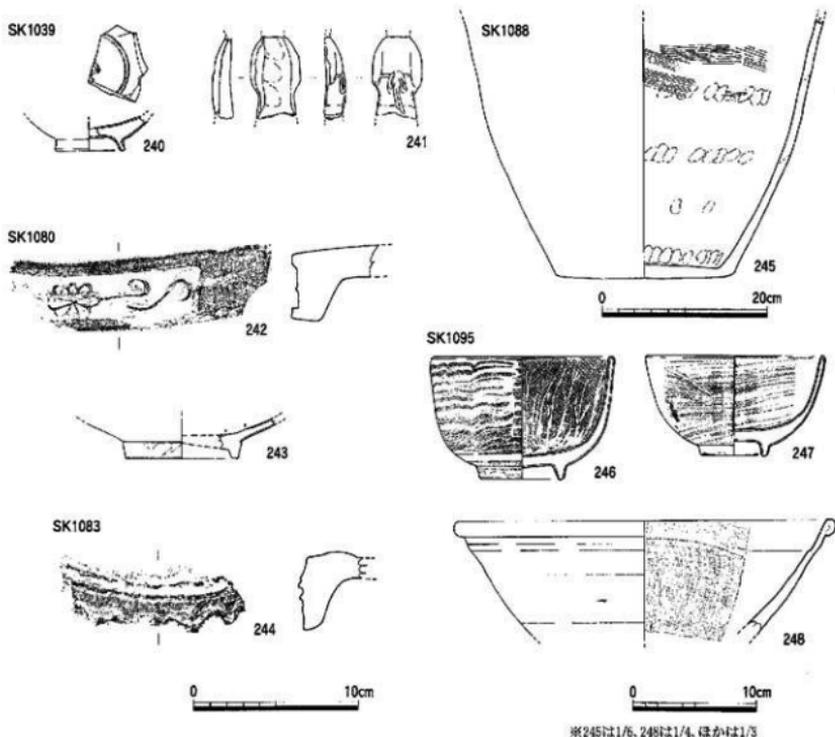
244は中国系の押圧波状文軒平瓦である。

**SK1088 (第33区)**

A-2区で検出した不整形の土坑で、土師質の甕が埋設されていた。深さ50cmを測る。

出土遺物 (第36区)

245は土師質の甕である。硬く焼けしまる。内面には粘土帯を接合した部分に指頭圧痕が残り、上部には横刷毛も見られる。底径28.8cm、残高42.2cmを測る。



第36図 SK1039・1080・1083・1088・1095出土遺物実測図(1/3、1/4、1/6)

### SK1095 (第33図)

A-2区で検出した。長軸は約1.7mに復元でき、底部は2段になる。深さ50cmを測る。

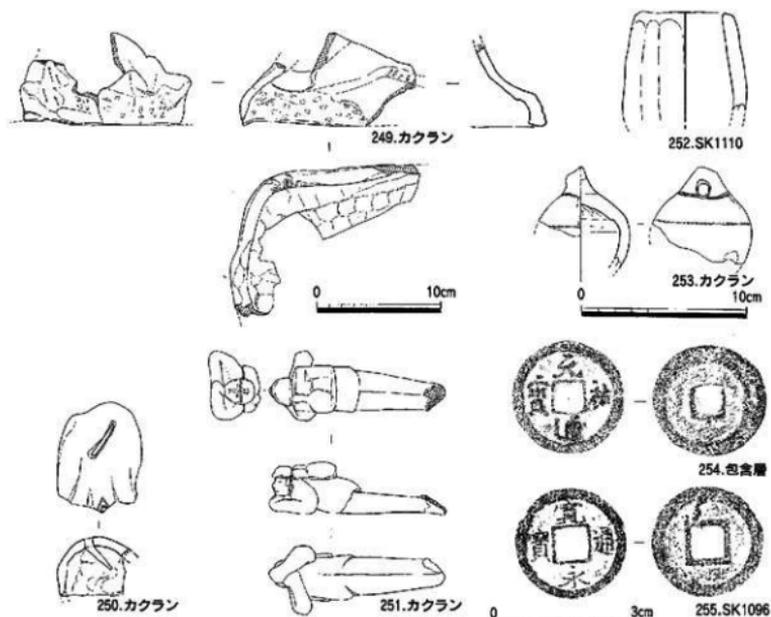
出土遺物(第36図)

246、247は陶器の刷毛目碗である。248は陶器の掃鉢である。

### 3) その他の出土遺物

第37図249～251は博多素焼人形である。249は型作りの大型人形。足元の岩の部分。250は不明だが、貯金箱の口のような細長い溝が切られている。251は手びねりの上人形。兵隊を模した戦前のもの。252は粗製の焼塩簾である。253は十鈴で、横方向に2本の線を墨書きする。254は「元祐通寶」である。1086年初鋳。255は「寛永通寶」である。

第38図256、257は古墳時代前期の甕の口縁部である。258も古墳時代の高坏の坏部である。259は古代の土師器碗の底部である。260は古代の丸瓦で凸面に斜格子叩きが見られる。

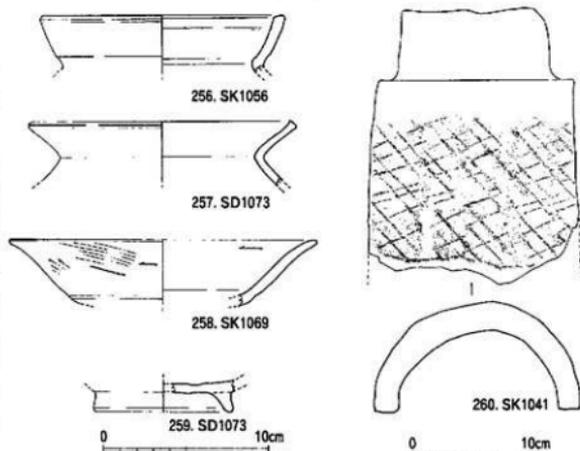


第37図 B区その他の出土遺物実測図① (1/3、1/4、1/1)

※249・11/4、254・255:1.5寸、ほか:1.1/3

#### 4) 小 結

B区では340㎡を調査し、中近世の集落を検出した。主な遺構は井戸1基、土坑55基、溝1条、柱穴多数である。遺構の多くは近世に属する。遺物では古墳時代、古代の土師器、瓦が少数出土している。また、中国系の押圧波状文軒平瓦の瓦当部分の出土も注目される。



第38図 B区その他の出土遺物実測図② (1/3、1/4)

#### 4. C区の調査

C区の調査は平成13年10月15日～平成14年2月7日にかけて実施した。調査面積は819㎡である。検出した遺構は、12世紀代～近世にかけての井戸、土坑、木棺墓、溝、柱穴等である。今回は紙数の制限もあり、中世のものをを中心に掲載した。

##### 1) 井戸 (SE)

中世～近世にかけて18基検出した。のうち中世に属するものを中心に掲載した。

##### SE2024 (第42図)

調査区北東隅に位置し、北側は区外に延びる。西側堀方ををSD2026に切られる。堀方は東西で406cmを測る。平面形は円形を呈し、すり鉢状を成す。標高約0.5mで湧水する。井筒は確認できなかった。13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

##### 出土遺物 (第43図)

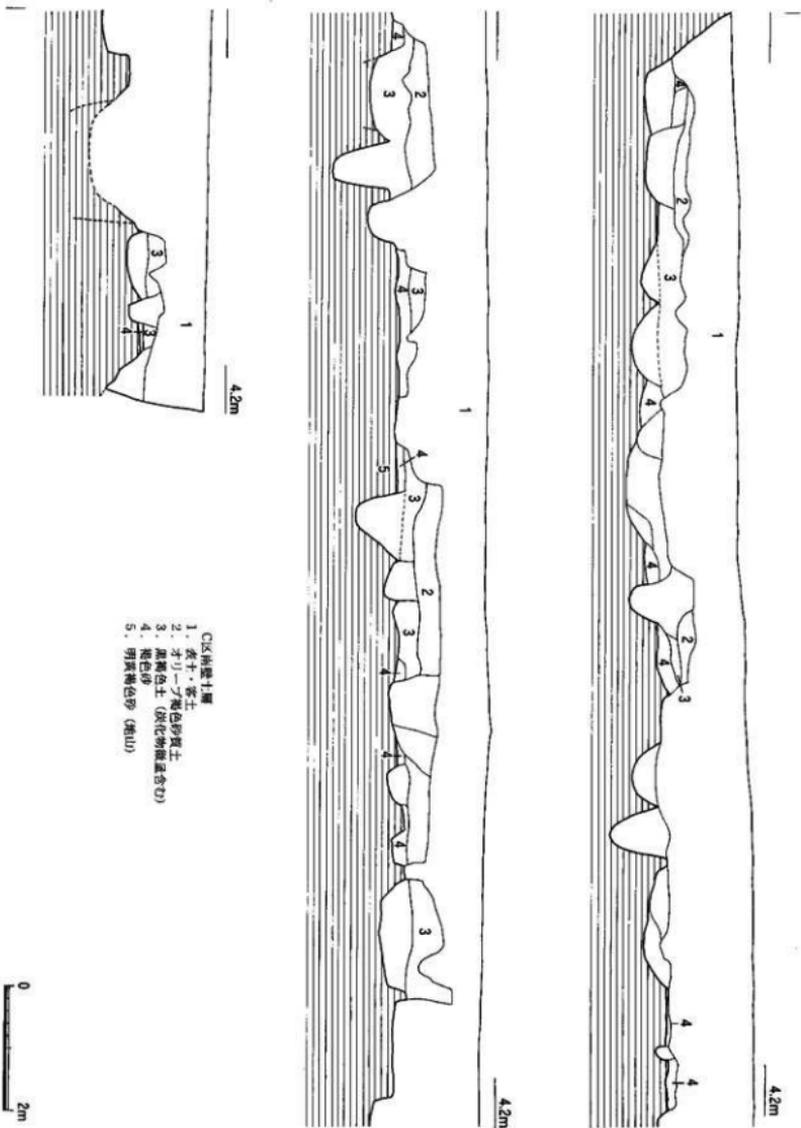
261～264は土師器の小皿で、261は復元口径9.5cmを測り、底部はへら切り。262は復元口径8.8cmを測り、底部は糸切りで、板状凹痕を有す。263は復元口径8.9cmを測り、底部糸切り。264は復元口径10.8cmを測り、底部に高台が付くとおもわれる。265は坏で復元口径16.0cmを測り、底部は糸切り。266～269は高台部。270は銅で外面には煤が付着する。271～274は瓦器碗。275～279は白磁。275～278は碗。279は口削げの皿。復元口径10.2cmを測る。280～282は青磁。280・281は同安窯系の碗で281は復元口径18.2cmを測る。体部下半まで施釉される。282は龍泉窯系の坏で見込みに魚文を付している。283は陶器の壺で灰白色の釉がかかる。284・285は鉢。

##### SE2218 (第44図)



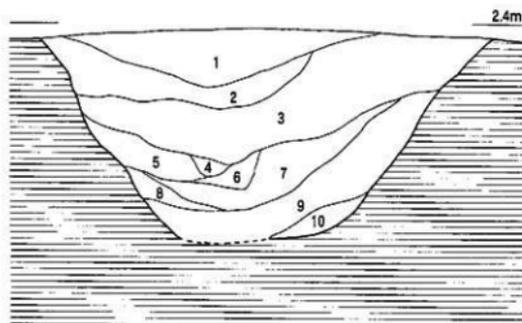
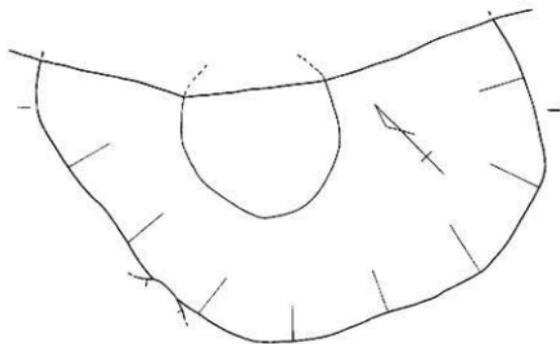
第39図 C区位置図 (1/500)





第41图 C区南壁土層图 (1/80)





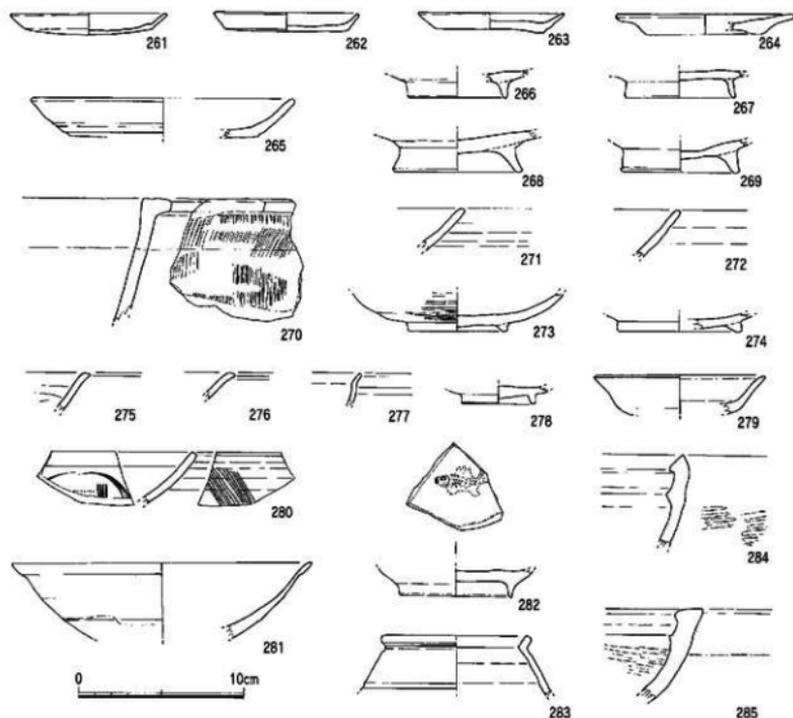
- SE2024土層
1. 黒褐色粘質土
  2. 褐色砂（中粒砂）
  3. 2. に1. の小ブロックを多く含む
  4. 暗褐色砂
  5. 褐色砂
  6. 暗褐色砂
  7. 2. に黒褐色粘質土ブロックを含む
  8. にぶい黄褐色砂
  9. 3. と同じ
  10. 3. と同じ（粗粒砂）

第42図 SE2024実測図（1/40）

調査区北側に位置し、北側は区外に延びる。掘方は東西で330cm以上を測る。平面形は円形を呈し、すり鉢状を成す。井筒は確認できなかった。12世紀中頃以降のものとおもわれる。また、検出時、掘方の中に石材が集中する部分があり、井戸の廃棄後に投げ込まれていたものと考えていた。しかし井戸掘削後に土層を観察したところ石材の下部に掘り込みが確認された。方向がSK2120に近く、近接し、壁が鋭角に立ち上ることから土壇墓であった可能性が考えられる。

#### 出土遺物（第45・46図）

遺物は土層図第6層の黒褐色砂から多く出土した。286～312は土師器。286～298は小皿で、286～293は底部へら切りで板状圧痕を有す。290は底部際に穿孔される。口径8.4～9.2cmを測る。294～298は底部糸切りで295は板状圧痕を有す。口径8.8～9.8cmを測る。299～312は坏で299～306は底部へら切りで板状圧痕を有す。口径15.0～15.8cmを測る。307～311は底部糸切りで307・309・311は板状圧痕を有す。312は高台付きの坏で口径15.4cm。底部へら切りで板状圧痕を有す。313～318は瓦器碗。内外面と



第43図 SE2024出土遺物実測図 (1/3)

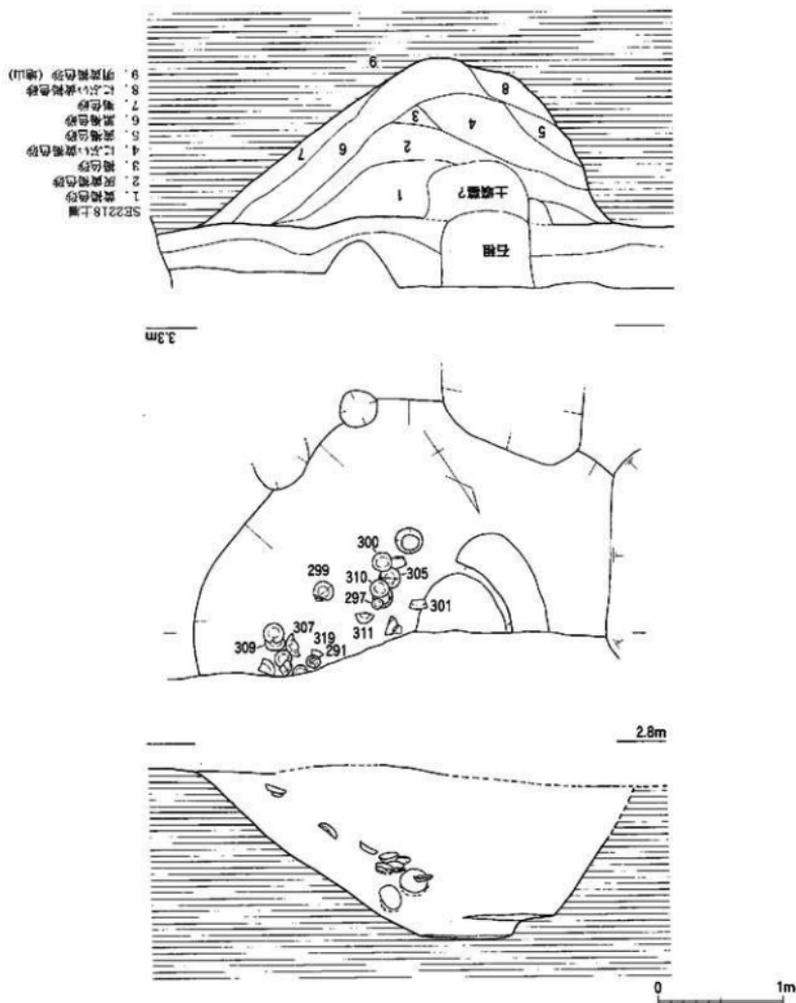
もヘラ研磨を施す。口径15.2～17.4cmを測る。319は白磁の碗。口径16.0cm、器高6.8cmを測る。釉は灰白色を呈し、体部下半まで施される。320は須恵質の鉢。復元口径23.6cmを測る。焼成はやや悪く軟質である。

SE2363・SE2381・SE2382・SE2423・SE2461 (第47～50㍻)

検出時には切り合いが分からず、1基の井戸として掘削したが掘削最終段階の井筒を確認した時点で5基の井戸であることが判明した。井筒は遺構番号の順に検出した。この時点で掘方の切り合いを確認し、遺物を分別した。このため多くの遺物が出土したがこのような理由から大半は帰属が不明である。古い方から2461、2381、2363、2382、2423の順に構築されたのではないかとおもわれるが不確実である。出土遺物に大きな時期差はなく概ね12世紀代の短い期間に次々と構築されたとおもわれる。以下各井戸について説明したい。

SE2363 (第47㍻)

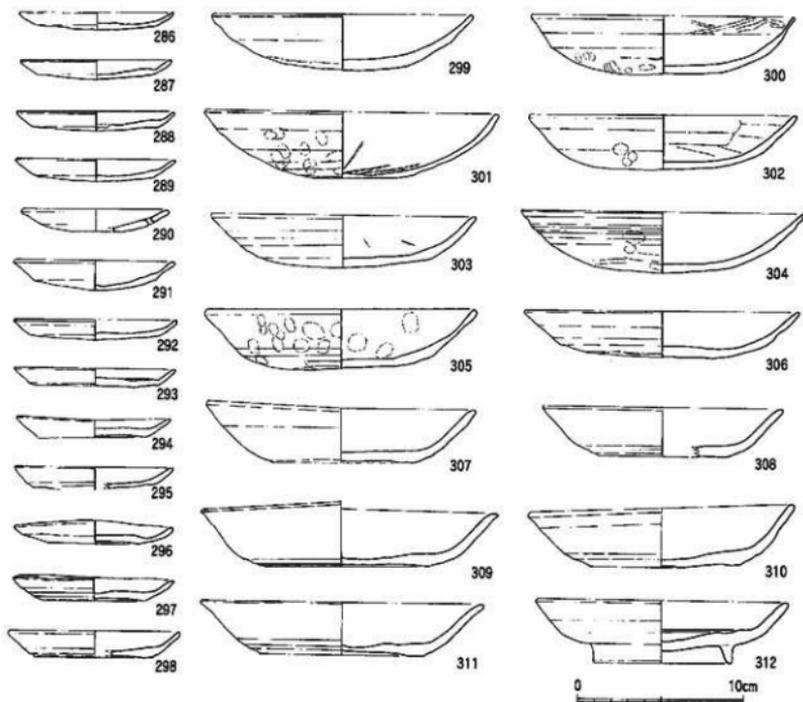
調査区北西に位置し、北側は区外に延びる。5基のなかで最初に検出した井戸である。SE2381、2382、2423、2461と切り合う。検出時には切り合いが分からず、このため掘方の上部、特に西側は不



第44図 SE2218実測図 (1/40)

確実である。平面形は円形を呈し、標高1.0mではほぼ中央に径約70cmの井筒を掘る掘方を有す。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径50cmの桶が用いられる。最下部は湧水(標高約0.5m)により完掘できなかった。

出土遺物 (第50図)



第45図 SE2218出土遺物実測図(1) (1/3)

321～324は上師器の小皿。321は底部へラ切りで板状圧痕を有す。復元口径9.6cmを測る。322～324は底部糸切りで322は板状圧痕を有す。口径8.8～9.6cmを測る。325は環で復元口径15.0cmを測る。326は須恵器の碗。混入品であろう。327・328は白磁の碗。327は復元口径17.2cmを測る。軸は体部下半まで施される。外面にピンホールが多い。329は陶器の甕。褐色の釉がかかり、露胎部は赤褐色を呈す。

SE2381 (第48図)

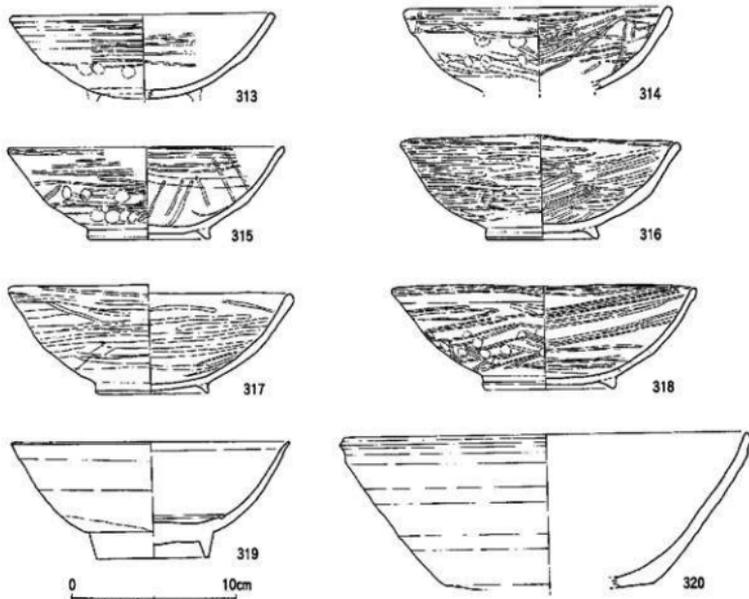
SE2363に切られて位置する。前述のように当初切り合いが判別できなかったことから堀方の上部は不確実である。平面形は円形を呈し、標高1mでほぼ中央に径約90cmの井筒を据える堀方を有す。井筒は遺存が悪いが、幅約10cmの板材を組み合わせた径60cmの桶が用いられる。最下部は湧水(標高約0.5m)により完掘できなかった。

出土遺物(第50図)

帰属の分かる遺物は少ない。330・331は白磁の口縁部。332は須恵質の甕。

SE2382 (第48図)

SE2363に切られて位置する。前述のように当初切り合いが判別できなかったことから堀方の上部は不確実である。平面形は円形を呈し、標高0.9mで、堀方西寄りであり井筒が確認された。井筒は遺存が



第46図 SE2218(出土遺物実測図②) (1/3)

悪いが、幅約10cmの板材を組み合わせた径70cmの桶が用いられる。最下部は湧水（標高約0.5m）により完掘できなかった。

出土遺物（第50図）

333は土師器の小皿。復元口径9.0cmを測る。底部は糸切り。334は瓦器碗。復元口径16.6cmを測る。内外面ともヘラ研磨を施す。

SE2423（第49図）

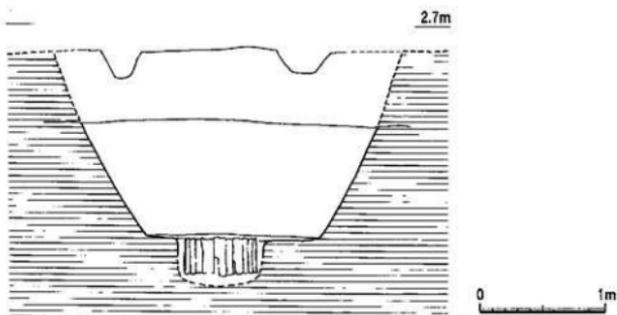
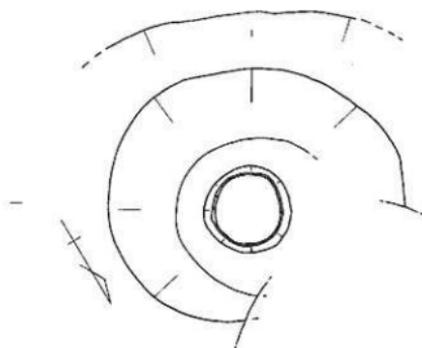
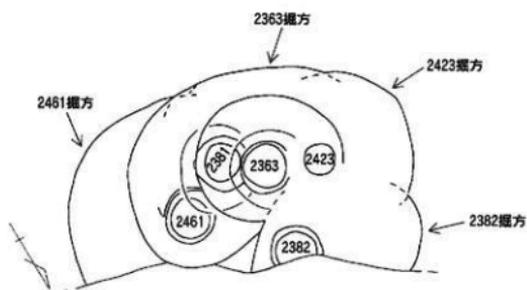
SE2363に切られて位置する。前述のように当初切り合いが判別できなかったことから掘方の上部は不確実である。平面形は円形を呈し、標高0.9mで井筒が確認された。井筒は遺存が悪いが、幅約10cmの板材を組み合わせた径50cmの桶が用いられる。最下部は湧水（標高約0.5m）により完掘できなかった。

出土遺物（第50図）

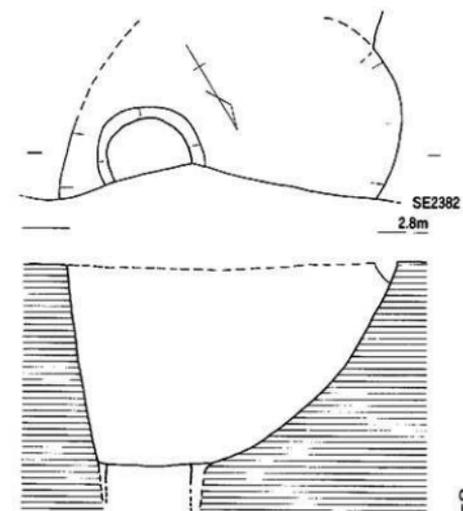
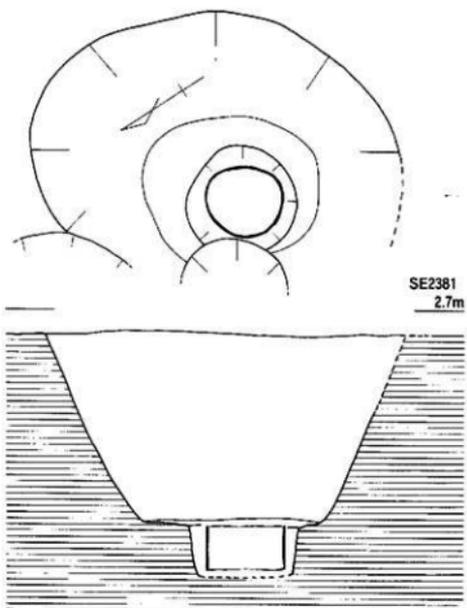
335は土師器の小皿。復元口径8.4cmを測る。底部は糸切り。336は瓦器碗。復元口径17.6cmを測る。内外面ともヘラ研磨を施す。337は白磁の碗。復元口径17.8cm、器高6.3cmを測る。軸は灰白色を呈し、高台際まで施され、一部高台にかかる。338・339は青白磁の合子。口縁部と底部が露胎となる。井筒から完形で出土。

SE2461（第49図）

SE2363に切られて位置する。前述のように当初切り合いが判別できなかったことから掘方の上部

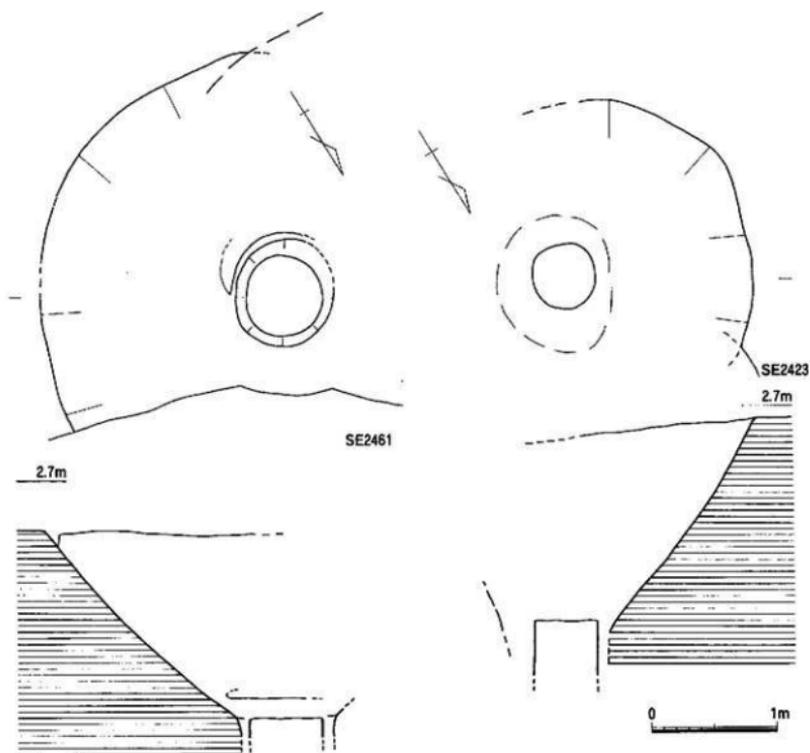


第47図 SE2363・2381・2382・2423・2461配置図及びSE2363実測図 (1/40)



第48图 SE2381・2382夹测图 (1/40)

0 1m



第49図 SE2423・2461実測図 (1/40)

は不確定である。平面形は円形を呈し、標高0.9mで井筒が確認された。井筒は遺存が悪いが、幅約10cmの板材を組み合わせた径60cmの桶が用いられる。最下部は湧水（標高約0.5m）により完掘できなかった。

出土遺物（第50図）

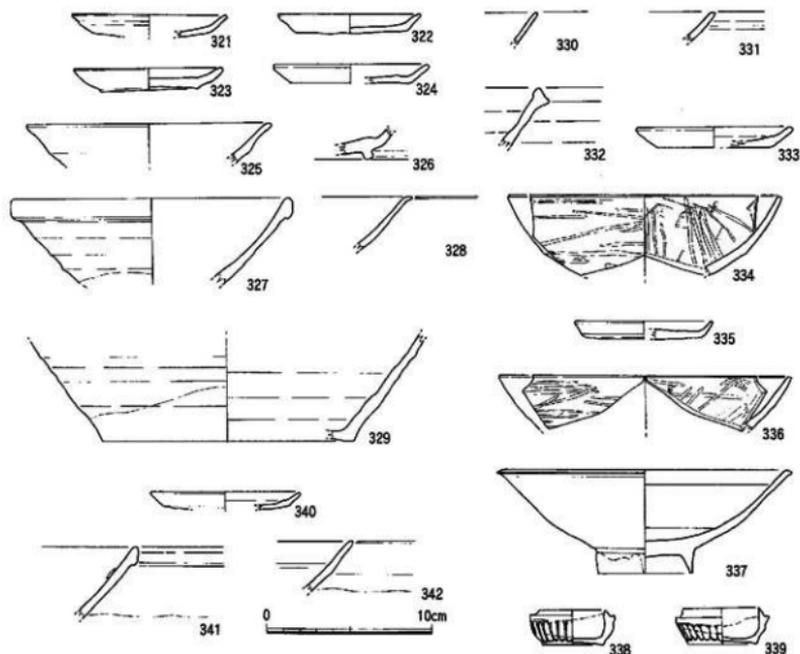
340は土師器の小皿。復元口径9.2cmを測る。底部はヘラ切りか。341・342は白磁の碗。

SE2471（第51図）

調査区中央西寄りに位置する。堀方の平面形は楕円形を呈し、長さ320cm程度、幅270cmを測る。標高1.0mで段を有し、北寄りに井筒を掘える。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径60cmの桶が用いられる。最下部は湧水（標高約0.5m）により完掘できなかった。

出土遺物（第51図）

343・344は土師器の小皿でいずれも底部は回転糸切り。それぞれ復元口径9.9cm、10.2cmを測る。345



第50図 SE2363・2381・2382・2423・2461出土遺物実測図(1/3)

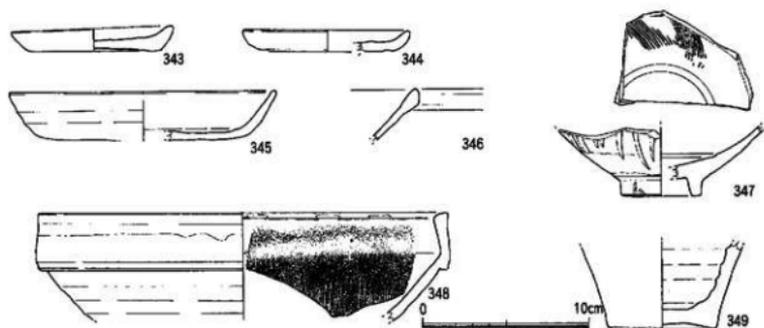
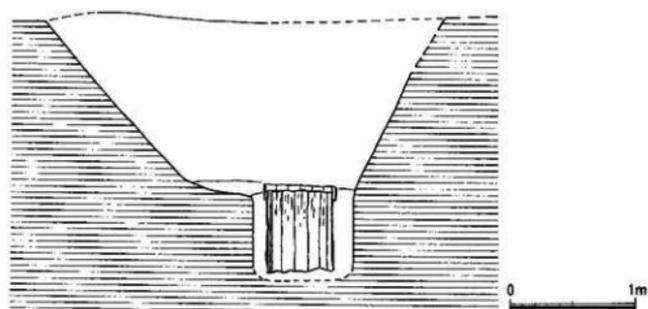
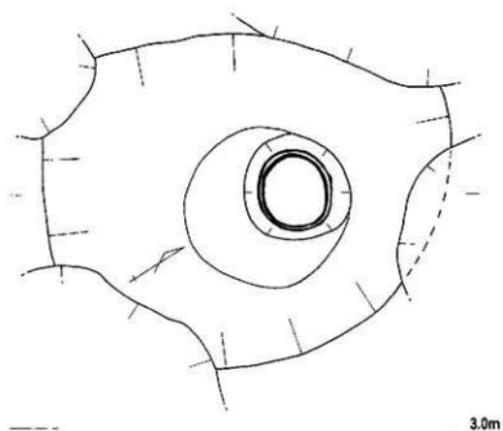
は土師器の坏で復元口径16.2cmを測る。底部は回転糸切り。346は白磁碗の口縁部。347は同安窯系青磁碗。外面はヘラ状工具による、内面は櫛状工具による施文が行われている。軸は灰オリブ色を呈し、高台際まで施される。348は播鉢である。349は陶器の臺の底部である。

SE2476 (第52図)

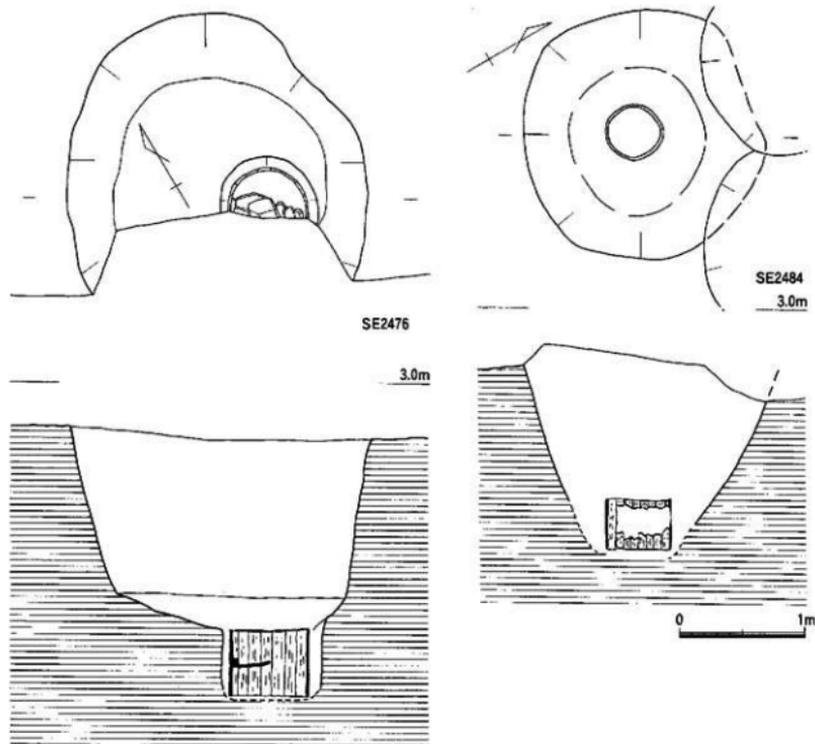
調査区南西隅に位置する。南側は区外に延びる。堀方の平面形は円形を呈し、径245cmを測る。標高1.3mで段を成し、東寄りに井筒を掘える。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径60cmの桶が用いられる。最下部は湧水(標高約0.5m)により完掘できなかった。12世紀後半以降と考えられる。

出土遺物(第53図)

350・351は土師器の小皿でそれぞれ復元口径8.4cmを測る。底部は糸切りで、352は板状汗痕を有す。352~357は白磁。352~356は碗。352は口縁部に輪花を有し、内面に施文する。357は皿である。358~363は青磁。358は同安窯系の碗。軸は灰オリブ色を呈し、内面はヘラ、櫛状工具による、外面は櫛状工具による施文が行われる。359~363は龍泉窯系の碗。359は復元口径16.2cmを測る。軸は灰オリブ色を呈し、内面にヘラ状工具で施文される。360は復元口径16.6cm、オリブ灰色を呈し、内面にヘラ状工具で蓮華文を施される。361は復元口径18.0cm、明オリブ灰色を呈し、口縁部に輪花を有し内面にヘラ状工具で飛雲文を施される。364は陶器の盃で、暗赤褐色の軸が施される。365は甃で、暗オリブ色の軸が施される。



第51図 SE2471実測図 (1/40) 及び山十遺跡実測図 (1/3)



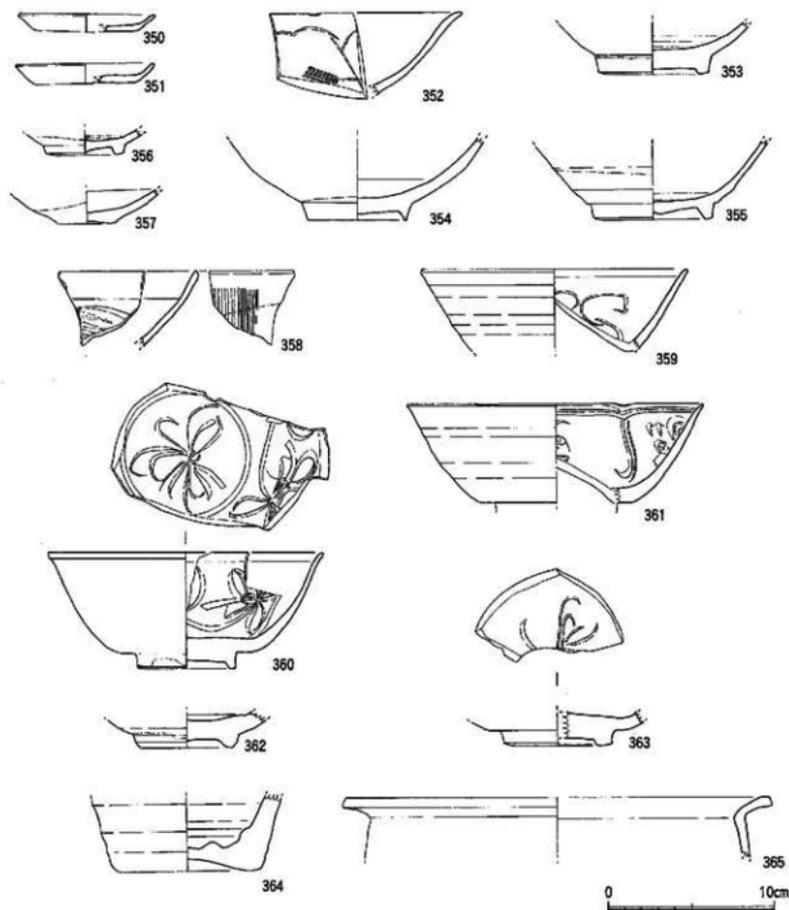
第52図 SE2476・2484実測図 (1/40)

#### SE2484 (第52図)

調査区中央西寄り、SE2471の西に位置する。堀方の平面形は円形を呈し、径200cm前後を測る。標高0.9mで井筒が確認された。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径50cmの桶が用いられる。最下部は湧水（標高約0.5m）により完掘できなかった。12世紀後半と考えられる。

#### 出土遺物 (第54図)

366・367は土師器の小皿でそれぞれ復元口径9.0cmを測る。底部は糸切りで、367は板状圧痕を有す。368は土師器の鍋。外面には煤が厚く付着している。369は瓦器碗である。370～372は白磁。370・371は碗。370は玉縁の口縁部を成す。371は内面に施文する。372は皿で見込みに櫛状工具で施文する。373～376は青磁。373は同安窯系の碗。オリーブ灰色の釉が体部下半まで施され、内面には櫛状工具で施文する。374は龍泉窯系の碗。釉は灰オリーブ色を呈し、内面にはヘラ状工具で施文する。375は同安窯系の皿。復元口径10.8cmを測る。釉は緑灰色を呈し、内面にはヘラ及び櫛状工具で施文する。376は龍泉窯系の皿。377は須恵質の鉢である。



第53図 SE2476出土遺物実測図 (1/3)

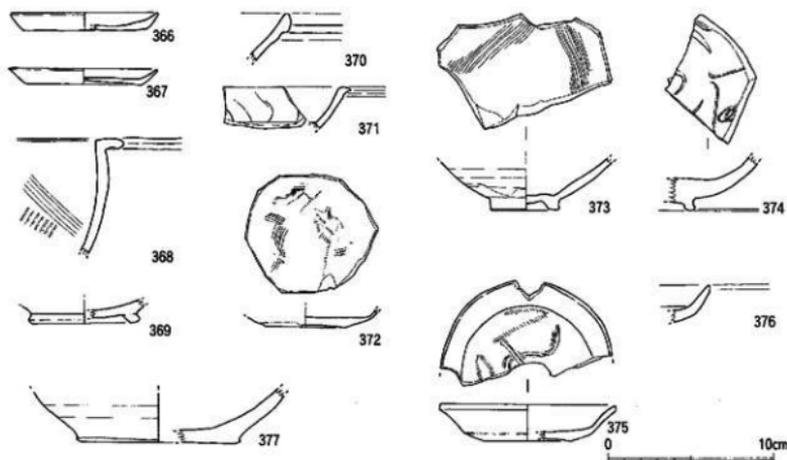
## 2) 上坑・土壙墓 (木棺墓) (SK)

本来は両者を区別すべきであろうが、判別しがたいものも多く、便宜上分けずに掲載した。

### SK2028 (第55図)

調査区南に位置する木棺墓である。墓壇の平面形は長方形を呈し、長さ231cm、幅83cm、深さ15cmを測る。棺は釘の位置から長さ180cm、幅55cm程度と考えられる。人骨は遺存しない13世紀前後とおもわれる。

出土遺物 (第55図)



第54図 SE2484出土遺物実測図 (1/3)

副葬品として龍泉窯系青磁碗378と白磁皿379が出土している。378は口径16.5cm、器高6.3cmを測り、外面に簡連弁文を有す。軸は高台際まで施される。379は口径12.8cm、器高2.4cmを測る。体部中位で屈曲し、内面に草花文のスタンプが施される。380～397は釘である。長さは5cm～7.5cm程度を測る。他に覆土から土師器の細片が出土している。

SK2069 (第56図)

調査区南に位置する。釘の出土から木棺墓の可能性がある。墳の南側を切られる。平面形は長方形を呈し、幅100cm、深さ40cmを測る。12世紀後半と考えられる。

出土遺物 (第56図) 398・399は土師器の小皿でそれぞれ復元口径9.0cm、8.5cmを測る。いずれも底部糸切り。400は環。401は壺か。402は瓦器椀。復元口径15.2cmを測る。内外面ともヘラ研磨を施す。403・404は白磁の碗。405～414は釘。406以外は細身で5～6cm程度を測る。

SK2120 (第57図)

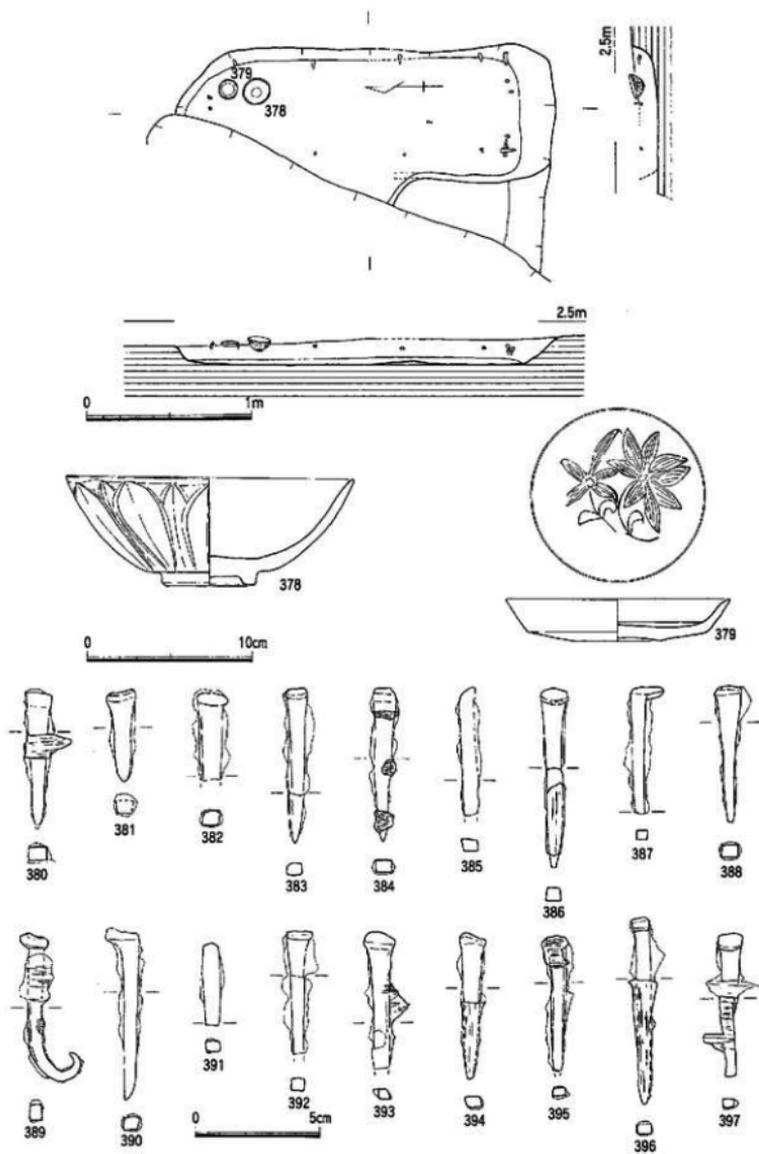
調査区北、SE2218を切って位置する木棺墓である。墓壇の平面形は長方形を呈し、長さ185cm程度、幅90cm、深さ30cmを測る。人骨は遺存しない。13世紀中～後半か。

出土遺物 (第57図) 副葬品として龍泉窯系青磁碗416が出土している。415は底部糸切りの土師器小皿で復元口径9.2cmを測る。416は口径15.4cm、器高6.2cmを測り、外面に簡連弁文を有す。軸はオリブ灰色を呈し、体部から高台に一部かかる。高台内はやや赤く発色する。417～423は釘である。長さは4.5cm～5.5cm程度を測る。

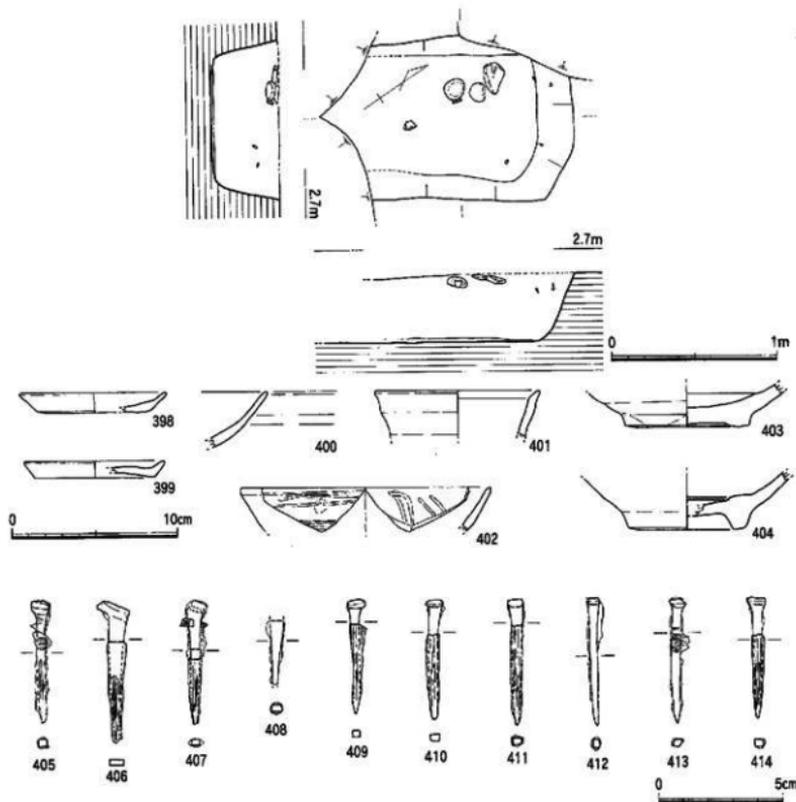
SK2430 (第58図)

調査区北に位置する。釘の出土から木棺墓の可能性ある。墓壇の平面形は長方形を呈し、長さ253cm、幅132cm、深さ50cmを測る。

出土遺物 (第58図) 424・425は土師器の小皿でそれぞれ復元口径9.0cm、9.4cmを測る。いずれも底部糸切り。426・427は環でそれぞれ復元口径15.8cm、15.4cmを測る。427は底部糸切り。428・429は白磁。



第55図 SK2028実測図 (1/30) 及び出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第56図 SK2069実測図 (1/30) 及び出土遺物実測図 (1/2・1/3)

430・431は青磁。432～440は釘。異なった種類のものが使用されている。441は刀子。

**SK2007 (第59図)**

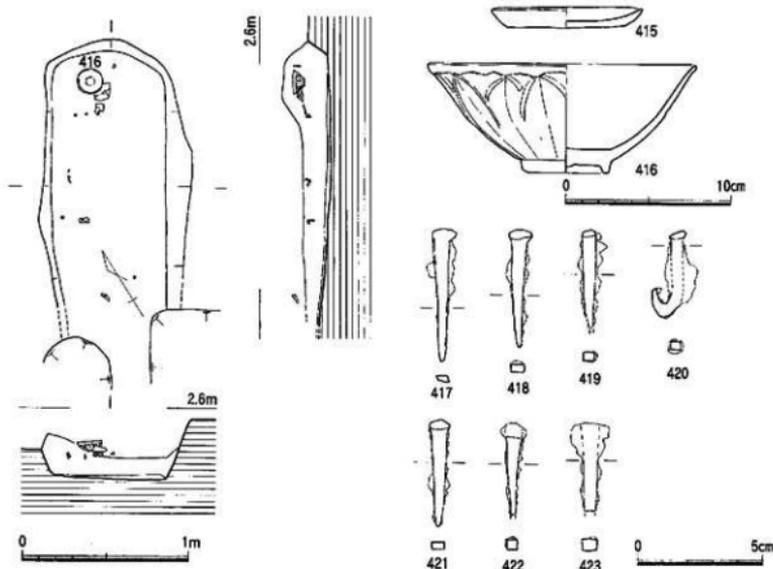
調査区南東隅に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ153cm、幅110cm、深さ18cmを測る。土師器の坏、小皿の細片が出土している。

**SK2030 (第59図)**

調査区東に位置し、南側をSD2018に切られる。平面形は長方形を呈し、長さ85cm以上、幅72cm、深さ17cmを測る。遺物は底部糸切りの土師器小皿の細片が出土している。

**SK2033 (第59図)**

調査区南東に位置し、南側は調査区外に延びる。平面形は楕円形を呈し、北側はビット状に一段低くなる。長さ153cm、幅110cm、深さ18cmを測る。



第57図 SK2120実測図 (1/30) 及び出土遺物実測図 (1/2・1/3)

出土遺物 (第60図) 442は土師器の碗。443~445は白磁。443・444は碗、445は皿。446は青磁。小碗か。オリブ黄色の釉がかかる。447は陶器の壺。

**SK2037 (第59図)**

調査区南東、SK2028の東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ128cm、幅90cm、深さ52cmを測る。遺物は底部糸切りの土師器、白磁、青磁等の細片が出七している。

**SK2079 (第59図)**

調査区北東に位置する。不整な長方形を呈し、長さ153cm、幅118cm、深さ35cmを測る。出土遺物 (第60図) 448・449は土師器の小皿。復元口径はそれぞれ8.4cm、9.0cmを測る。底部は糸切り。450は龍泉窯系の青磁碗。外面に篋連弁を施す。

**SK2092 (第59図)**

調査区北東に位置する。平面形は楕円形を呈し、中央部に小穴が付く。長さ154cm、幅72cm、深さ46cmを測る。

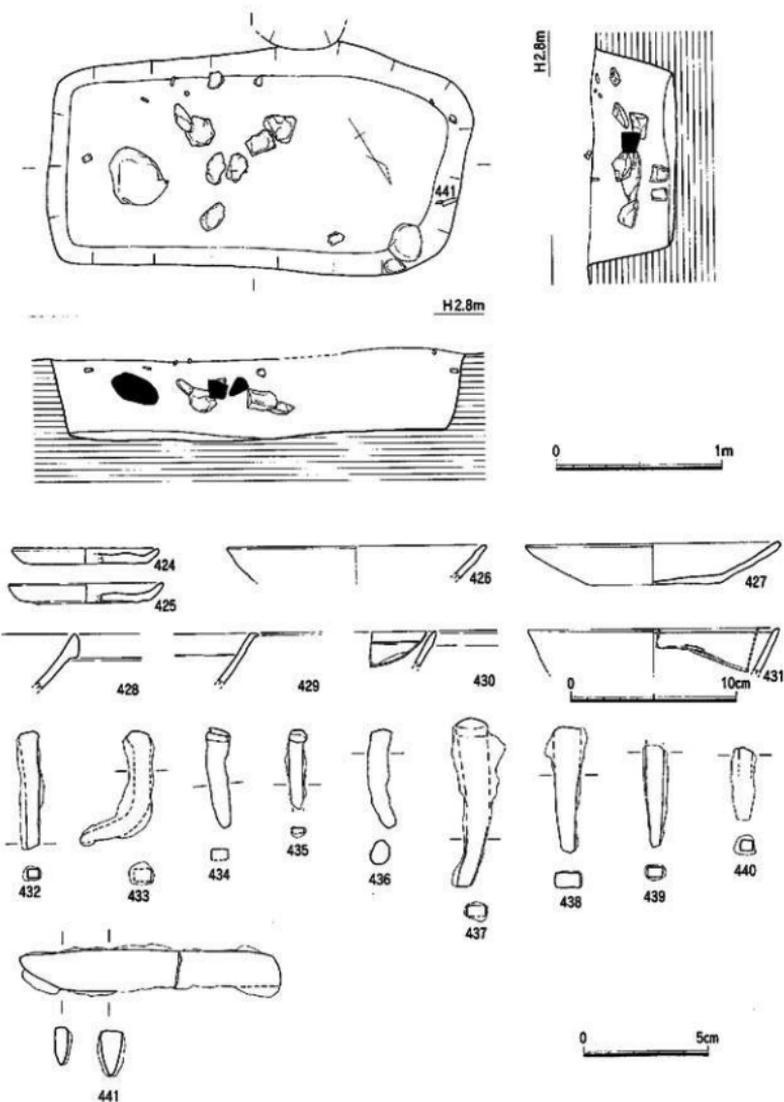
出土遺物 (第60図) 451は底部ヘラ切りの土師器の小皿で底部に穿孔する。

**SK2094 (第59図)**

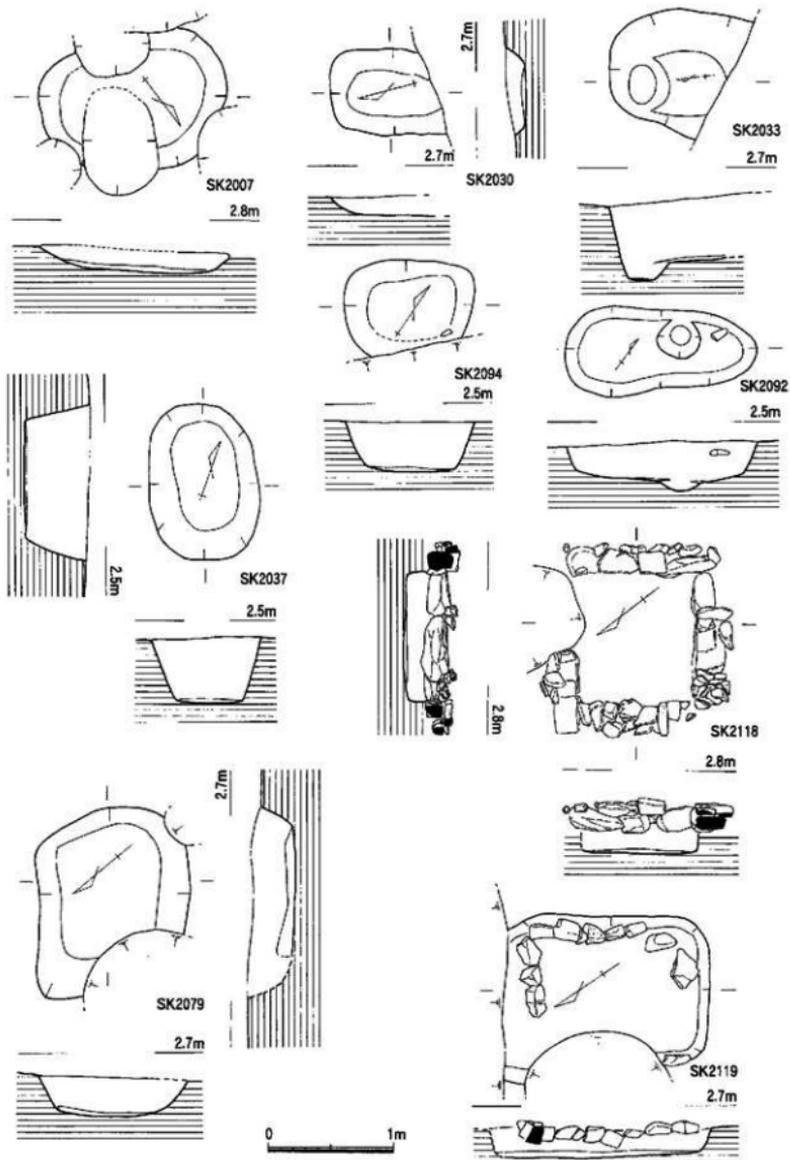
調査区北東に位置し、SD2025に切られる。平面形は長方形を呈す。長さ103cm、幅70cm以上、深さ41cmを測る。

出土遺物 (第60図)

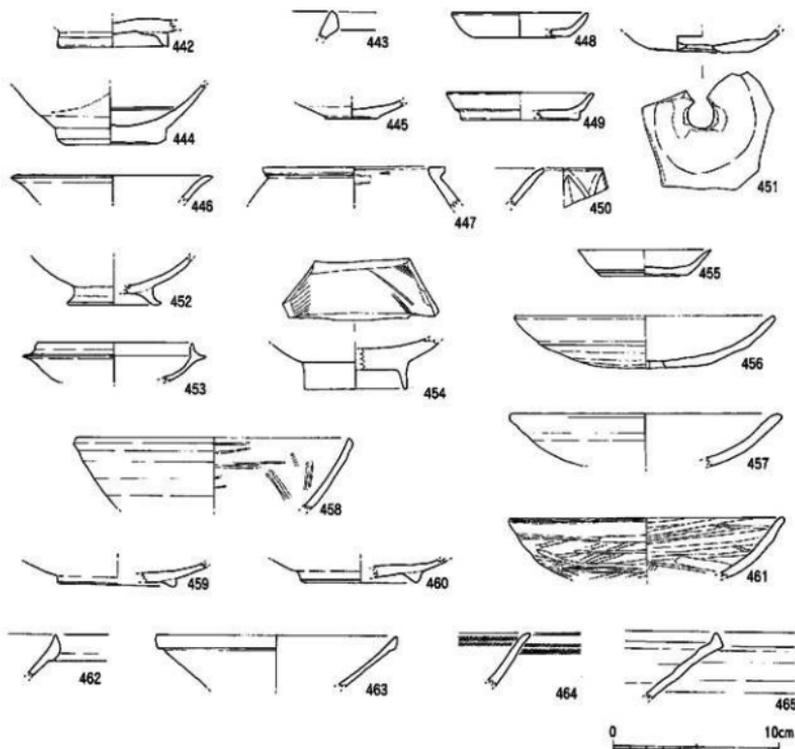
452は土師器の碗。453は須恵器の坏。風化が著しく混入品。454は白磁の碗。内面に櫛状工具によ



第58図 SK2430実測図 (1/30) 及び出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第59图 SK2007·2030·2033·2037·2079·2092·2094·2118·2119实测图 (1/40)



第60図 SK2033・2079・2092・2094・2118出土遺物実測図(1/3)

る施文を行う。

**SK2118 (第59図)**

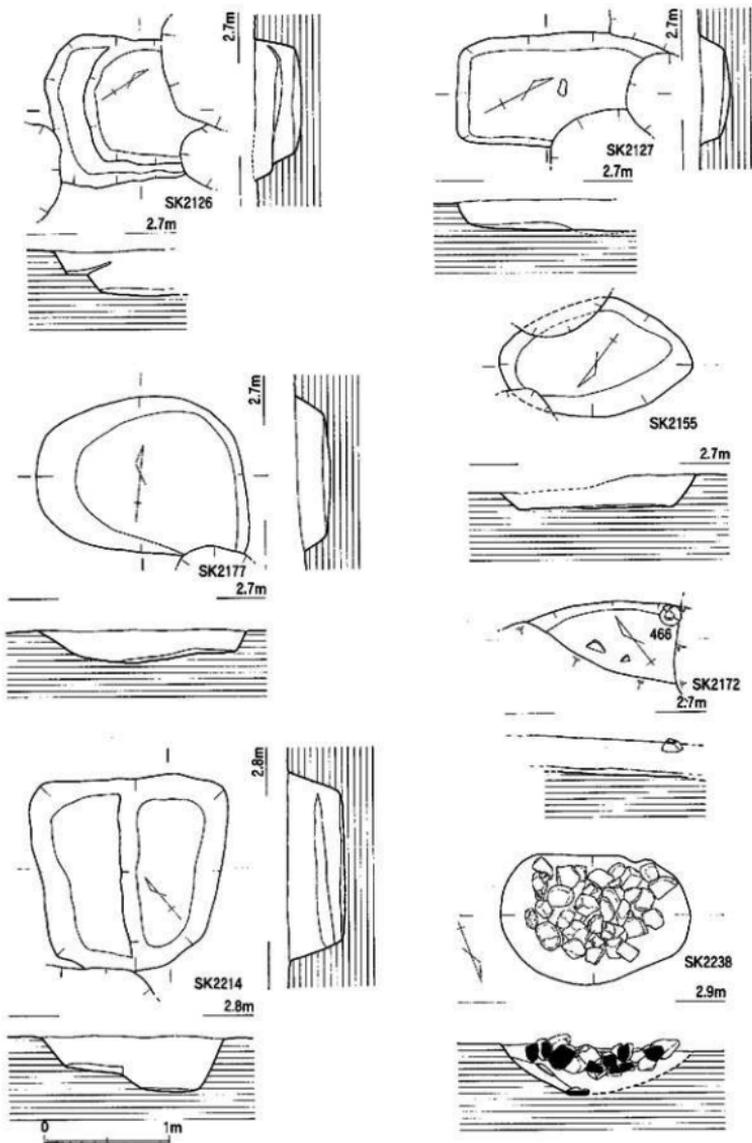
調査区中央に位置する石組土坑である。北側を遺構に切られる。方形を呈し、東西168cm、南北130cm、深さ48cmを測る。15cm～50cm大の石材を雑に組んでいる。現状で2段遺存している。

**出土遺物 (第60図)**

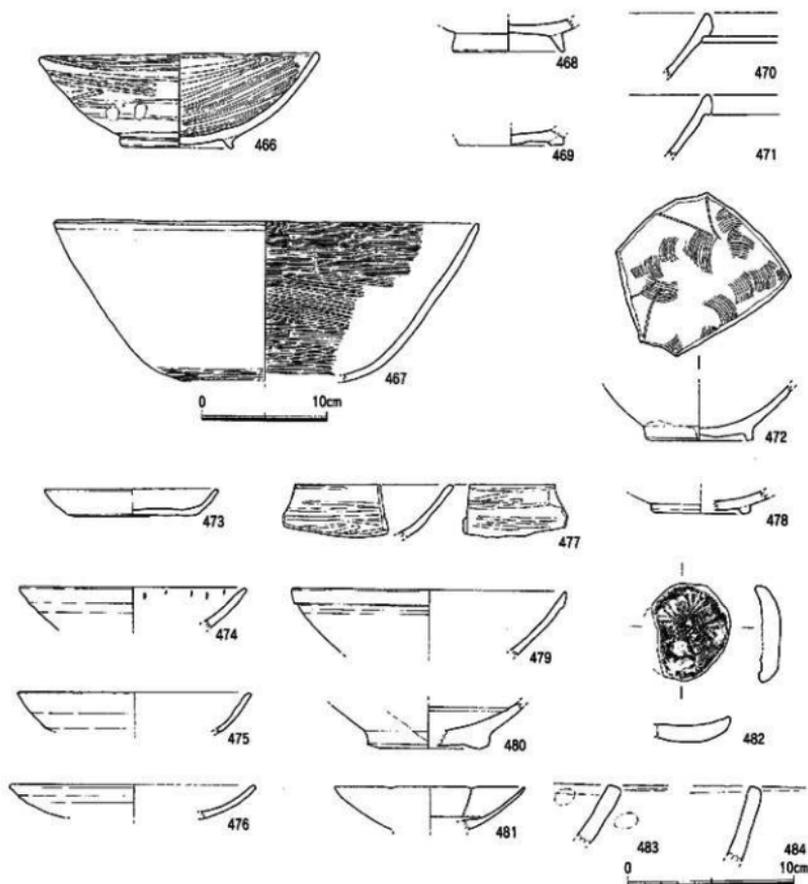
455～458は土師器。455は小皿で復元口径7.6cmを測る。底部糸切り。456・457は環でそれぞれ復元口径は14.8cm、15.6cmを測る。底部はヘラ切り。458は碗。復元口径16.0cmを測る。459～461は瓦器碗。内外面ともヘラ研磨を施す。461は復元口径15.8cmを測る。462・463は白磁の碗。463は復元口径14.8cmを測る。464は青磁の碗。465は須恵質の鉢。

**SK2119 (第59図)**

調査区南に位置する石組土坑である。西側を近代井戸に切られる。平面形は長方形を呈し、長さ166cm以上、幅110cm以上、深さ25cmを測る。20cm～30cm大の石材を雑に組んでいる。現状で1段遺存している。出土遺物は底部糸切りの土師器、白磁、青磁、陶器等が出土している。



第61图 SK2126・2127・2155・2172・2177・2214・2338实测图 (1/40)



第62図 SK2172・2177・2238出土遺物実測図(1/3)

SK2126 (第61図)

調査区北に位置する。北側を擾乱に切られる。平面形は長方形を呈し、南側にテラスが付く。幅114cm、深さ38cmを測る。底部糸切りの土師器、瓦器、高嶺青磁の細片が出土している。

SK2127 (第61図)

調査区北、SK2126の西に接して位置する。北側を擾乱に切られる。平面形は長方形を呈し、幅91cm、深さ26cmを測る。遺物は土師器と白磁の細片が出土している。

SK2155 (第61図)

調査区中央に位置する。東西を遺構、擾乱に切られる。平面形はやや不整な楕円形を呈し、壁は緩

やかに立つ。長さ156cm、幅97cm、深さ26cmを測る。遺物は底部糸切りの土師器、青磁の細片、瓦等が出土している。

#### SK2172 (第61図)

調査区南に位置する。SE2171、2223に切られる。平面形は楕円形か。深さ23cmを測る。出土遺物(第62図)466は瓦器碗で口径17.0cm、器高5.8cmを測る。内外面ともへら研磨を施す。467は土師器の鍋。外面には煤が付着している。他に須臾器の細片が出土している。

#### SK2177 (第61図)

調査区南に位置し、SK2028に切られる。平面形は不整な楕円形を呈し、壁は緩やかに立つ。長さ166cm、幅125cm、深さ27cmを測る。

出土遺物(第62図)468は土師器の碗。469は瓦器碗。470から472は白磁の碗。470・471の口縁は玉縁を成し、472は内面に櫛状工具で施文する。

#### SK2214 (第61図)

調査区北に位置し、SK2120を切る。平面形は不整な方形を呈し、床面は段が付く。南北156cm、東西146cm、深さ45cmを測る。遺物は土師器、青磁、白磁、陶器等の細片が出土している。

#### SK2238 (第61図)

調査区西に位置し、SK2380を切る。平面形はやや不整な楕円形を呈し、壁は立たない。長さ153cm、幅105cm、深さ33cmを測る。坑内は20~30cm大の石が間なく詰められており幾つかは、被熱していた。出土遺物から生産遺構の可能性が考えたが、石の火の受けた面が揃わないこと、壁、床面に被熱痕がないことから廃棄土坑であろう。

出土遺物(第62図)473~476は土師器。474は底部へら切りの小皿。復元口径10.2cmを測る。474~476は坏。復元口径13.8cm~15.0cmを測る。477・478は瓦器碗。内外面ともへら研磨を施す。479~481は白磁。479・480は碗。479は復元口径16.6cmを測る。481は皿で復元口径11.6cmを測る。口縁部は輪花を成す。482は砂岩質の鉢型。型面には花卉状?の彫り込みがなされ、熱により黒色化している。483・484は埴壇の口縁部。熱を受け、ガラス質のものが付着している。

#### SK2263 (第63図)

調査区南西端に位置する。西側は調査区外に延びる。平面形は長方形を呈し、壁が鋭角に立つ。幅105cm、深さ38cmを測る。床面全体に石が配置される。土師器の細片が出土している。

#### SK2264 (第63図)

SK2263の南に位置する。西側は調査区外に延びる。平面形は長方形を呈し、壁が鋭角に立つ。幅162cm、深さ60cmを測る。床面全体に石が配置される。同安窯系の青磁、土師器が出土している。

#### SK2287 (第63図)

調査区北西隅に位置し、SE2363等を切る。平面形は円形を呈し、段掘りになる。径116cm~124cm、深さ99cmを測る。

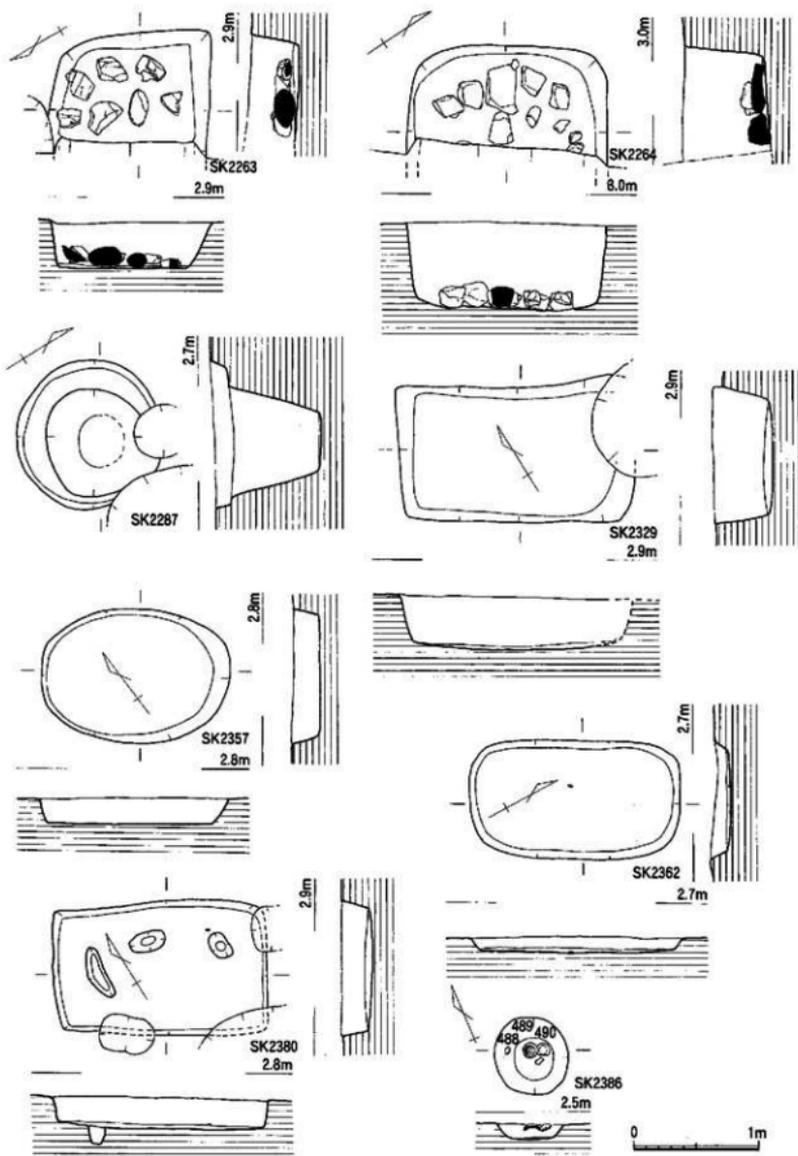
出土遺物(第66図)485は土師器の小皿。口径8.1cmを測る。底部は糸切り。486は瓦器碗。

#### SK2329 (第63図)

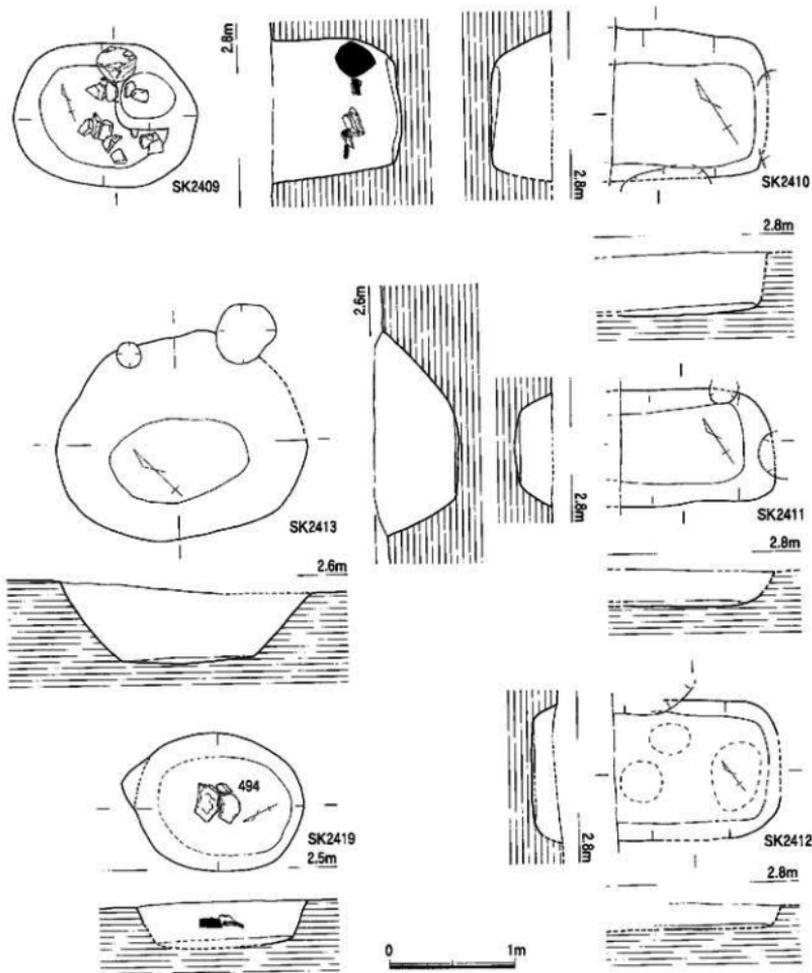
調査区西に位置する。平面形は長方形を呈し、壁が鋭角に立つ。東側を一部切られる。長さ190cm、幅110cm、深さ37cmを測る。遺物は青磁、白磁、土師器の細片が出土している。

#### SK2357 (第63図)

調査区西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ152cm、幅110cm、深さ22cmを測る。出土遺物(第66図)487は龍泉窯系の青磁碗。見込みにスタンプ文を施す。他に白磁片が出土。



第63图 SK2263 • 2264 • 2287 • 2329 • 2357 • 2362 • 2380 • 2386 实测图 (1/40)

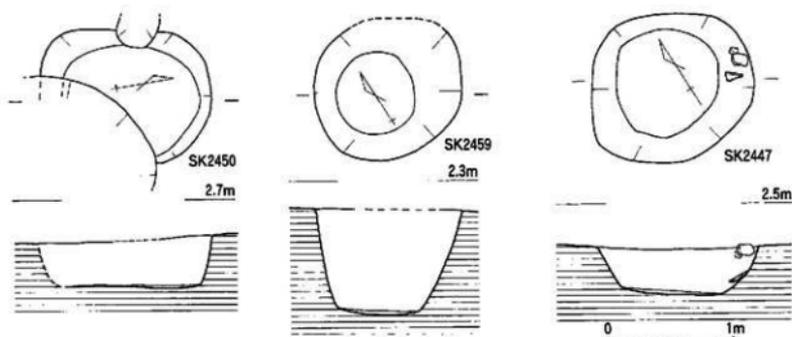


第64図 SK2409～2413・2419実測図 (1/40)

SK2362 (第63図)

調査区中央西寄りに位置し、SE2484を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ170cm、幅95cm、深さ13cmを測る。遺物は同安系青磁、白磁、底部糸切りの土師器等が出土している。

SK2380 (第63図)



第65図 SK2447・2450・2459実測図 (1/40)

調査区西に位置し、SK2238に切られる。平面形は長方形を呈し、長さ172cm、幅106cm、深さ26cmを測る。青磁、白磁、底部糸切りの土師器等が出土している。

**SK2386 (第63図)**

調査区西に位置する。平面形は円形を呈し、径60cm～63cm、深さ12cmを測る。

出土遺物(第66図)488は土師器の小皿で口径8.0cmを測る。底部は回転糸切り。内面は被熱している。489・490はいずれもほぼ完形で出土した。土師器の坏で489は口径12.5cm、器高2.8cmを測る。底部は回転糸切り。口縁部内面には煤が付着する。490は口径12.1cm、器高2.9cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。

**SK2409 (第64図)**

調査区南西に位置する。平面形は楕円形を呈し、床面は小穴が付く。長さ148cm、幅116cm、深さ102cmを測る。坑内には石が投棄されていた。

出土遺物(第66図)491は白磁、口剥げの皿。492は同安窯系の碗。他に底部糸切りの土師器、高麗青磁の細片が出土している。

**SK2410 (第64図)**

調査区西端に位置する。西側は区外に延びる。平面形は長方形を呈し、幅124cm、深さ52cmを測る。遺物は青磁、白磁、陶器底部糸切りの土師器小皿の細片等が出土している。

**SK2411 (第64図)**

調査区西端、SK2410の北に位置する。西側は区外に延びる。平面形は長方形を呈し、幅93cm、深さ29cmを測る。遺物は白磁、陶器、底部糸切りの土師器小皿の細片等が出土している。

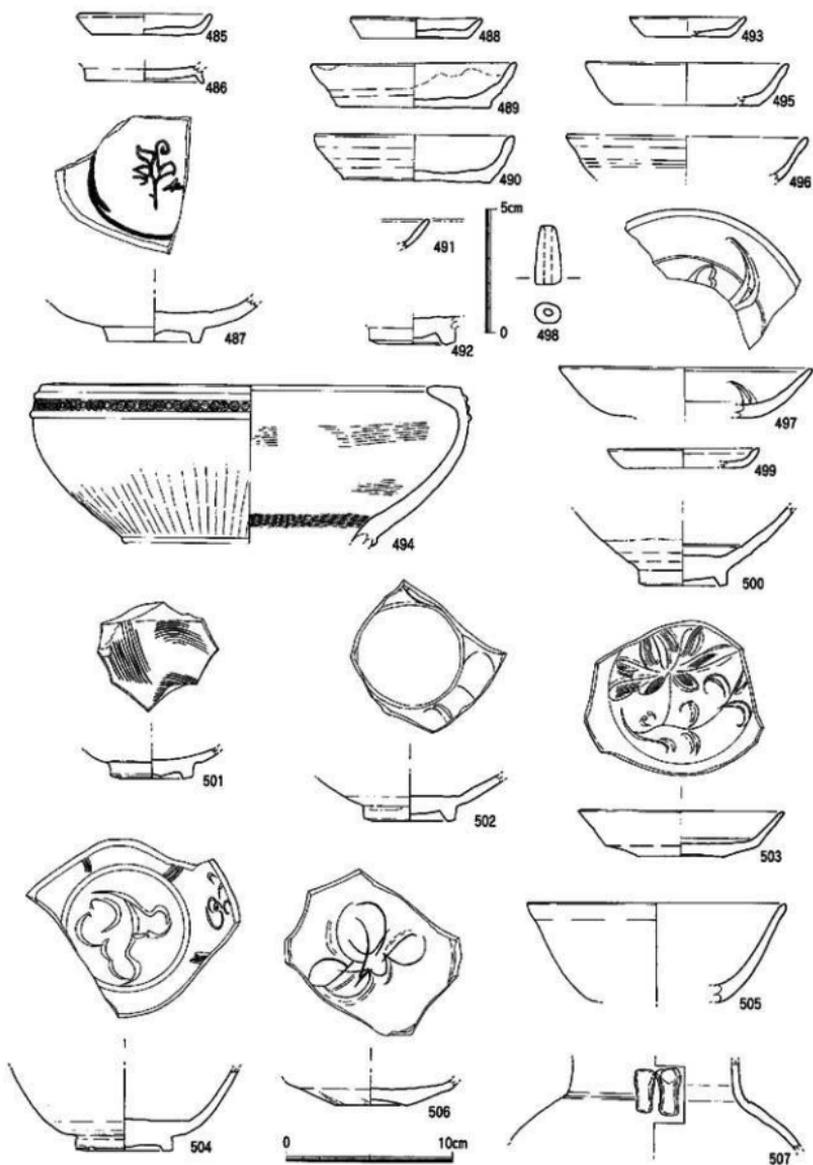
**SK2412 (第64図)**

調査区西端、2411の北に位置する。西側は区外に延びる。平面形は長方形を呈し幅114cm、深さ23cmを測る。遺物は青磁、白磁、陶器底部糸切りの土師器小皿の細片等が出土している。

**SK2413 (第64図)**

調査区西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ200cm、幅165cm、深さ65cmを測る。

出土遺物(第66図)493は土師器の小皿。復元口径7.0cmを測る。底部糸切り。口縁部には煤が付着している。他に瓦器、白磁、青磁、陶器の細片が出土している。



第66图 SK2287 • 2357 • 2386 • 2409 • 2413 • 2419 • 2447 • 2450 • 2459出土遗物实测图 (1/2 • 1/3)

### SK2419 (第64図)

調査区西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ148cm、幅112cm、深さ35cm程度を測る。掘削時に底面北側を掘りすぎてしまった。

出土遺物(第66図)494は瓦質の火鉢である。復元口径34.0cmを測る。SK2415の破片と接合した。他に底部糸切りの土師器、口刺げの白磁、青磁等が出土している。

### SK2447 (第65図)

調査区西に位置する。平面形は円形を呈し、径124cm~144cm、深さ36cmを測る。

出土遺物(第66図)495は土師器の坏。復元口径12.4cmを測る。底部は糸切り。他に瓦器碗、白磁、青磁などが出土している。

### SK2450 (第65図)

調査区中央西寄りに位置する。不整な楕円形を呈し、長さ139cm、幅115cm、深さ40cmを測る。

出土遺物(第66図)496は土師器の坏。復元口径14.6cmを測る。497は能泉窯系青磁の浅形碗。内面にヘラ状工具による蓮華文が施される。498は土鍾。他に瓦器、白磁、陶器等が出土している。

### SK2459 (第65図)

調査区中央西寄りに位置する。平面形は円形を呈し、径120cm~125cm、深さ87cmを測る。SE2471上に位置するが、これの井筒を上坑とした可能性がある。

出土遺物(第66図)499は底部糸切りの土師器小皿。復元口径9.2cmを測る。500~503は白磁。500~502は碗。503は皿。内面見込みで草花文のスタンプを施す。504~506は青磁。504・505は能泉窯系の碗。506は皿。507は陶器の水注。耳を2個付す。暗赤褐色の軸がかかる。

### 3) 溝 (SD)

調査区東側に集中し、重複が著しい。中世後半から近世のものが多いようである。

#### SD2001 (第40図)

調査区東端に位置し、南北方向に延びる。近世以降の溝とおもわれる。

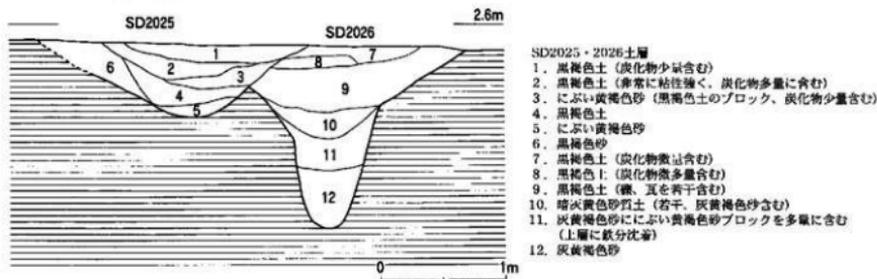
#### SD2017 (第40図)

調査区東端に位置し、東西方向に延びる。近世以降の溝とおもわれる。

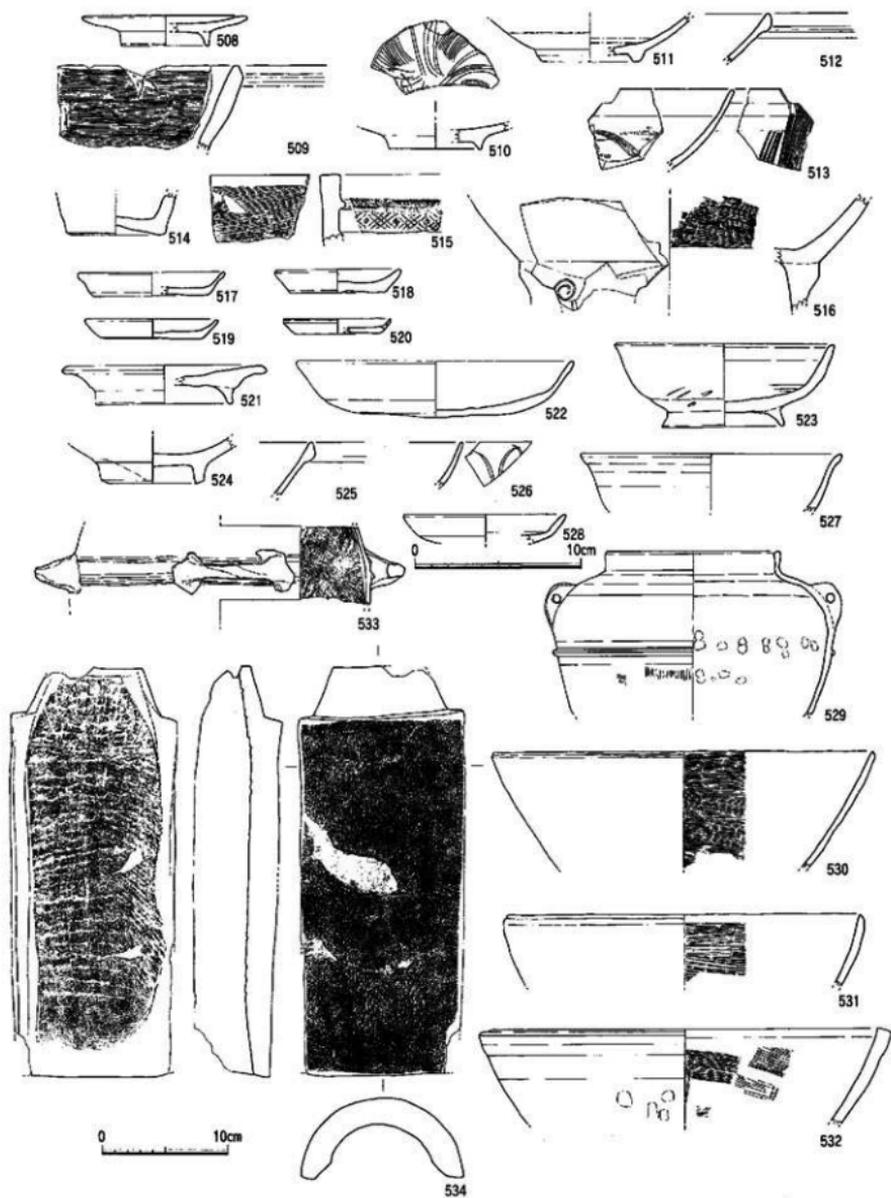
#### SD2018 (第40図)

SD2017と並行に延びる。近世以降の溝とおもわれるが掘り直しがあり、古くなる可能性がある。

#### SD2025 (第67図)



第67図 SD2025・2026上層図(1/40)



第68图 SD2025·2026出土文物实刻图 (1/3·1/4)

調査区東に位置し、南北方向に延びる。SD2026に切られる。断面形は逆台形、一部、Y字形を呈す。当初、切り合いが分からず、SD2026と合わせ、1条として掘削したため多くの遺物が混じってしまった。中世後半期とおもわれる。

出土遺物(第68図) 埴属の明らかなもののみ掲載した。508は高台付きの小皿。復元口径10.0cmを測る。509は土師質の鍋。510~512は白磁の碗。513は同安窯系の青磁碗。514は陶器の壺。オリブ黄の釉がかかる。515・516は火鉢。

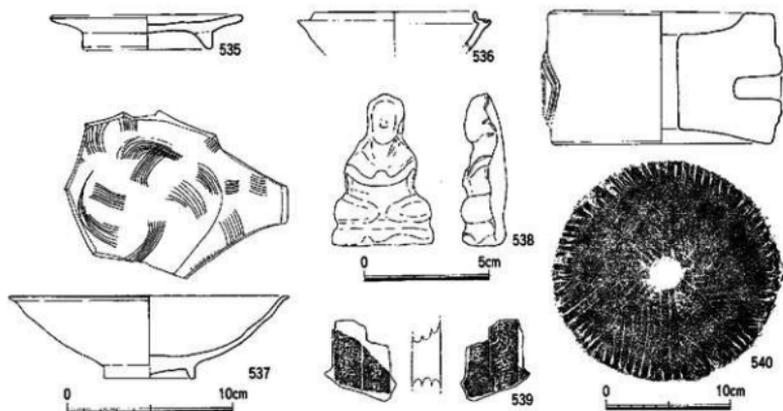
#### SD2026 (第67図)

調査区東に位置し、南北方向に延びる。SD2025に切る。壁は緩やかに立ち上がる。切り合いが分からず掘削したため多くの遺物が混じってしまった。中世後半期以降とおもわれる。

出土遺物(第68図) 517~523は土師器。517~520は小皿。口径6.6cm~9.0cmを測る。いずれも底部は糸切り。521は高台付きの小皿。復元口径11.6cmを測る。522は坏。復元口径15.8cmを測る。底部はヘラ切り。523は埴。口径13.4cm、器高5.2cmを測る。524・525は白磁の碗。526~528は青磁。526・527は碗。526は外面に連弁を有す。528は皿。529は瓦質の釜。外面は煤が付着している。530・531は土師質の鍋。532は瓦質の搥鉢。533は陶器の壺か。胴部に2条の凸帯を付し、把手が付く。外面は暗オリブ色を呈し、内面は同心円文の当て具痕が残る。534は丸瓦。凸面には縄目タタキ、凹面は布目と吊り紐痕が残る。

#### 4) その他の出土遺物(第69図)

535は高台付きの小皿。口径11.7cmを測る。536は須恵器の坏で復元口径9.8cm前後を測る。SD2025出土であるが混入品である。537は白磁の碗で復元口径16.0cm、器高4.8cmを測り、内面は櫛状工具により施文される。軸は灰白色を呈し体部下半まで施される。検出面出土。538は土製の座像で型押成形される。土師質で胎土は砂粒を多く含む。焼成はやや悪く、風化が著しく顔は鼻が借かに確認できるが詳細は不明。SD2026付近で出土。周辺で同じ型によるものが複数出土している。539は瓦経である。検出時出土。厚さ1.7cm、行幅は1.8cmを測る。焼成は良好であるが、色を呈し、還元している。阿弥陀経で、1行を17字とすれば13行と推定される。540は砂岩質の茶臼上臼である。径18.8cm、高さ11.0cm



第69図 その他の遺物 (1/2・1/3・1/4)

を測る。外面は研磨によって仕上げられる。SK2354出土。

## 5) 小結

C区では12世紀中頃～近世に至る井戸、土坑、木棺墓、溝、柱穴等を検出した。各遺構、遺物について簡単に述べて終わりとした。

井戸についてみると最も古く位置づけられるのがSE2218で12世紀中頃と考えられる。この時期が集落の初現期となる。この時期のものは他の遺構を含め調査区内やA区でも確認されておらず、さほどの広がりを持たないものと考えられる。続く12世紀後半以降に井筒に木桶を用いるSE2363、2381、2382、2423、2461の一群、SE2476、2484、2471等、数が増え本格的に集落が形成され、SE2471、2024と続く。この後が不明瞭ながら、構造的には井筒に瓦を用いる井戸となり、この間にくると考えられる石組み井戸は確認されていない。箱崎遺跡の井戸を分類された榎本氏によるとこのタイプは14世紀中頃以降に出現するとされているが(注1)、本調査区で確認されないのは構造的に主流となり得なかったのか、この時期に一時的に集落が縮小する可能性が考えられる。

土坑、埋葬遺構については人骨の遺存がなく、両者の区別が難しい。埋葬遺構として確実なものは、供献遺物の有無からSK2028、2120の2基のみで、いずれも木棺墓である。他に可能性が高いものは、釘の存在からSK2069、2430があげられる。これら以外では床面に配石し、壁が立つSK2263、2264や長方形プランで壁が立つ土坑群がその可能性を考えられるが、後にも触れるが、A区において町割り復元が行われている。この中で遺構の配置からごみ穴等の可能性も指摘されており確定できない。

溝については調査区東を南北に延びるSD2025・2026がある。これはA区の町割り復元要素をもとにみてみると町割りを構成する主要な溝である可能性が高い。また溝を含め調査区の遺構全体をみると現況道路を中心にA区、13次調査と対称な遺構配置をとり、A区と同様のものである。ただし、本調査区においては個々の遺構について十分な検討は出来ておらず、柱穴も建物にまとめられていない。集落構造、変遷については今後、隣接する37次調査の成果と合わせ検討したい。

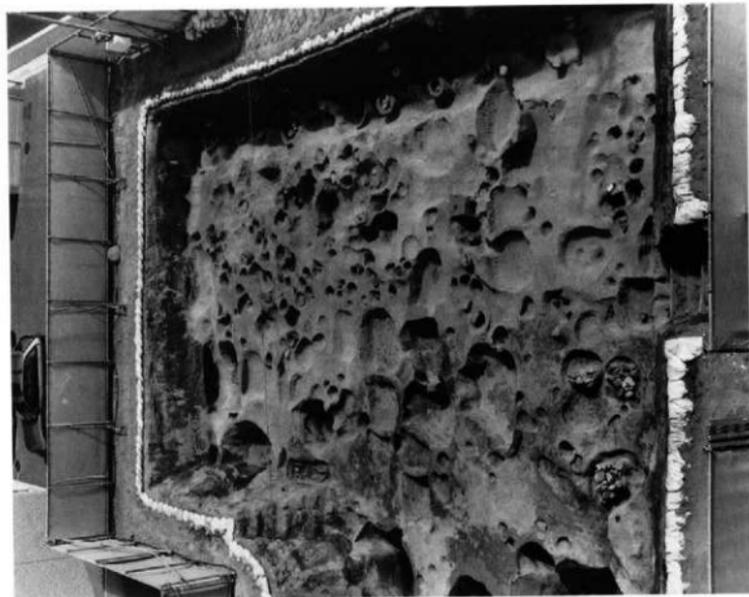
遺物についてみると本調査で最も古いものがSD2025、SK2094出土の古墳時代後期の須恵器の坏、これに続きSE2263出土の奈良時代の須恵器の壺があげられる。いずれも遺構の時期より古く混入品であり、当該期の遺構は確認できていない。本地点は砂丘の西側にあたるが、古墳時代の遺構は東側斜面を中心に分布することが指摘されており(注2)、出土した遺物は西側斜面の遺構面である砂丘上部の黄褐色砂層の形成時期を示すものかも知れない。また、今回瓦経の細片が出土したが、検出時の出土で遺構に伴わない。箱崎遺跡では他に宮崎宮境内の放生池の掘削工事中に出土している。これと一連の可能性もあるが、本拠点と直線距離で約150m程離れており、宮崎宮出土は仁王経と般若心経で本調査出土の阿弥陀経を含まないことから本調査地点の周辺に別の埋納遺構が存在する可能性も考えられる。

(注1) 中世都市研究会2003年九州大会 資料集「覆司市所在の箱崎遺跡について」 榎本義樹

(注2) (注1)と同じ

# 圖 版





(2) A区東半全景 (南西から)



(1) A区西半全景 (南東から)



(1) SE001 (北西から)



(2) SE022土層 (北面から)



(3) SE024 (南から)



(4) SE049 (西から)



(5) SK023 (西から)



(6) SK033 (南から)



B区全景 (西から)



(1) B区から西方を望む



(2) B区から東方を望む



(3) SE1087 (南東から)



(4) SK1088 (東から)



(1) 東側調査区全景 (西から)



(2) 西側調査区全景 (東から)



(1) SE2024 (北から)



(2) SE2218 (北から)



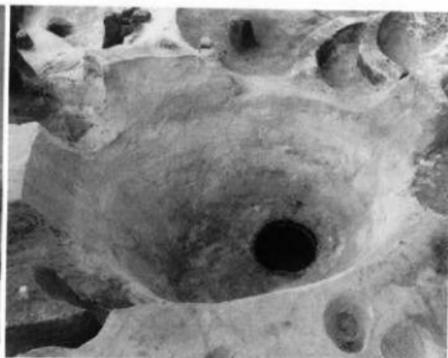
(3) SE2363 (北から)



(4) SE2381・2382・2423 (北から)



(5) SE2461 (北から)



(6) SE2471 (東から)



(1) SE2484 (東から)



(2) SK2028 (西から)



(3) SK2069 (東から)



(4) SK2120 (西から)



(5) SK2430 (北から)



(6) SK2118 (西から)



(1) SK2238 (北から)



(2) SK2263 (東から)



(3) SK2264 (東から)



(4) SK2386 (南から)



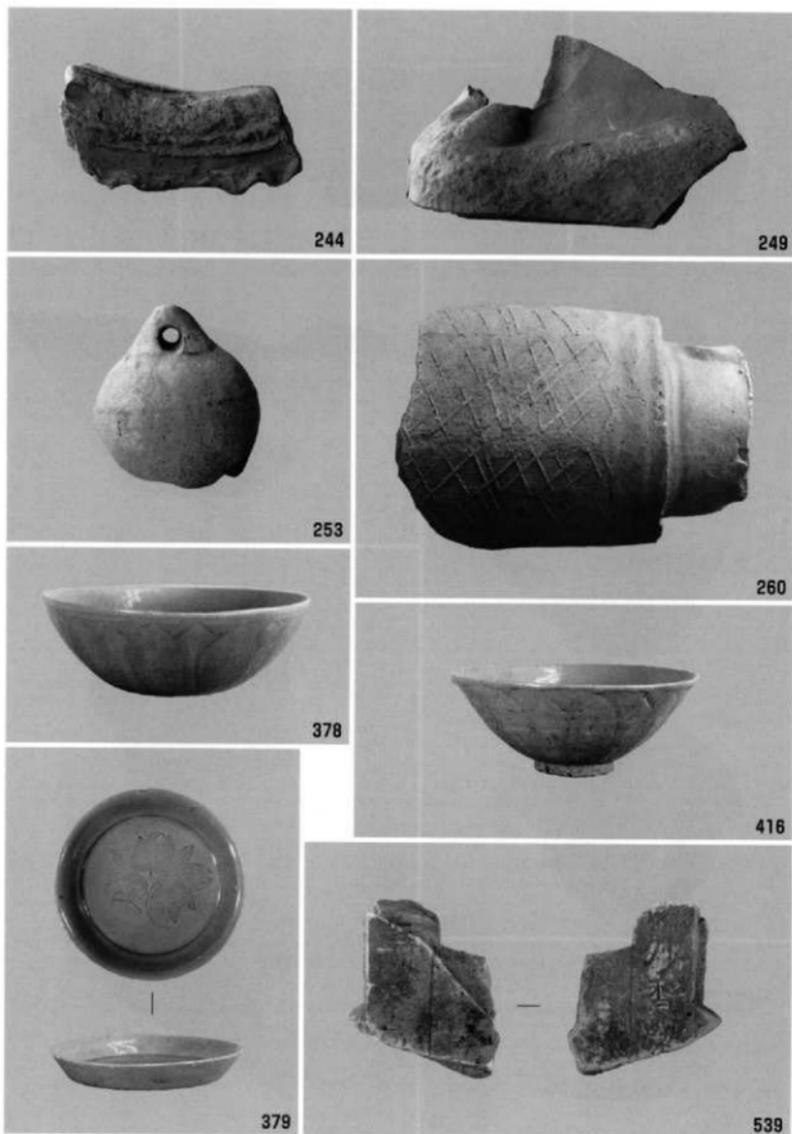
(5) SK2409 (北から)



(6) SK2419 (西から)



A区出土遺物



B区、C区出土遗物

# 報告書抄録

ふりがな	はこぎき							
書名	箱崎18							
副書名	箱崎遺跡第27次調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第812集							
編著者名	中村啓太郎・上角智希							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810 8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
箱崎遺跡13次	福岡市東区 馬出5丁目地内	市町村	遺跡番号	33° 36' 48"	130° 25' 14"	20010607 ~ 20020210	1,449	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
箱崎遺跡13次	集落	中世	井戸 土坑 溝 埋葬遺構		土器 陶磁器 瓦 石製品			

## はこぎき 箱 崎 18

—箱崎遺跡第27次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第812集

2004年（平成16年）3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社川島弘文社  
福岡市東区箱崎本頭6-6-41

